

お　お　つか
大塚遺跡 6

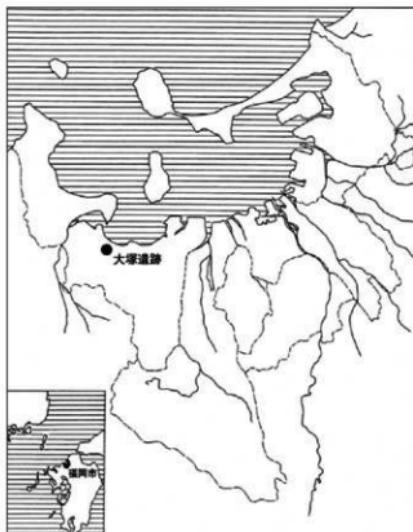
大塚遺跡第9・11次調査報告

2013

福岡市教育委員会

お　お　つか
大塚遺跡 6

大塚遺跡第9・11次調査報告



遺跡略号 OTS-9

OTS-11

調査番号 0651

0662

2013

福岡市教育委員会

卷頭図版 1



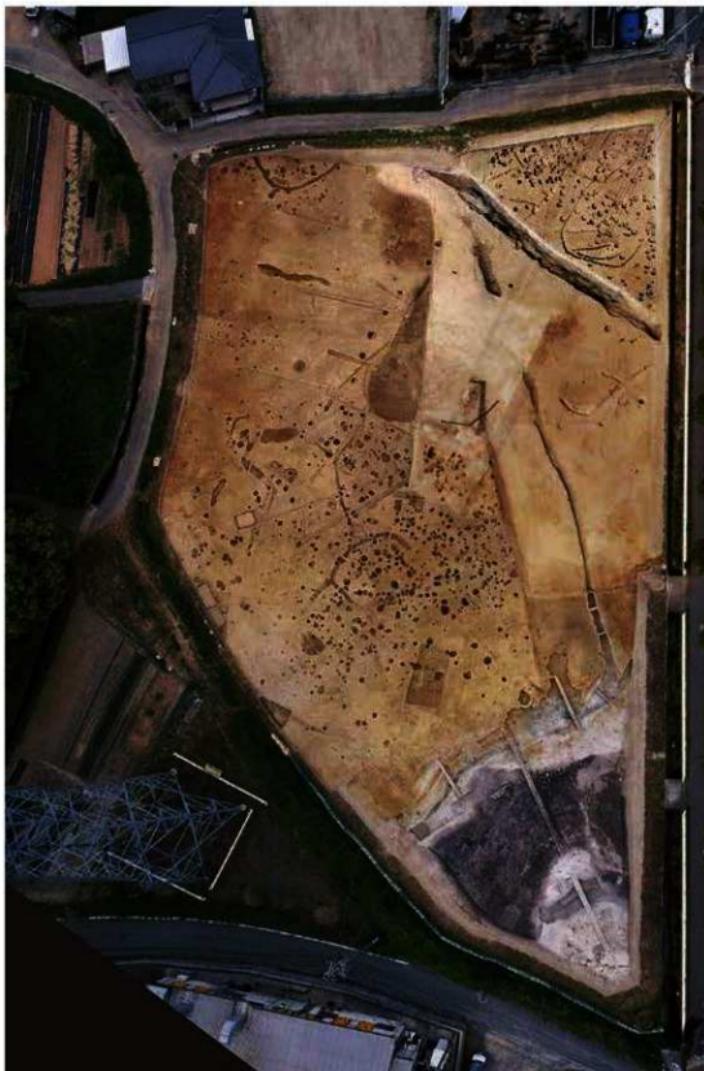
大塚 9 次第 1 地点ブロック③第 2 層黒灰色粘土出土 脚台付片口鉢



大塚 9 次調査第 3 地点 SX01 古墳時代祭祀遺物出土状況（西から）



SX01出土 古墳時代祭祀遺物



大塚遺跡第11次調査区全景（デジタル合成）下が南



2区 SD65内近景（南から）



2区 SD65ブロック⑦第2層出土 内行花文鏡破片

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財を残してきました。しかし開発工事の進展に伴って、消滅の危機に瀕しています。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、数十年にわたって努力を重ねて参りました。

本書は福岡市が進める伊都土地区画整理事業に伴って実施した大塚遺跡第9・11次調査の成果を収めるものです。

第9次調査では今宿五郎江遺跡と同時代の土器群、古墳時代の祭祀遺構・遺物などが検出されました。第11次調査では弥生時代後期の大溝を検出し、既往の調査成果から今宿五郎江遺跡の環濠の一部であることが判明し、同遺跡の拠点的環濠集落としての評価をより確かなものにできました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例　　言

- 本書は福岡市都市整備局による伊都土地区画整理事業に伴い、福岡市西区今宿町字大塚地内において実施した大塚遺跡第9次・第11次調査の報告である。
- 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP　　柵 SA　　掘立柱建物 SB　　堅穴建物 SC　　溝 SD　　祭祀跡 SX
土器棺墓 ST
- 遺構の実測は木下博文のほか以下の者が行った。
9次 今井隆博・瀬戸啓治
11次 山崎龍雄・首波正人・森本幹彦・瀬戸啓治・宮原邦江・山田ヤス子・鳥飼祐太
- 遺物の実測は木下博文・井上蘭子・清金良太が行った。
- 遺構・遺物の写真撮影は木下博文・力武卓治が行った。空中写真撮影は写測エンジニアリングに委託した。
- 製図は木下博文が行った。
- 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
- 本書で使用した国土座標は日本測地系第II系である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収藏・保管される。
- 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 0651	遺跡略号 OTS-9	分布地図番号 120 今宿 0625
所在地 西区今宿町字大塚		調査面積 2050m ²
調査期間 2006.11.7 ~ 3.27		

調査番号 0662	遺跡略号 OTS-11	分布地図番号 120 今宿 0625
所在地 西区今宿町字大塚		調査面積 4018m ²
調査期間 2007.2.1 ~ 9.10		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立置と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
第3章 第9次調査の記録	6
1 調査の概要	6
2 遺構と遺物	6
第1地点	6
第2地点	9
第3地点	9
第4地点	18
第5地点	18
第6地点	24
3まとめ	25
図版1~26	
第4章 第11次調査の記録	53
1 調査の概要	53
2 調査の経過	53
3 1区の遺構と遺物	55
4 2区の遺構と遺物	75
5まとめ	103
図版27~72	

挿図目次

大塚9次

図1 遺跡の位置 (S=1/25000)	3
図2 周辺調査地点位置図 (S=1/3000)	4
図3 大塚遺跡9・11次調査地点位置図 (S=1/1000)	5
図4 第1地点平面および遺物包含層土層断面図 (S=1/200、1/40)	7
図6 第1地点出土遺物実測図 (S=1/2)	8
図7 第1地点平面図 (S=1/200)	9
図8 第3地点平面図 (S=1/200)	10
図9 第3地点西壁土層断面図 (S=1/40)	11
図10 第3地点SX01遺物出土状況図1 上層 (S=1/50)	12
図11 第3地点SX01遺物出土状況図2 下層 (S=1/50)	13

図12 第3地点SX01出土遺物実測図1 (S=1/2)	14
図13 第3地点SX01出土遺物実測図2 (S=1/2)	15
図14 第3地点SX01出土遺物実測図3 (S=1/1)	16
図15 第4地点平面図 (S=1/200)	17
図16 第4地点出土遺物実測図 (S=1/2)	18
図17 第5地点平面図 (S=1/300)	19
図18 SB01, SA04実測図 (S=1/60)	20
図19 SB02・03実測図 (S=1/60)	21
図20 SB07実測図 (S=1/60)	22
図21 SK05・06実測図 (S=1/30)	23
図22 第6地点平面図 (S=1/100)	24

大塚11次

図23 調査区平面図 (S=1/400)	54
図24 SK11・64実測図 (S=1/20, 1/40)	55
図25 ST08・09・10実測図 (S=1/20)	56
図26 SC06実測図 (S=1/40)	58
図27 SD12断面実測図 (S=1/40)	59
図28 SD13・14実測図 (S=1/60)	60
図29 SD40実測図 (S=1/80)	61
図30 SB05・07実測図 (S=1/60)	63
図31 SB58・59実測図 (S=1/60)	64
図32 SB60・61実測図 (S=1/60)	65
図33 SB103・104実測図 (S=1/60)	66
図34 SB105・106実測図 (S=1/60)	67
図35 SB107・108・110実測図 (S=1/60)	68
図36 SB109・111実測図 (S=1/60)	69
図37 SB112実測図 (S=1/60)	70
図38 SB113・114・115実測図 (S=1/60)	71
図39 その他の遺構および包含層出土遺物実測図 (S=1/2, 1/3)	73
図40 SD65および周辺遺構実測図 (S=1/200)	77
図41 SD65土層断面実測図1 (S=1/40)	78
図42 SD65土層断面実測図2 (S=1/40)	79
図43 SD65出土遺物実測図1 (S=1/3)	81
図44 SD65出土遺物実測図2 (S=1/3)	82
図45 SD65出土遺物実測図3 (S=1/3)	83
図46 SD65出土遺物実測図4 (S=1/3)	84
図47 SD65出土遺物実測図5 (S=1/3)	85
図48 SD65出土遺物実測図6 (S=1/3)	86
図49 SD65出土遺物実測図7 (S=1/3)	87
図50 SD65出土遺物実測図8 (S=1/3)	88

図51 SD65出土遺物実測図9 (S=1/3)	89
図52 SD65出土遺物実測図10 (S=1/3)	90
図53 SD65出土遺物実測図11 (S=1/3)	91
図54 SD65出土遺物実測図12 (S=1/3)	92
図55 SD65出土遺物実測図13 (S=1/3)	93
図56 SD65出土遺物実測図14 (S=1/3)	94
図57 SD65出土遺物実測図15 (S=1/3)	95
図58 SD65出土遺物実測図16 (S=1/2)	96
図59 SB93・94・95実測図 (S=1/60)	99
図60 SB97・98・101・102実測図 (S=1/60)	100
図61 SB100実測図 (S=1/60)	101
図62 ST90実測図 (S=1/30)	102

図版目次

卷頭図版 1 大塚9次第1地点ブロック③第2層黒灰色粘土出土 脚台片口鉢

卷頭図版 2 大塚9次第3地点SX01古墳時代祭祀遺物出土状況（西から）

SX01出土古墳時代祭祀遺物

卷頭図版 3 大塚遺跡第11次調査区全景（デジタル合成）

卷頭図版 4 2区SD65内近景（南から） 2区SD65ブロック⑦第2層出土 内行花文鏡破片

大塚9次

図版1 第1地点より大塚古墳を望む（北東から） 第1地点（上空から）

図版2 第1地点遺物包含層堆積状況（南から） 第1地点③遺物出土状況（南から）

図版3 第1地点③遺物出土状況（西から） 第1地点③片口鉢出土状況（西から）

図版4 第2地点（上空から） 第6地点（上空から）

図版5 第3地点（上空から） 第3・5地点遠景（南から）

図版6 第3地点SX01上層遺物出土状況（西から・東から）

図版7 第3地点SX01完掘状況（東から） 第3地点SX01拡張部（西から）

図版8 第3地点木器・石錐出土状況（東から） 第3地点石錐出土状況（東から）

図版9 第4地点（上空から） 第4地点木器出土状況（西から）

図版10 第5地点（上空から） 第5地点SB01・SA04・SB02（南から）

図版11 第5地点SB02・SB03（東から） 第5地点SB07（南から）

図版12 第5地点SK05（北から） 第5地点SK06（南から）

図版13 出土遺物1 図版14 出土遺物2

図版15 出土遺物3 図版16 出土遺物4

図版17 出土遺物5 図版18 出土遺物6

図版19 出土遺物7 図版20 出土遺物8

図版21 出土遺物9 図版22 出土遺物10

図版23 出土遺物11 図版24 出土遺物12

図版25 出土遺物13 図版26 出土遺物14

大塚11次

- 図版27 SK11（北から） SK11甕出土状況（南から）
図版28 SK64（東から） ST08（北西から）
図版29 ST09（北西から） ST10（北西から）
図版30 SC06（南から） SD14（南西から）
図版31 SD13（北東から） SD13（西から）
図版32 SD13内ピット石錐出土状況（東から） SD40（南から）
図版33 SD12（南から） SD12土層断面（南から）
図版34 SB05（南東から） SB61（北東から）
図版35 SB60（北西から） 谷部西半・北岸包含層土層断面（東から）
図版36 谷部西半 甕出土状況 谷部東半北岸 土器群1（東から）
図版37 谷部西半北岸 土器群2（西から） SD65（北西から）
図版38 SD65ベルト1 土層断面 SD65ベルト2 土層断面
図版39 SD65ベルト3 土層断面 SD65ベルト4 土層断面
図版40 SD65ベルト5 土層断面 SD65ベルト6 土層断面
図版41 SD65③第1層遺物出土状況（南から） SD65④第1層遺物出土状況（南から）
図版42 SD65⑤第2層遺物出土状況（東から） SD65⑥第2層遺物出土状況（南から）
図版43 SD65ベルト②第2層ガラス勾玉出土状況（南東から）
SD65ベルト③第1層ガラス玉出土状況（南から）
図版44 SD65⑥第1・2層石製品出土状況（北から）
SD65④第4層壺出土状況（北から）
図版45 SD65③第5層土器群出土状況（南から）
SD65⑤第5層壺出土状況（北から）
図版46 SD65⑥第5層土器群出土状況（南から） SD65⑦第5層壺出土状況（北から）
図版47 SD65①第6層土器出土状況（北から） SD65ベルト③第6層土器出土状況（北西から）
図版48 SD65④第7層土器群出土状況（南から） SD69（南西から）
図版49 SD80・SC89（南から） SD80遺物出土状況（南から）
図版50 SB93（北西から） SB94（北西から）
図版51 SB97（南から） SB98（北東から）
図版52 SC96（西から） ST90（西から）
図版53 出土遺物1 図版54 出土遺物2
図版55 出土遺物3 図版56 出土遺物4
図版57 出土遺物5 国版58 出土遺物6
図版59 出土遺物7 国版60 出土遺物8
図版61 出土遺物9 国版62 出土遺物10
図版63 出土遺物11 国版64 出土遺物12
図版65 出土遺物13 国版66 出土遺物14
図版67 出土遺物15 国版68 出土遺物16
図版69 出土遺物17 国版70 出土遺物18
図版71 出土遺物19 国版72 出土遺物20

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市住宅都市局（前都市整備局）は、福岡市西区今宿・女原・徳永一帯で伊都土地区画整理事業を実施している。施行面積約130haに及ぶ。平成8（1996）年11月、都市整備局伊都区画整理事務所より埋蔵文化財課に区画整理事業地内における埋蔵文化財の有無について照会がなされ、同年12月～翌年2月に試掘調査を実施、遺跡の範囲を確認した。その内容に基づき福岡市教育委員会は平成14（2002）年から発掘調査を行っている。

9次調査は、平成18（2006）年11月7日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。12月1日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、平成19（2007）年3月27日に終了した。

11次調査は、平成19（2007）年2月1日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。順次遺構の検出・精査・実測を進め、同年9月10日に終了した。

2 調査体制（当時）

事業主体 福岡市都市整備局

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

9次調査

調査総括 埋蔵文化財第2課長 力武卓治

調査第2係長 米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課 後藤泰子

調査担当 試掘調査 埋蔵文化財第1課事前審査係 星野恵美

本調査 調査第2係 木下博文

11次調査

調査総括 埋蔵文化財第2課長 力武卓治

調査第1係長 池崎譲二（着手～4月初） 杉山富雄

調査第2係長 米倉秀紀（着手～4月初） 常松幹雄

調査庶務 文化財管理課 後藤泰子（着手～4月初） 井上幸江

調査担当 調査第1係 宮井善朗（着手～4月初） 調査第2係 木下博文

整理・報告時（平成24年度）

総括 経済観光文化局埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

調査第2係長 皆波正人

庶務 埋蔵文化財審査課管理係 古賀とも子

整理・報告 埋蔵文化財センター 木下博文

整理作業 石橋ゆかり 大園由紀子 大原洋子 庄島さよ子 高野四郎 富田文代 富田安恵

松尾トシエ

第2章 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

福岡市西部にそびえる高祖山からは、北側の海に向かって細長い丘陵がいくつも派生しており、その上に遺跡が展開している。大塚遺跡はその内の一つである。

遺跡の北方には今宿平野と呼ばれる小平野が広がり、東を長垂山系にさえぎられている。早良平野に向かうには海岸の陸路を進まねばならず、現在でもJR筑肥線、国道202号、今宿バイパスなど交通路が集中しており、福岡地域と糸島地域とをつなぐ交通の要所となっている。

古くには海が深く湾入しており（古今津湾）、その湾口に突き出すように伸びる砂洲の先端に玄武岩の産出地である今山があり、大塚遺跡のある丘陵からは間近に見える。

2 歴史的環境

弥生時代には、古今津湾の湾口に今山遺跡があり、そこで採取される玄武岩を素材とし磨製石斧が前期末より製作され、九州各地に流通した。今宿五郎江遺跡では、11・12次調査で集落の西、9・10次調査で東を限る南北方向の大溝が検出されている。大溝からは弥生時代中期後半～後期・終末の大量の土器とともに、農工具・机・短甲・飾板などの木器、黒漆地に朱漆の繩線と三角・格子目文様を施した円筒形漆器、錘・槌・鉗具などの石器、小銅鐸・鐵・小型仿製鏡・中国製内行花文鏡片・貨泉などの銅製品といった多種多様な遺物が出土している。大量の土器の中には、朝鮮半島の楽浪系土器や日本列島内の各地域から搬入された土器も含まれており、地域間交流的一大拠点としての性格が浮き彫りになった。

大塚遺跡では、今宿バイパス建設に伴う福岡県の調査を皮切りに現在まで18次にわたる調査を実施している。今回報告する9次調査では、今宿五郎江集落の西側に位置する谷で集落の存続時に投棄されたと見られる弥生時代後期～終末の大量の土器が出土しており、その中には脚台付片口鉢といった珍しい器形も含まれている。

古墳時代には、東の今宿青木から西の飯氏にかけて丘陵上に首長墓が全期間を通じて築造される。その内の1つ大塚遺跡の中心である大塚古墳は後期の前方後円墳である。鋤崎・丸隈山・若八幡宮・山ノ鼻1号・飯氏二塚・兜塚の諸古墳とともに今宿古墳群として、国史跡に一括指定された。その他多数の群集墳が分布しており、一大埋葬地となる。

生活・生産遺構にも注目すべきものがある。大塚古墳から谷を挟んだ西側の丘陵では、半円形周溝を持つ方形竪穴住居1棟が検出されている（14次）。床面中央部に硬く焼けしまった炉を持ち、鉄の小切片が多数出土しており、鍛冶工房と見られる。北壁に付設されたカマドも、弥生時代終末の土器が伴っており、最古の部類に属す。

大塚古墳の立地する台地上では中世の屋敷跡と見られる掘立柱建物群が検出されており（10・12・13・17次）、連縫と集落・埋葬地として利用され続けている。



図1 遺跡の位置 (S=1/25000)

- | | | | |
|-----------|----------|----------|----------|
| 1 大塚道路 | 6 今宿道路 | 11 丸隈山道路 | A 鷺崎古墳 |
| 2 今宿五郎江道路 | 7 女原笠掛道路 | 12 蓮町道路 | B 大塚古墳 |
| 3 谷道路 | 8 女原道路 | 13 徳永B道路 | C 山ノ鼻1号墳 |
| 4 青木道路 | 9 徳永B道路 | 14 徳永A道路 | D 山ノ鼻2号墳 |
| 5 今山道路 | 10 徳永A道路 | | E 若八幡宮古墳 |
| | | | F 丸隈山古墳 |

図2 地図周辺測量点位置図 (S= 1/3000)

大塚道路	
0769	15k.
8101	3 次
7603	1 次
0659	10k.
8236	4 次
0702	12k.
8640	6 次
0715	13k.
7318	2 次
8944	7 次
0855	16k.
0726	14k.
8728	3 次

谷道跡	
0055	5 次
0718	13k.
0806	1 次
0158	7 次
0124	6 次



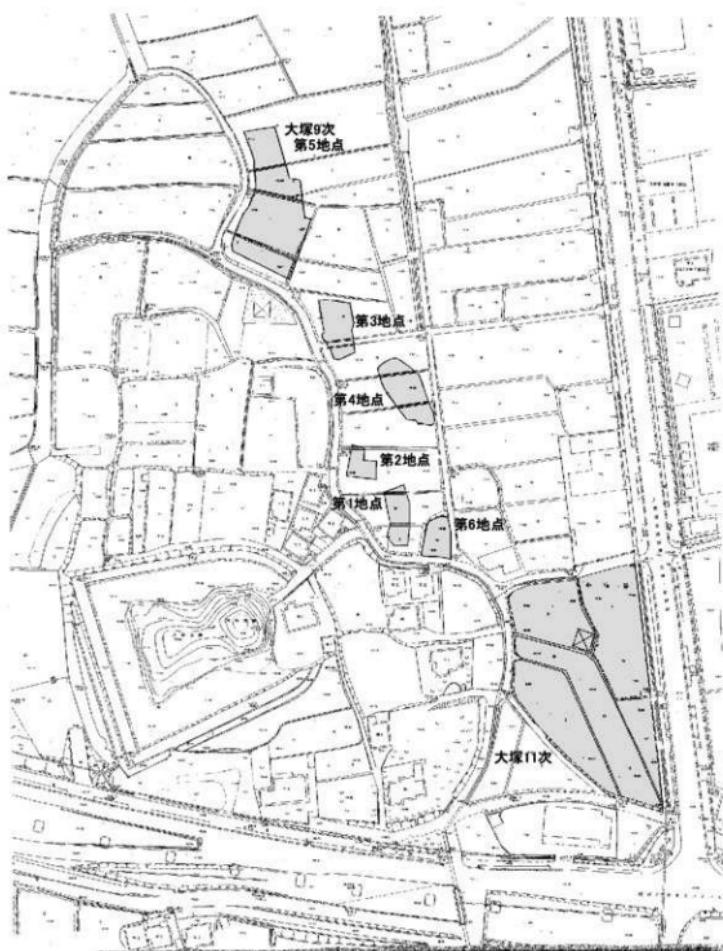


図3 大塚遺跡第9・11次調査地点位置図 (S=1/1000)

第3章 第9次調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、東隣の今宿五郎江遺跡との間に形成された南北の谷筋に当たる。弥生時代の遺物を包含する黒灰色粘土層が確認された。調査範囲は期間の制約と試掘調査の所見から、試掘トレーンチを中心に拡張し、遺物の広がりを見定めて設定した。これに丘陵上で遺構が確認された箇所を加え、計6地点を調査した。地点番号は着手順に第1～第6まで付けており、第1～4地点が谷部の遺物包含層、第5・6地点が丘陵部の調査となる。

第1地点は谷部の最南端に近い場所に位置し、7次調査地点に隣接する。東隣の今宿五郎江遺跡側の丘陵の肩を検出した。今宿五郎江集落が営まれた際に投棄されたものと考えられる弥生中期～終末の土器・石器が多量に出土した。

第2地点は第1地点の北に位置し、大塚古墳の所在する丘陵の東側の肩を確認した。

第3地点は第2地点の北に位置し、すぐ西側を走る里道から急激な段落ちになっている。丘陵の肩は確認できなかった。里道の西側で行われた13次調査では丘陵の基盤面が表土直下で確認されており、丘陵の肩は里道の下にあると見られる。

丘陵側から谷部に流れ込む溝状の落ち込みから古墳時代中期前半の祭祀遺物が一括状態で出土した。

第4地点は第3地点の東南に位置し、今宿五郎江遺跡側の丘陵が緩やかに谷部へ落ちる。

第5地点は大塚古墳の所在する丘陵上に位置し、古墳および第3地点の北方に当たる。掘立柱建物4棟・柵跡・鉄滓廐棄土坑1基・溝・土坑を検出した。

第6地点は第1地点の東隣で、今宿五郎江遺跡側の丘陵上に位置し、調査範囲の最高地点である。ピット・溝を検出した。

遺構は地点ごとに、ピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

以下地点ごとに記述する。

第1地点（図4、図版1・2・3）

遺物は北から①～③ブロックに分け取り上げた。遺物包含層は②の南端・③では黒灰色粘土の上に茶褐色粘土が堆積し、2層となっている。茶褐色粘土を第1層、黒灰色粘土を第2層とする。

出土遺物

①出土遺物（図6、図版13）

1は鉢である。褐色を呈する。2は石錘である。長さ4.2cm、幅1.2cm、両端に径0.25cmの穴が開く。

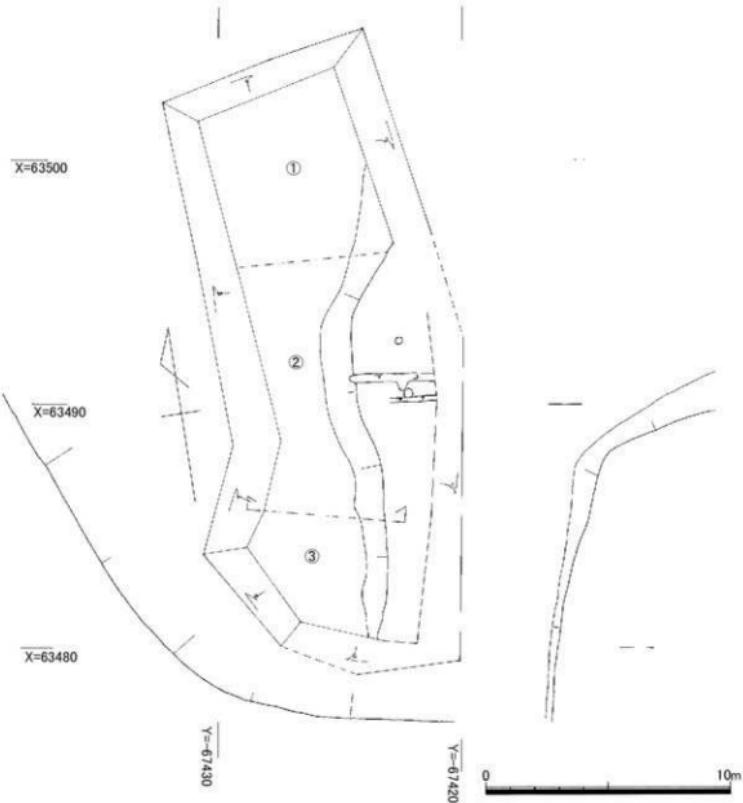
②出土遺物（図6、図版13）

3は石錘である。長さ4.2cm、幅1.5cm、幅0.2cmの溝を刻む。

4は脚付きの壺である。黄橙色を呈す。5は支脚である。黄橙色を呈す。6はミニチュア土器の杯である。橙色を呈す。7は壺である。淡褐色を呈し、黒斑がみられる。8は鉢である。灰褐色を呈す。

9は輝緑凝灰岩製穂摘具である。残存横幅7.6cm、縦長3.9cm、厚さ0.6cm、孔径最大0.65cm、最小0.35cmで孔心々間長3.0cmである。

4・7が1層、その他は2層の出土である。



第1地点包含層土層断面

- 1 茶褐色粘土
- 2 黒灰色粘土
- 3 黄褐色砂混土
- 4 黄白色砂
- 4 黄褐色雜混土（地山）



図4 第1地点平面および遺物包含層土層断面図 ($S=1/200, 1/40$)

③出土遺物

第1層 茶褐色粘土出土 (図6、図版14)

10は甕である。内外面が淡褐色、断面が黒色を呈し、胴部に黒斑がみられる。

14は輝緑凝灰岩製穂摘具である。横幅11.25cm、縦長4.9cm、厚さ0.7cm、孔径最大1.15cm、最小0.4cmで孔心々間長2.3cmである。

第2層 黒灰色粘土出土 (図版14~17)

11・16・26・27は甕である。11は黄橙色、26は淡褐色、27は浅黄橙色を呈し、11は底部付近、26・27は胴部下半に黒斑がみられる。

12は高杯の脚部である。橙色を呈し、裾部の半分に黒斑がみられる。

13・24・25・30は鉢である。13は浅黄橙色、24・25・30は淡褐色を呈す。

17~23はミニチュア土器の杯である。17・18・22は淡赤褐色、19~21・23は浅黄橙色を呈す。16~26は図版3に見られるように一括で出土した。

28・29は器台である。ともに黄橙色を呈す。

31は短頸壺である。黄橙色を呈す。

32(巻頭図版1)は脚台付片口鉢である。器高20.05cm、口径は片口部で24.3cm、以外で20.4cm、脚台径13.0cmである。黄橙色を呈す。調整は体部外面、内面の口縁部直下、脚台の内面がハケ目、脚台の外側がナデである。2mm大の白色砂粒を少量含む。片口の直下とその反対側の胴部に黒斑がみられる。

15・33・34は石錘である。15は高さ8.9cm、平面9.0cm×6.9cmの楕円形で、径3.4×4.4cmの孔が貫通する。33は高さ8.3cm、平面9.5×10.2cmの楕円形で、径3.9×3.0cmの孔が貫通し、径1.4cmの孔が側面下部から底部にかけて貫通している。34は平面9.1×7.4cmの楕円形で、径2.8cmの孔が貫通している。

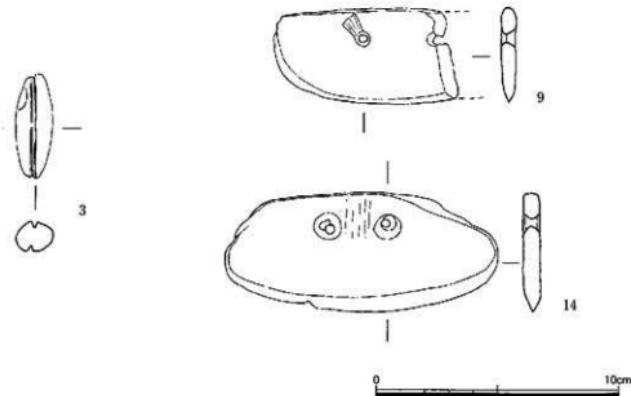


図6 第1地点出土遺物実測図 (S=1/2)

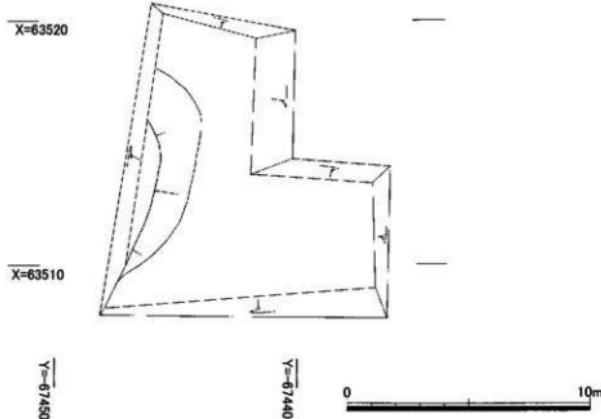


図7 第2地点平面図 (S=1/200)

第2地点 (図7、図版4)

谷部の包含層から弥生中期以降の土器片が出土している。

第3地点 (図8、図版5)

SK01 (図9~11、図版6・7)

丘陵側から谷に向かってのびる東西方向の溝状の落ち込みである。黒灰色の粘土・腐葉土層が堆積しており、溝水状況であったとみられる。その中から小型丸底壺・手捏土器600点以上、ガラス・滑石・碧玉製玉類計1764点、滑石製剣形模造品1点・有孔円板8点が一括して出土した。須恵器の伴出が直上の層からであること、小型丸底壺の形態、地形から、古墳時代中期前半の水辺の祭祀跡とみられる。遺物の出土位置およびレベルは落ち込みの北側部分、標高4mを境に上層が10cm上、下層が10cm下までの間に特に集中している。以下の遺物の記述に当たっては、出土状況図に従い東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットとする1m四方のグリッドで、平面位置を示すこととする。

出土遺物 (図12~14、図版18~25)

35~120は手捏土器である。121~128は小型丸底壺である。

土製品

129~132は臼形である。129は器高6.25cm、口径4.1cm、底径4.7cmで、灰白色を呈し、胎土は精良である。胴と脚台の接合部を強くなでつけている。2A出土。130は器高5.9cm、口径5.6cm、4.4cmで、褐色を呈し、口縁・胴部・脚部内面の一部に黒斑がみられる。132は褐色を呈し、2B出土。

133は鉢形である。褐色を呈し、4B出土。

134は勾玉である。3B出土。長さ3.9cm、厚さ1.5cm、孔径0.25cmで、灰褐色を呈す。

135は鏡形である。3B出土。最大径4.95cm、厚さ0.8cmで、捺り出しで鏡の攝みを表現している。外面に指頭圧痕が残る。暗褐色を呈す。

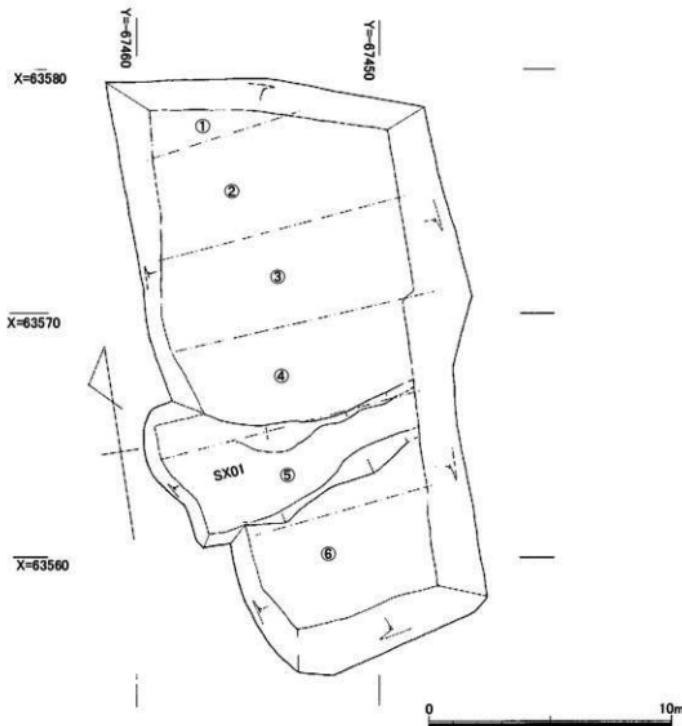


図8 第3地点平面図 (S= 1 /200)

滑石製品 (136~146、148~153)

有孔円板8点、劍形模造品1点、勾玉2点、白玉1699点（完形1505点、破片194点）、琰玉4点、管玉2点、未成品8点が出土している。

136~143は有孔円板である。136は①6B出土。径3.3cm、厚さ0.25cm、孔径0.15cmで孔は3ヶ所開く。137は②5B出土。径2.9cm、厚さ0.2cm、孔径0.2cmである。138は③3B出土。径1.6cm、厚さ0.25cm、孔径0.15cmである。139は径2.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.15cmである。140は径1.8cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cmである。141は径2.1cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cmである。142は径1.6cm、厚さ0.3cm、孔径0.15cmである。143は径1.9cm、厚さ0.3cm、孔径0.15cmである。

144・145は勾玉である。144は長さ0.9cm、幅0.4cm、145は長さ1.2cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmである。146は劍形模造品である。2B出土。長さ4.7cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cmである。

147は三つ葉形の用途不明品である。長さ2.45cm、幅2.2cm、厚さ0.45cmである。

148は紡錘車である。径4.6cm、厚さ0.6cm、孔径0.7cmである。

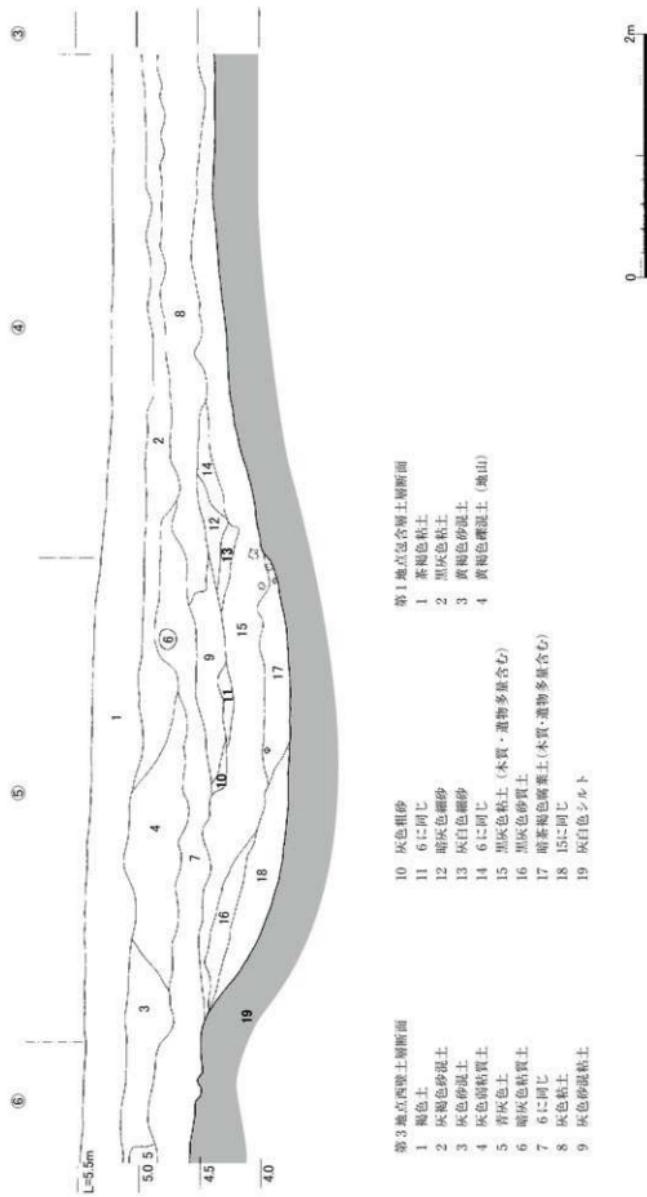


図9 第3地点西壁土層断面図 ($S = 1 / 40$)

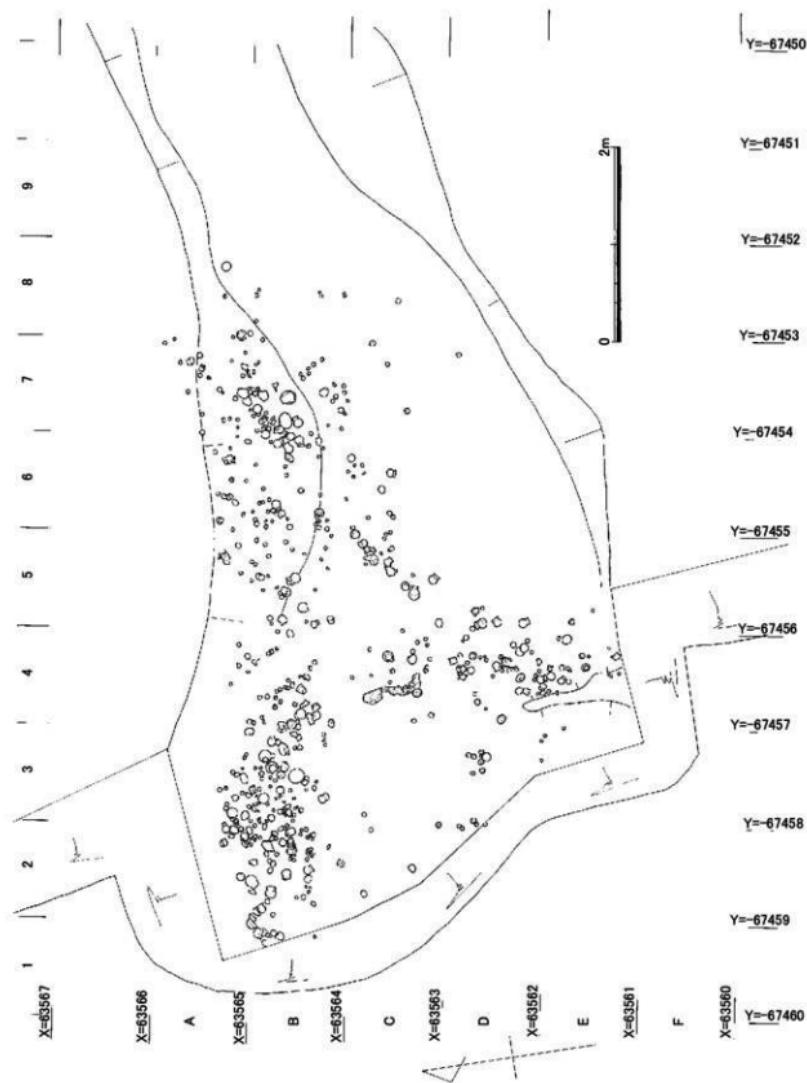


図10 第3地点SX01遺物出土状況図1 上層 (S=1/50)

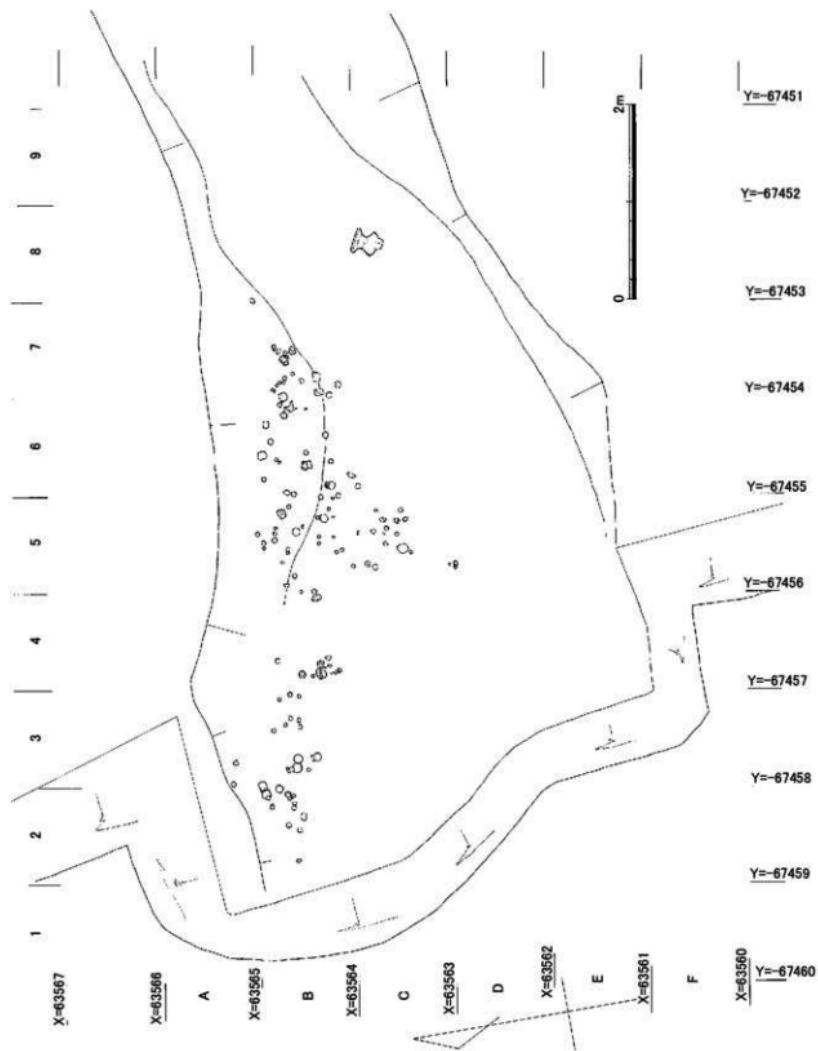


図11 第3地点SX01遺物出土状況図2 下層 (S=1/50)

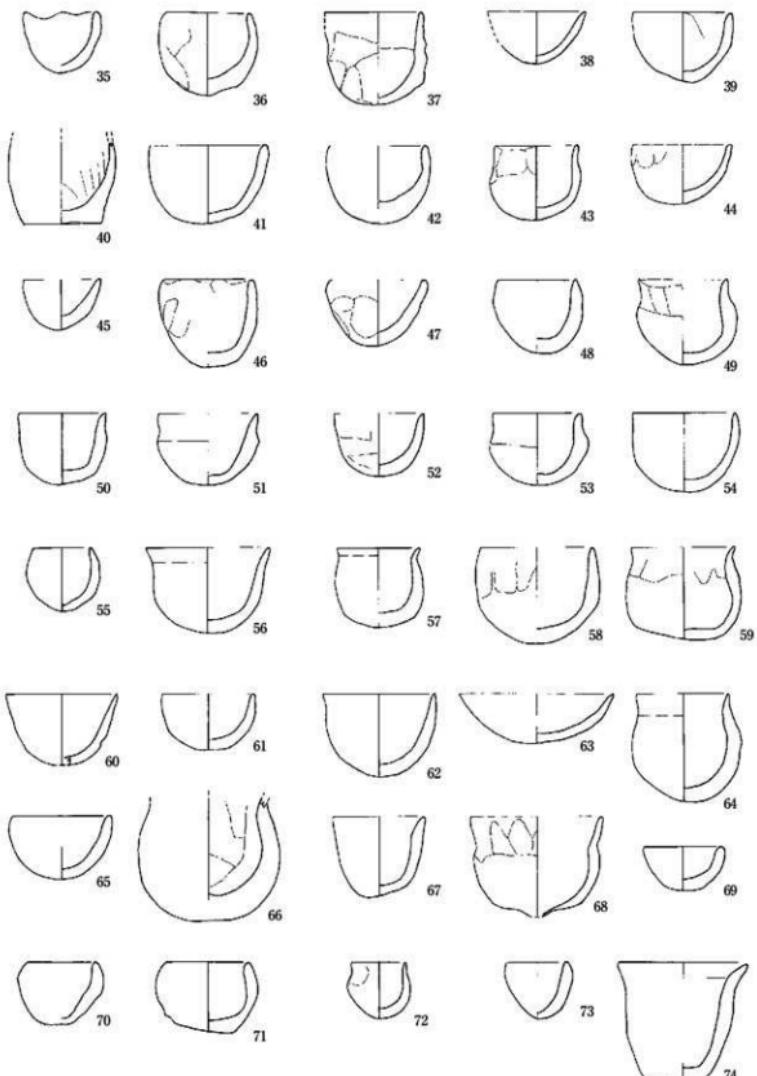


図12 第3地点SX01出土遺物実測図1 (S=1/2)

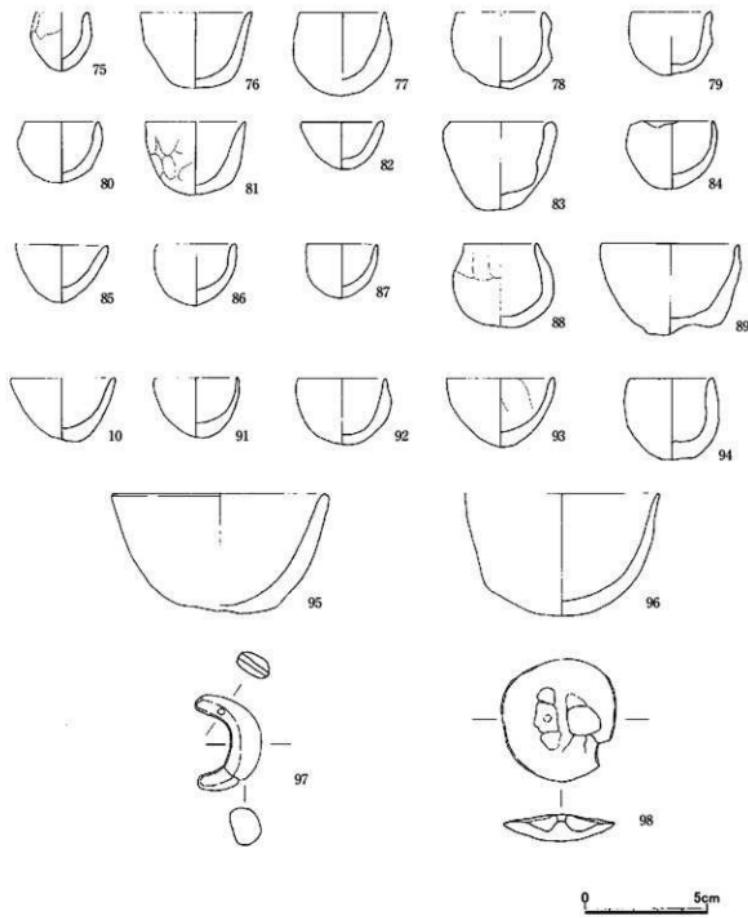


図13 SX01出土遺物実測図 2 (S=1/2)

149～151は棗玉である。149は長さ1.0cm、幅0.7cm、孔径0.2cmで④6A出土。150は長さ0.75cm、幅0.65cm、孔径0.2cmである。151は長さ0.95cm、幅0.7cm、孔径0.2cmである。

152-153は管玉である。152は長さ2.0cm、径0.35cm、孔径0.2cmである。153は長さ1.65cm、径0.5cm、孔径0.2cmである。

白玉は側面が丸みを帯びる径4mm、厚さ3mmのもの、丸みを帯びない径3mm、厚さ2mmのものに大別できる。

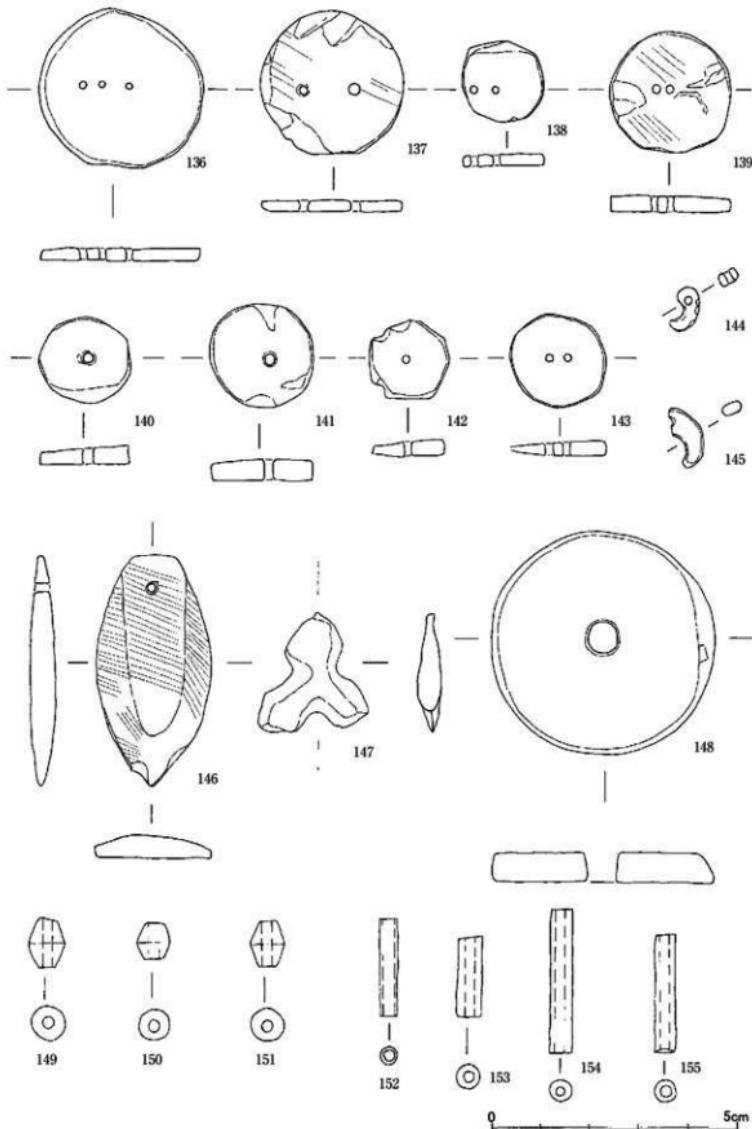


図14 SX01出土遺物実測図3 (S=1/1)

碧玉製品（図14、図版24）

管玉2点、破片1点が出土している。154・155は管玉である。154は長さ2.95cm、径0.45cm、孔径0.2cmで⑧5B、155は長さ2.4cm、径0.4cm、孔径0.2cmで⑨5B出土。

ガラス小玉

ガラス小玉の出土点数は計265点および、色調別の内訳は青196点（完形187点、破片9点）、緑49点（完形49点、破片7点）、緑11点、緑青1点、紫1点である。

その他の出土遺物（図版25・26）

156-159は石錘である。

160は土鍤である。長さ7.8cm、幅3.9cmで、径1.6cmの孔が貫通する。灰白色を呈し、1mm大の白色砂粒を多量含む。②出土。161は円筒埴輪片である。橙色を呈し、突帯をなでつけ、調整は外面がハケ目、内面はナデである。162は須恵器の長頸壺である。160-162とともにSX01より上層から出土した。

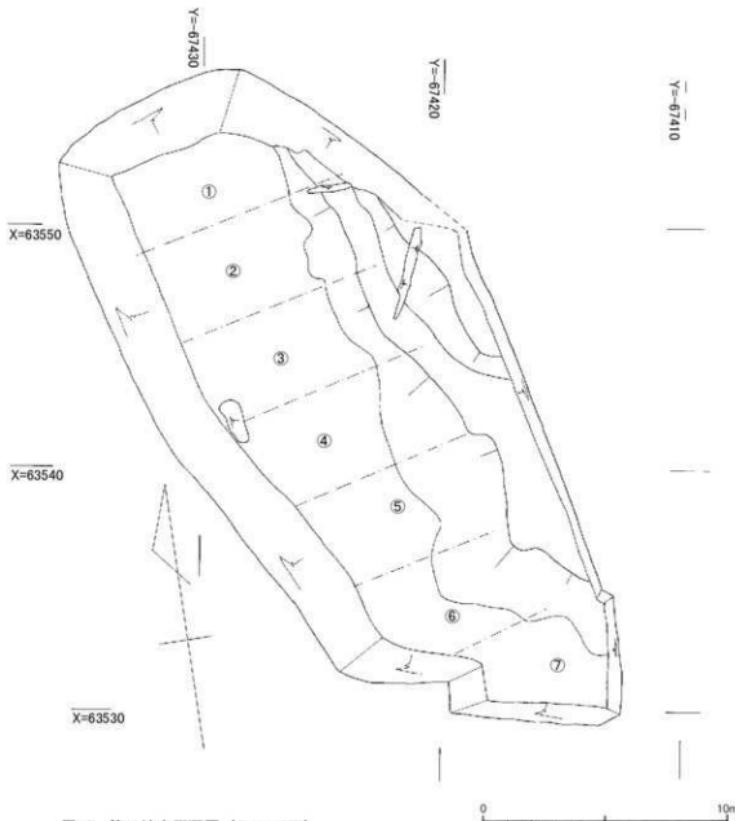


図15 第4地点平面図 (S=1/200)

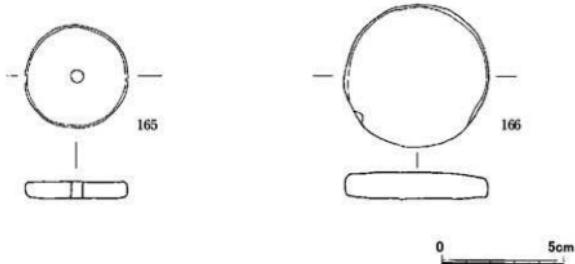


図16 第4地点出土遺物実測図 (S=1/2)

163は用途不明の木製品で長さ26.0cm、幅4.0cm、厚さ2.4cmの長方形で、両端各2.0cmがほぞとなり、一側面に 2.5×1.2 cm、 2.0×1.3 cmの方形孔を開けており、他の部材を差し込んだものと見られる。紡織具の一種か。

第4地点 (図15、図版9)

第3地点の南東に位置し、今宿五郎江側の丘陵が緩やかに谷部に落ちる。

出土遺物 (図16、図版26)

164は穂摘具である。横幅10.4cm、縦長4.3cm、厚さ0.6cm、孔径0.4~0.6cm、孔心々間長2.2cmである。

165・166は滑石製紡錘車である。165は径4.2cm、厚さ0.7cm、孔径0.5cmである。^③出土。166は径5.9cm、厚さ1.1cmで未穿孔である。

167は直柄鋤である。

第5地点 (図17、図版10)

全調査地点の最北に位置し、大塚古墳が立地する丘陵部にあたる。

掘立柱建物

SB01・SA04 (図18、図版10)

桁行3間以上×梁行2間の南北棟である。建物東側の南2間分に櫛を付設する。柱間は2.1~2.6m、ピットの深さは36~67cmで、6ヶ所に柱痕跡が残る。主軸は磁北より8°西偏する。

SB02 (図19、図版10・11)

2間四方の東西棟である。柱間は桁行が2.0m~2.16m、梁行が1.7~1.9mで桁行がやや長い。ピットの深さは18~44cmで、1ヶ所に柱痕跡が残る。主軸は磁北より7°西偏する。

SB03 (図19、図版11)

2間四方のほぼ正方形プランである。柱間は1.4~2.5m、ピットの深さは7~57cmである。主軸は磁北より8°西偏する。

SB07 (図20、図版11)

桁行3間×梁間2間の南北棟である。北東隅のピットは搅乱で失われている。柱間は桁行が2.14~2.4m、梁行が1.5~1.9mで桁行がやや長い。ピットの深さは13~63cmである。主軸は磁北より5°西偏する。

本地点の里道を挟んで西側で行われた10次調査地点では、以上の建物と覆土やピットの形状が類似する掘立柱建物がまとまって検出されており、一連のものであろう。

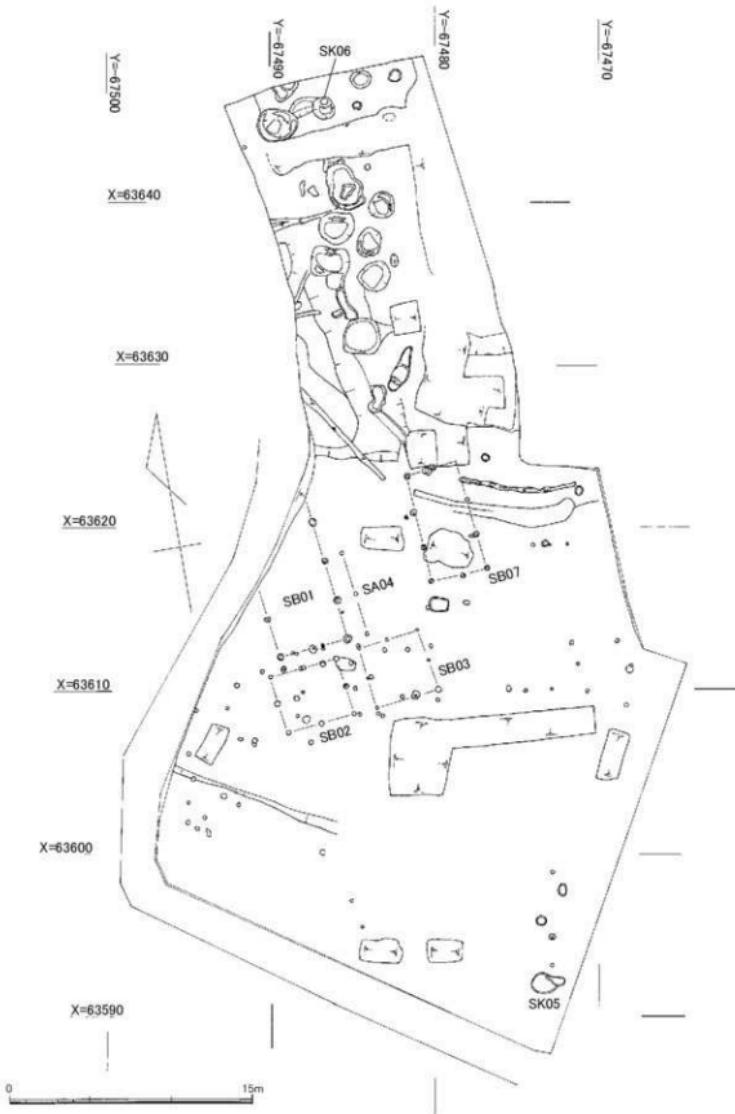


図17 第5地点平面図 ($S=1/300$)

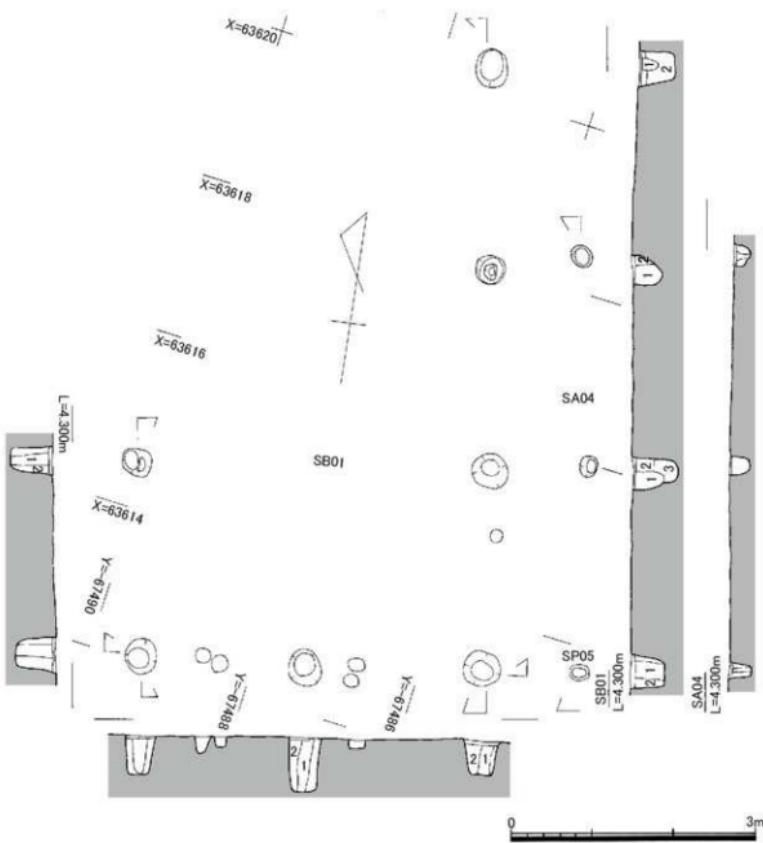


図18 SB01・SA04実測図 (S=1/60)

1、3 暗灰褐色粘質土
2 黄褐色粘質土（暗灰褐色粘質土混）

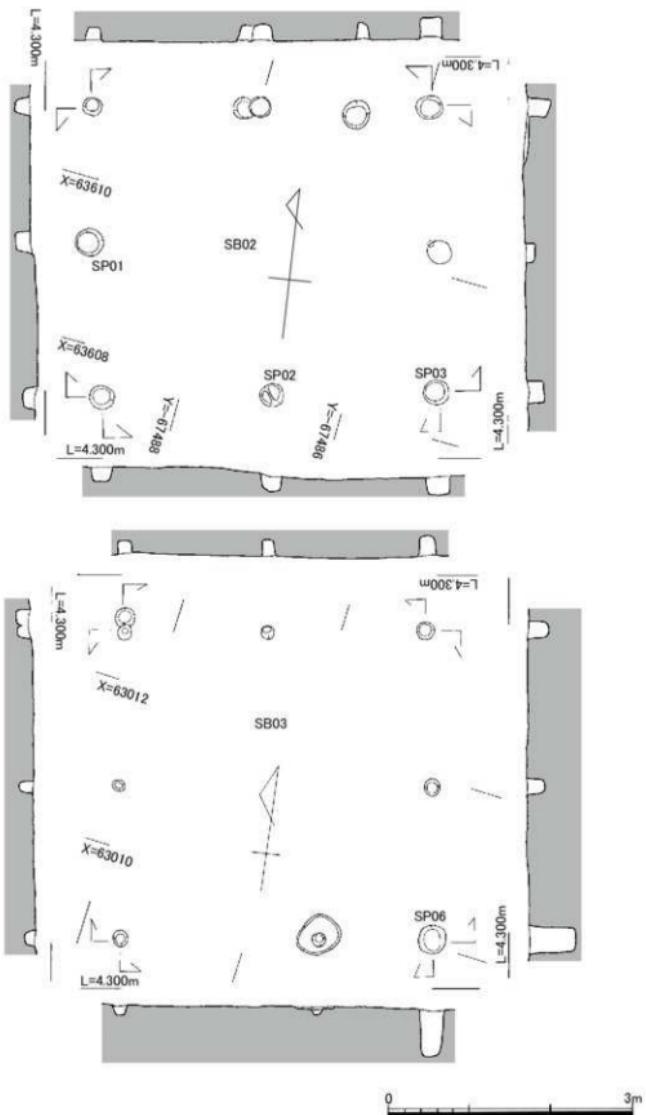


図19 SB02・03実測図 (S=1 / 60)

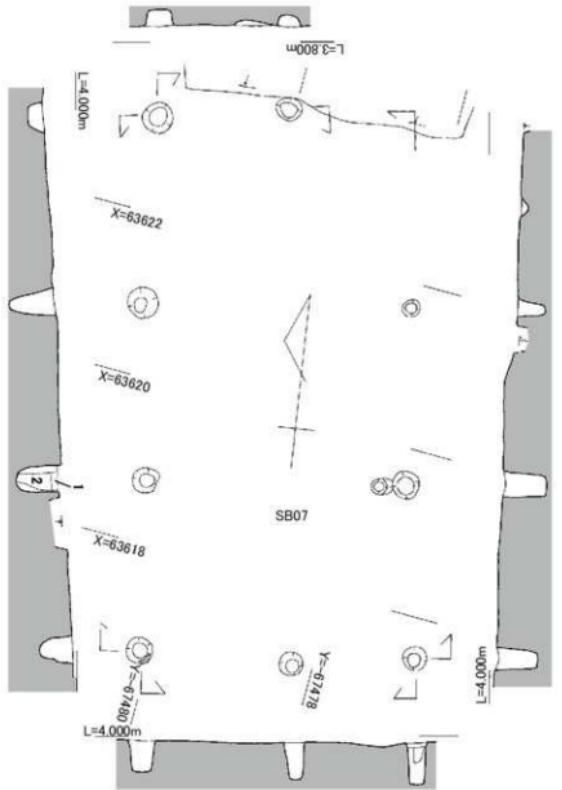


図20 SB07実測図 (S=1/60)

- 1 灰褐色粘土
- 2 灰褐色粘土粒混黄褐色粘土

土坑

SK05 (図21、図版12)

地点内の南東隅部で検出した。東西2.03m、南北1.32mの不整楕円形で、深さ0.3mである。鉄滓が出土し、炭が堆積していたが赤く焼けてはいなかった。

SK06 (図21、図版12)

地点内の北端部中央で検出した。1.35×1.29mの略方形で、深さ0.64mである。上層から甕が出土しており弥生中期以降の遺構であることは間違いない。しかし丘陵の赤褐色粘土のような固い基盤ではなく、灰褐色砂質土で谷の中に近い柔らかい土層を基盤とし、覆土も暗褐色粘土である。地点内の北半部は同様の土坑状遺構が数基まとまって検出されているが、出土遺物が極めて少なく、全くないものもあり、性格が特定しにくい。

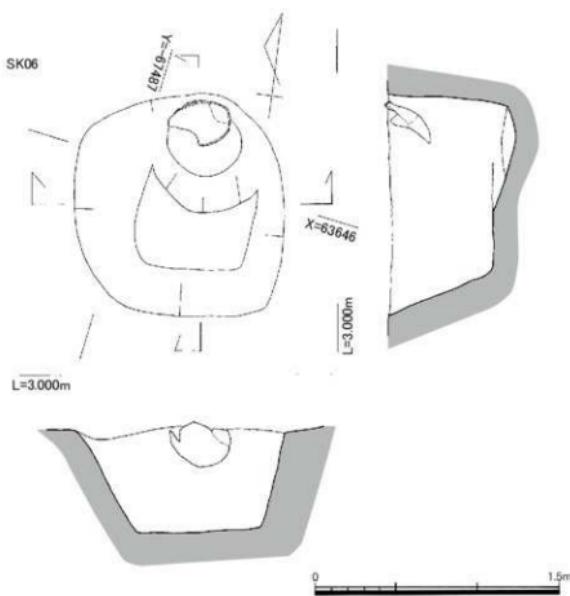
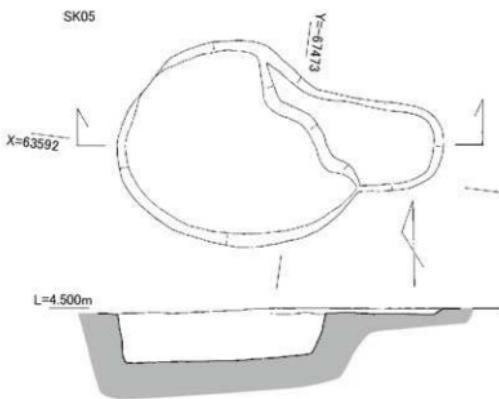


図21 SK05・06実測図 (S= 1 / 30)

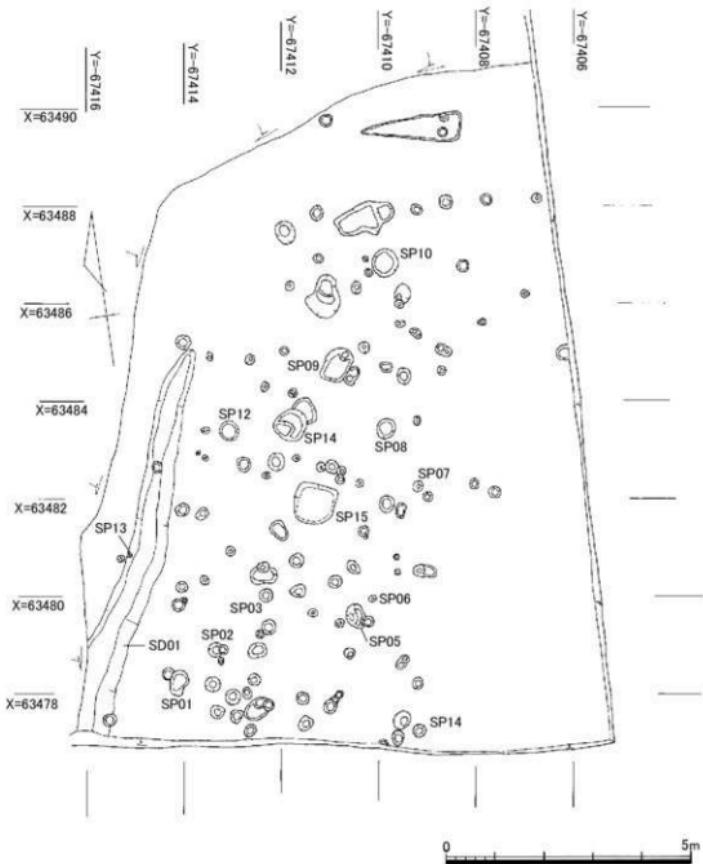


図22 第6地点平面図 ($S=1/100$)

第6地点 (図22、図版4)

第1地点の東、丘陵の上に位置し、調査地点の中で最高所に当たる。ピットと溝が検出されているが、建物は復元できず、出土遺物量も少なく、時期も不明確である。

溝

SD01 (図22、図版4)

調査区の南西端、丘陵の落ち際に沿って造られており、残存の長さ8.0m、深さ0.1mである。削平のためか、北端部まではめぐらない。埋土は灰褐色土で、時期を決定できる遺物はない。中世以降とみられるが、調査区の東側隣接地で実施された今宿五郎江遺跡14次調査区で検出されている溝と一緒にるものである可能性がある。

3 まとめ

9次調査における調査成果として、今宿五郎江遺跡側の丘陵との間に位置する谷部に堆積する遺物包含層で弥生時代後期を中心とする第1地点、古墳時代中期前半の祭祀遺物を中心とする第3地点、大塚古墳が立地する丘陵の一部に当たる第5地点における掘立柱建物群が際立つ。

第1地点の出土遺物は弥生時代後期後半～終末に位置づけられ、中には完形のものが多数含まれるなど、保存状態が良好で一括投棄されたとみられる。またミニチュア土器と鉢などがまとまった状態で出土するなど、祭祀を行ったとみられるものもある。東隣にある今宿五郎江遺跡に伴い、場所も谷頭に近く、投棄場ないし祭祀場であった可能性が考えられる。

その土器群の中でも特に巻頭図版1に示した脚台付片口鉢は、極めて珍しい器形である。類例は千葉県市原市の国府関遺跡、奈良県の伴堂東遺跡、熊本県山鹿市の蒲生・上の原遺跡の3例を現在確認している。脚台のない片口鉢は国府関遺跡、福岡県新宮町の夜白遺跡でみられ、後者は水銀精錬に使用されたとみられている。いずれも弥生時代終末に位置づけられている。伴堂東例は畿内5様式系のたたき甕と東海系の台付甕が伴っており、弥生終末に位置づけられ、かつ鉢そのものも東海系との評価がなされている。静岡県西部の遠江地域に分布する菊川式土器の中には、脚台付、脚台無し両方の片口鉢が存在する。

しかし大塚例は胎土・調整技法も在地のものであり、九州内で生産されたものとみられる。しかし器形そのものは九州内部では現在のところ系譜がたどれない。

今宿五郎江遺跡出土の器台の中には、南関東地方で「異形器台形土器」と呼ばれる頭部が袋状になったものが見られる。南関東では弥生時代終末に位置づけられているものである。これらは偶発的な類似なのか、何らかの交流・影響関係があつて存在するものなのか、にわかに答えは出せない。しかし脚台付片口鉢と合わせて今後注目すべき資料ではないかと考える。

第3地点では古墳時代の祭祀遺物が一括で大量に出土した。中期の前半で須恵器の出現前、地形より大塚古墳の立地する丘陵から谷へ注ぎ込む流路に伴う水辺の祭祀遺構と考えられる。

出土遺物は、手捏土器が番号を付けて取り上げたもののみで600数十個体を優に超え、玉類も滑石・ガラス双方含めて1000点以上におよぶ。それらの遺物は後期の大塚古墳より以前のものであり、祭祀主体となる人々が住んだ集落がいずれにあるかが問題であった。

その後実施された17次調査では、調査区の西端で酸化被熱面をもつ堅穴建物など古墳時代中期前半の遺構がわずかながら検出されており、当該期の集落が大塚古墳の立地する丘陵上に存在していたことが明らかとなった。この調査区では中世末の16世紀頃に屋敷地が大規模に営まれており、その開発による削平によるためか、より古い時期の遺構が少ない。

しかし元々は大塚古墳が後期に築造される以前に中期前半期の集落が存在し、そこに住む人々が第3地点の祭祀遺構を残したものと見られる。

以上の第1・第3地点の成果から、今宿五郎江遺跡と大塚遺跡との間に位置する谷は、弥生時代後期から古墳時代中期に至るまで、近隣集落のゴミ捨て場に留まらず、祭祀行為を行う聖なる場でもあり続けたことがうかがえる。また第3地点では大型の石鏸が出土しており、漁業にも関連して、海から集落付近まで船で進入する船溜まりの役目を果たしていた可能性も考えられる。

第5地点では、計4棟の掘立柱建物を検出し、その中の1棟には欄が伴っていた。伴出遺物が少なく時期の確定が難しいが、建物の主軸方位が磁北より5°～8°西偏すること、柱穴の形状、覆土から、西側隣接地の10・12・13次調査で検出された掘立柱建物群と合っており、一連のものである。10次調査例では黒色土器が伴うことから、平安時代末期と見られており、怡土荘成立との関連も推測されて

いる。この掘立柱建物群が位置する場所は海を望む丘陵の先端部に当たり、沿岸の目印ともなる今山が間近にみえる場所である。海を介した物資・情報の流通がより主体となっていく時代と荘園の成立に当たって、この場所が選択されているということならば、興味深い現象である。

今回の調査では谷部の遺物包含層が調査の主体であったものの、弥生時代後期～中世初頭までの信仰や生活の変遷がうかがえる良好な資料を得ることができた。長年に渡った土地区画整理事業とそれに伴う発掘調査も終了の段階となった。その成果の総括が今後なされる上で、本調査の成果も新たに評価されることとなるであろう。

図版1



第1地点より大塚古墳を望む（北東から）



第1地点（上空から）

図版2



第1地点遺物包含層堆積状況（南から）



第1地点③遺物出土状況（南から）



第1地点③遺物出土状況（西から）



第1地点③片口鉢出土状況（西から）

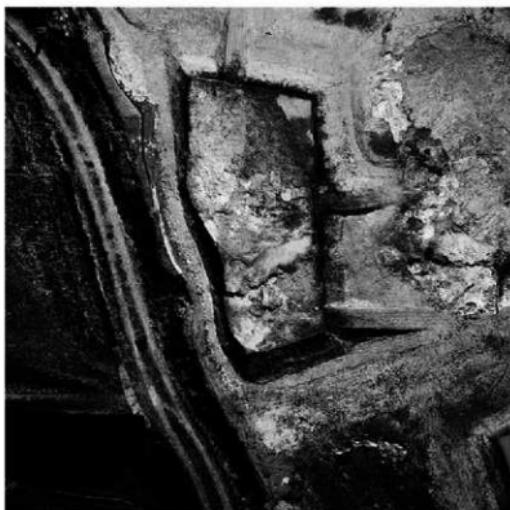
図版 4



第2地点（上空から）



第6地点（上空から）

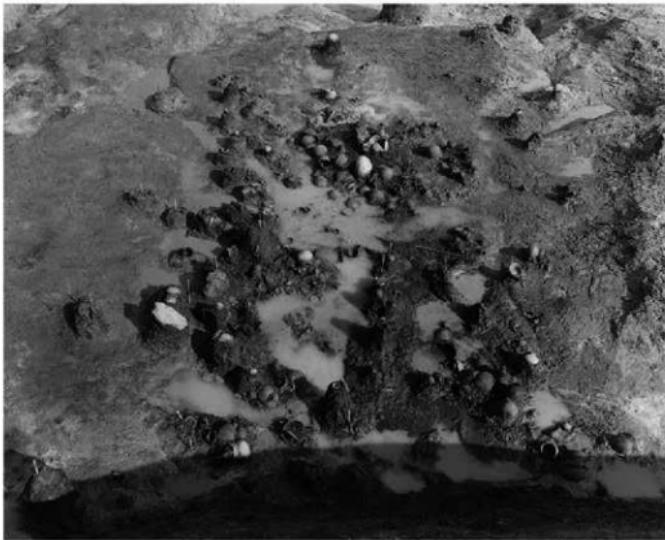


第3地点（上空から）



第3・5地点遠景（南から）

図版 6



第3地点SX01上層遺物出土状況（西から）



第3地点SX01上層遺物出土状況（東から）

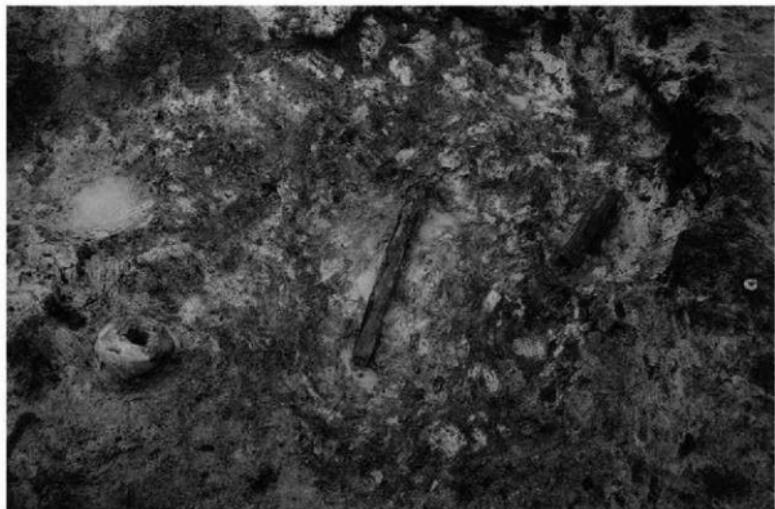


第3地点SX01完掘状況（東から）



第3地点SX01拡張部（西から）

図版 8



第3地点木器・石錘出土状況（東から）



第3地点石錘出土状況（東から）



第4地点（上空から）



第4地点木器出土状況（西から）

図版10



第5地点（上空から）



第5地点SB01・SA04・SB02（南から）



第5地点SB02・SB03（東から）



第5地点SB07（南から）

図版12

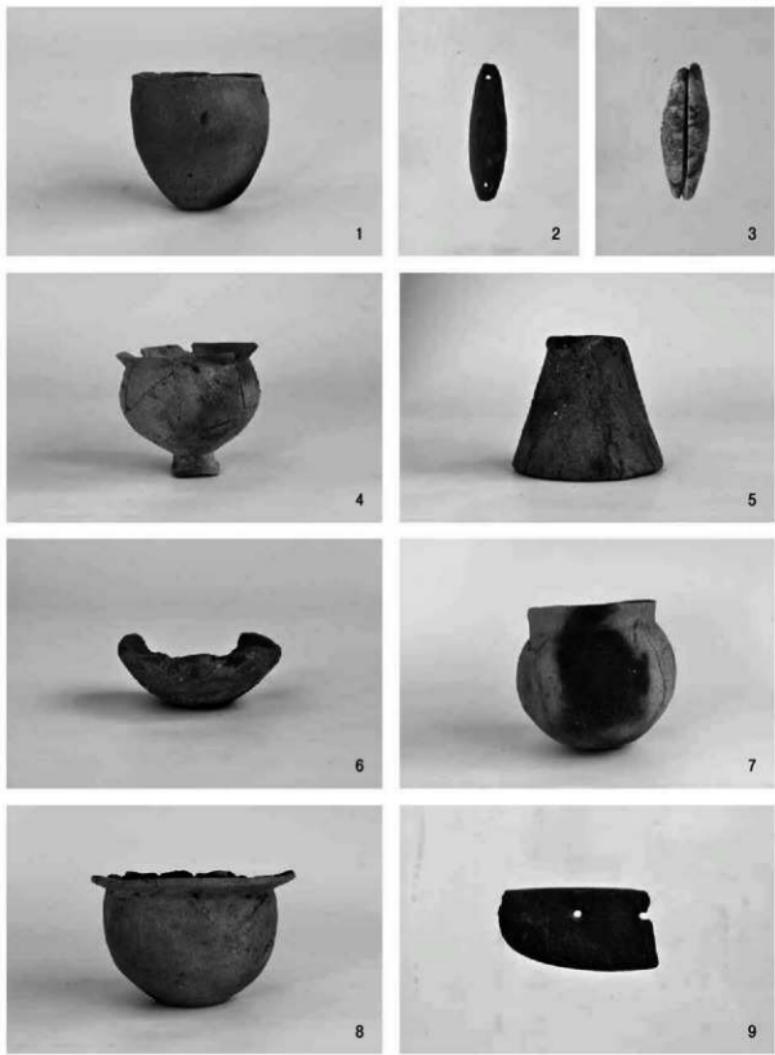


第5地点SK05（北から）



第5地点SK06（南から）

図版13



出土遺物 1

图版14



10



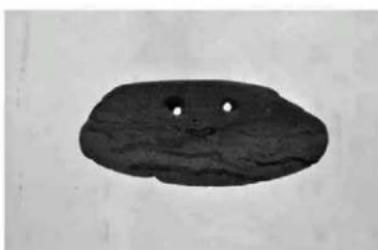
11



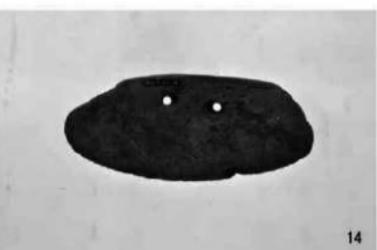
12



13



14



15

出土遗物 2



出土遺物 3

图版16



24



25



26



27



28



29



30



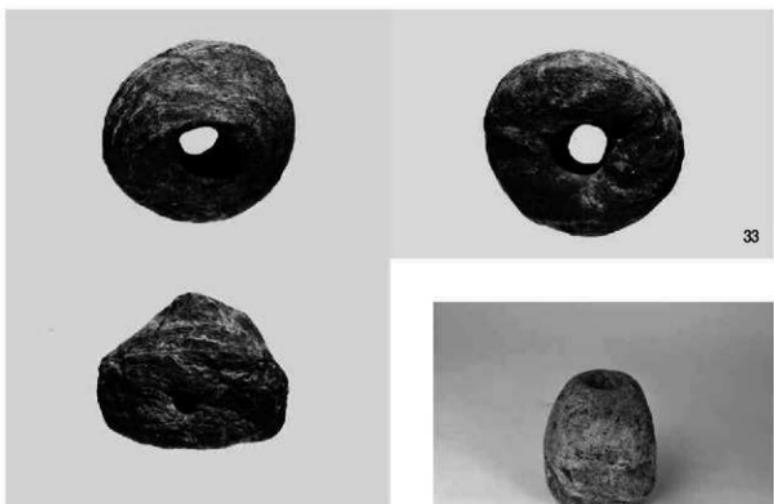
31

出土遗物 4

圖版17



32



33



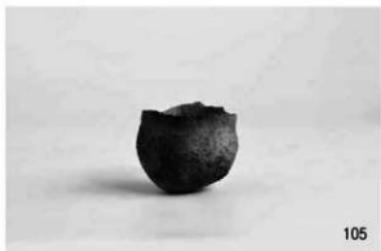
34

出土遺物 5

圖版18



出土遺物 6



出土遺物 7

図版20



出土遺物 8



121



122



123



124



125



126



127



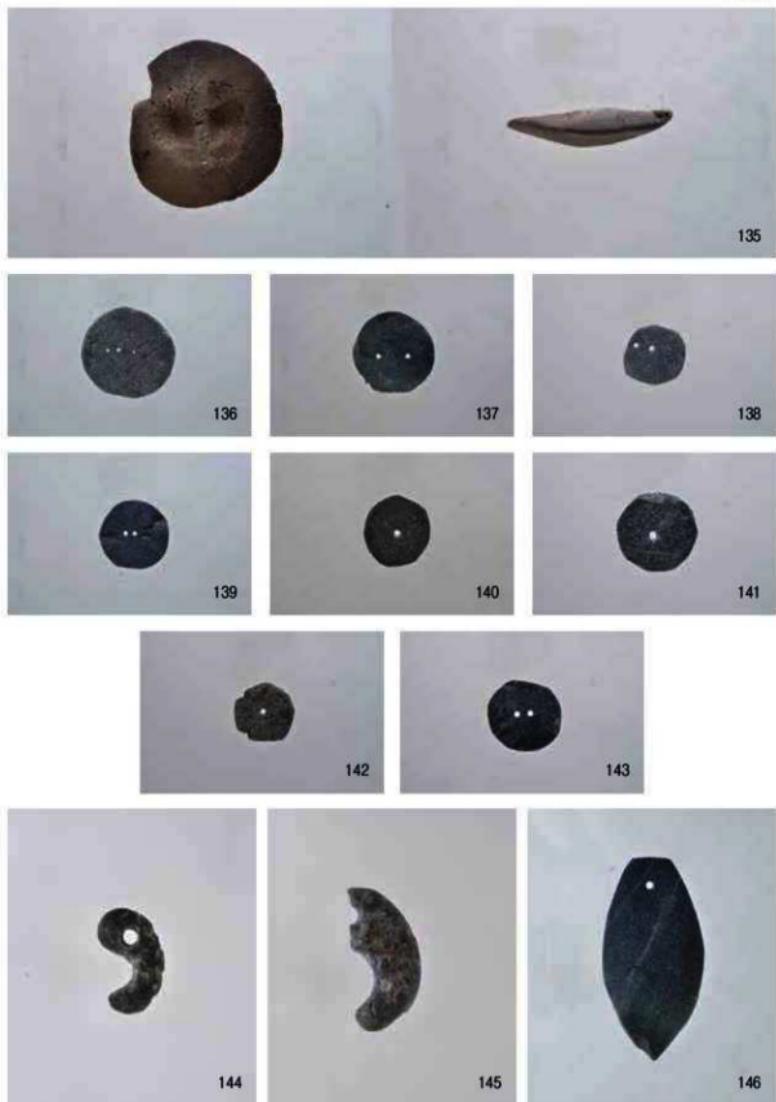
128

出土遺物 9

图版22

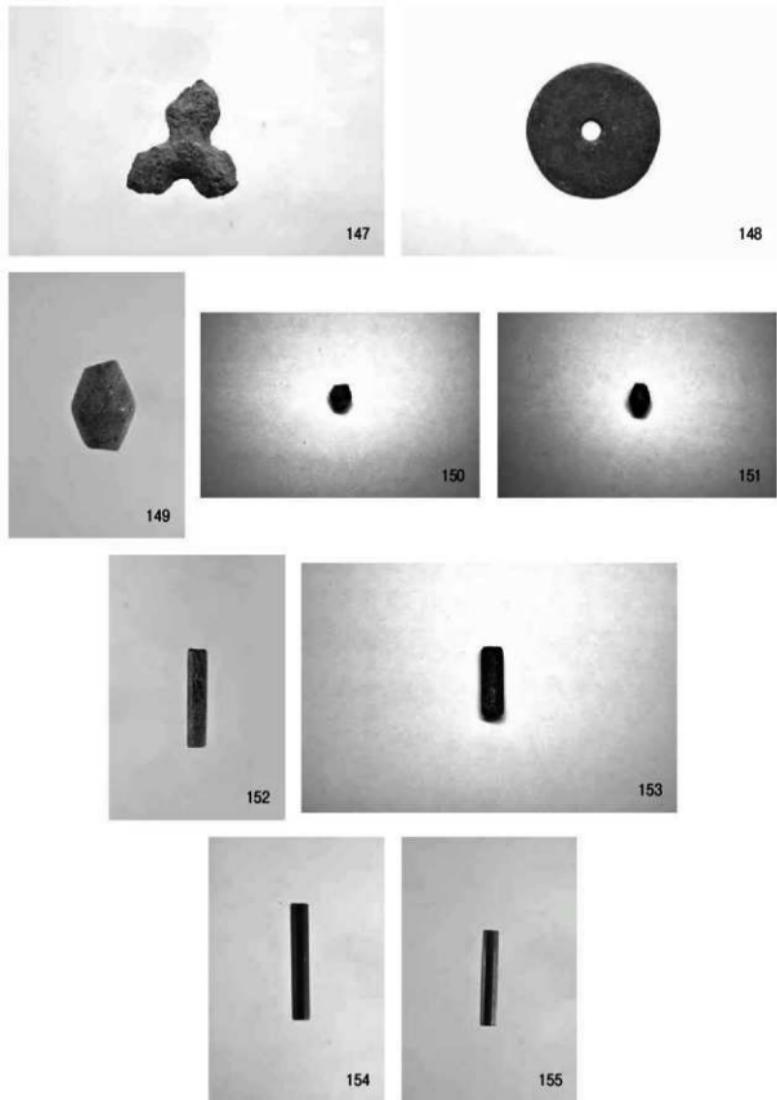


出土遗物10



出土遺物11

図版24

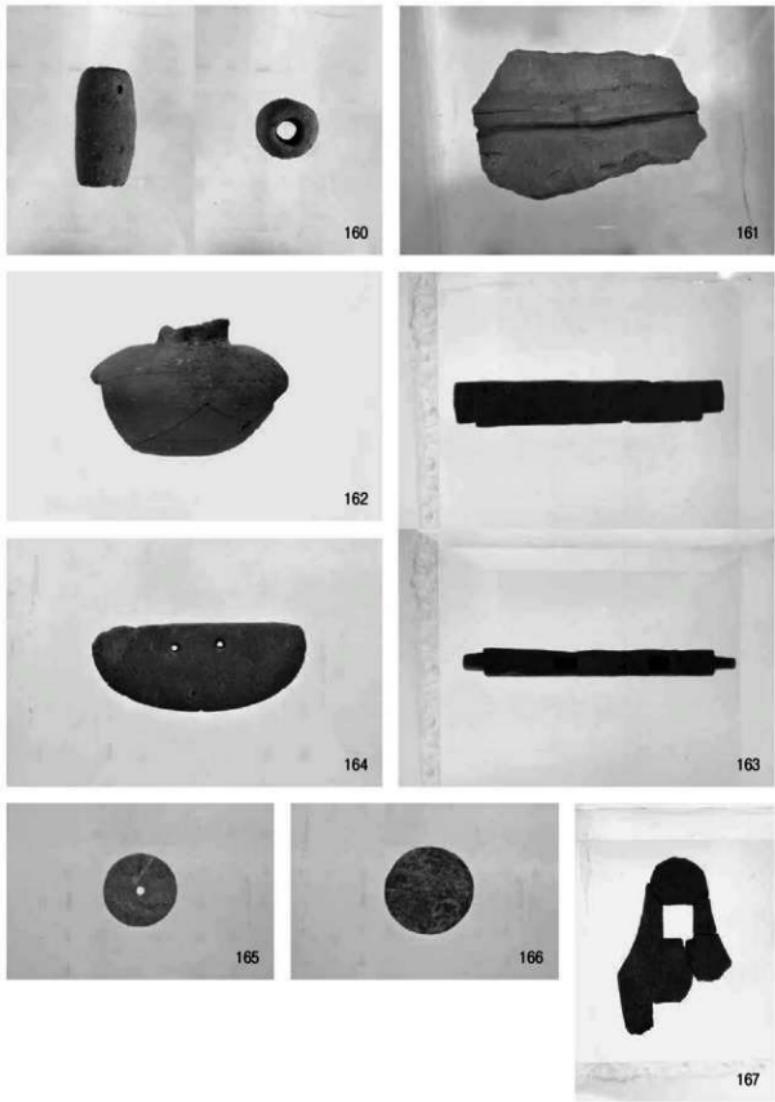


出土遺物12



出土遺物13

図版26



出土遺物14

第4章 第11次調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は道路を挟んで今宿五郎江遺跡12次調査地点の南、同9次調査地点の西に位置する。両地点で確認された弥生時代後期の大溝が本調査地点内で連結するか否か、その解決が大きな課題の1つとなっていた。また調査区内には鉄塔建設に伴い実施された大塚遺跡3次調査地点が含まれており、小面積で様相がよくわからなかった調査内容の再検討も果たす契機になった。

調査は排土置きの関係から反転とし、まず調査区西半・南半から開始し、次いで北東部に取りかかった。本書では前者を1区、後者を2区として記述・説明する。

1区は南の谷部と北の丘陵部とに大きく分かれる。南の谷部では黒灰色粘土層から弥生時代の土器、石製穂摘具・石鍤、木製堅杵が出土した。その下は灰白色粗砂が厚く堆積し、遺物は出土していない。谷の落ち際にめぐる溝から分かれ北西へ直線的に伸びる溝（SD12）があり、楽浪系土器鉢の口縁部破片1点が出土している。この溝は大塚遺跡3次調査で一部がすでに検出されている。丘陵肩部に堆積した包含層からは銅鏡・銅鈴が出土した。

丘陵部では掘立柱建物とその周囲を区画する溝、土器棺墓3基、土坑、多数のビットを検出した。北東隅に段落ちがあり、黒灰色粘土が堆積しており、谷頭と見られた。段落ちの際から銅製鋤先・碧玉製管玉が出土した。

2区では調査区北端中央から南東方向に伸びる大溝（SD65）を検出した。この大溝は埋没過程・出土土器の年代・図面照合の結果より、今宿五郎江遺跡9・10・11・12次調査で検出された大溝と一緒にるものであり、今宿五郎江集落の南半部を取り巻く環濠であることが確認された。

環濠より北側の集落内では、掘立柱建物、周囲を区画する溝を伴う竪穴住居、溝、ビット、土器棺墓1基を検出した。南側の集落外では、1区からの段落ちとなっており、削平のため造構の残存状況はよくない。しかし1区の北東隅部で谷頭と見られた段落ちが環濠の一部であること、SD12がその段落ちに取り付き環濠と合流すること、大塚遺跡3次調査で検出されていた溝がSD12の一部であることが確認できた。

出土遺物はコンテナ624箱分に相当し、その中心は弥生中期後半～後期・終末までのものである。土器の中には楽浪系土器といった日本列島外からの搬入土器が含まれる。中国製銅鏡片・銅製鋤先・銅鏡・銅鈴・鑄造鉄斧の金属器、鍤・斧・鐵・穂摘具などの石器、ガラス・碧玉・水晶の玉類・鋏・鎌刃の木器がある。最古では縄文時代にさかのばる可能性のある黒曜石製鏡、磨製石斧、最新では古墳時代の須恵器も若干含まれる。

2 調査の経過

平成19年（2007）年

2月1日 バックホウによる表土剥ぎ 排土処理の関係から調査区南半・西半（1区）より開始。

2月24日 今宿五郎江遺跡11・12次調査、大塚遺跡9・10次調査と合わせ現地説明会を開催。

4月初め 職員の人事異動に伴い調査の引継ぎ

4月23日 調査区南半・谷部北岸包含層掘り下げ、銅鏡・銅鈴出土。

5月上旬 歴史授業の一環として今宿・玄洋両小学校の6年生各100名が現場見学

5月14日 1区北東隅で銅製鋤先・碧玉製管玉出土。

5月16日 1区全景空中写真撮影

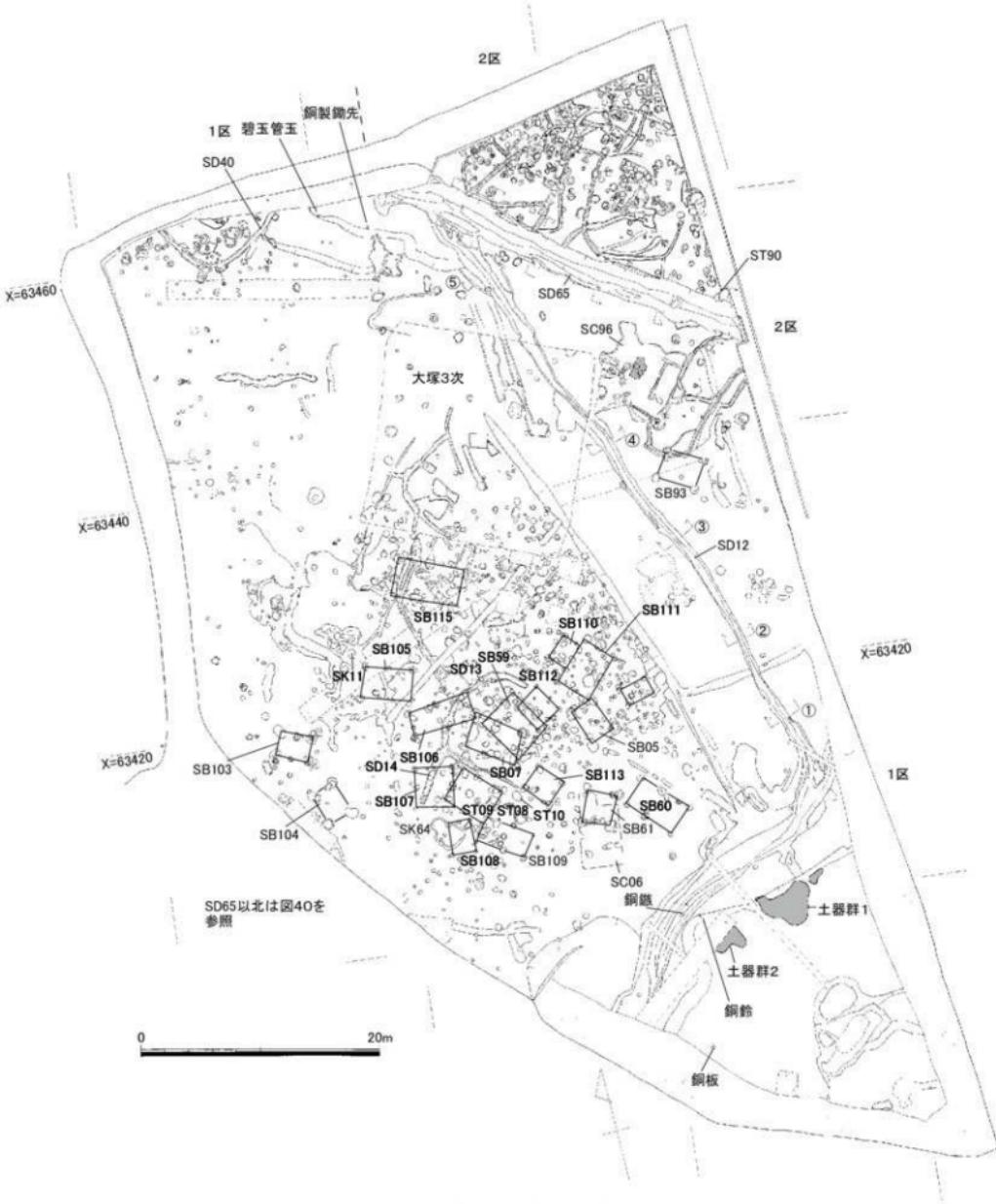


図23 調査区平面図 (S=1/400)

- 5月末～6月初め 反転・表土剥ぎ、調査区北東部（2区）の調査開始。
- 6月7日 遺構検出開始、調査区中央北端から南東方向に伸びる大溝（SD65）検出。
→弥生時代後期の環濠であることが判明。
- 6月26日 大溝の南東端で中国製内行花文鏡片出土。
- 8月1日 記者発表
- 8月4日 現地説明会
- 8月17日 2区全景空中写真撮影
- 9月10日 埋め戻し、調査終了

3 1区の遺構と遺物

土坑

SK11（図24、図版27）

長軸0.81m・短軸0.54mの楕円形で深さ0.56mである。上層に高杯などの破片、その直下に完形の甕が円碟の上に被さった状態で出土した。甕の底部形態から、弥生時代終末に属するものと見られる。

出土遺物（図版53）

1は甕である。浅黄橙色を呈し、底部はかなり丸底に近い。2は器台の一部である。橙色を呈す。

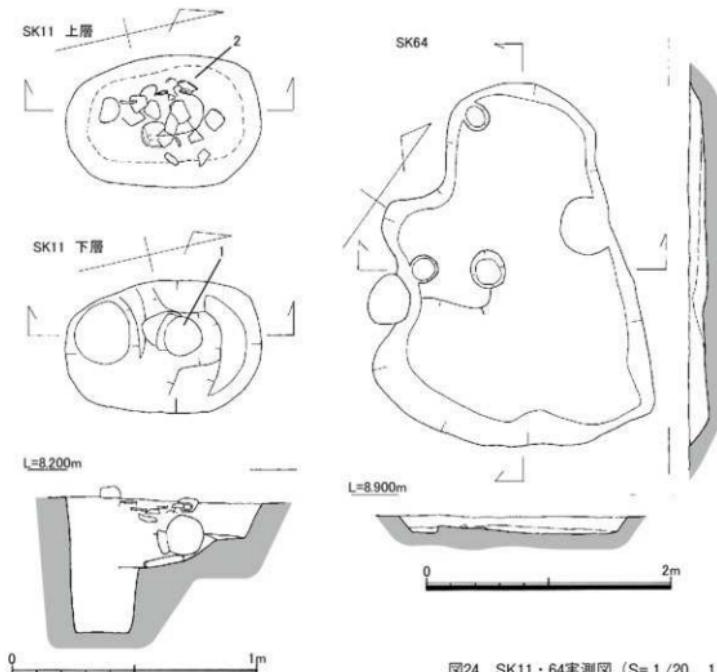


図24 SK11・64実測図 (S=1/20, 1/40)

SK64 (図24、図版27)

3m×2.3mの隅丸略三角形をなし、深さは0.1mである。掘立柱建物SB108の北西隅SP255に切られる。弥生時代終末に属するものと見られる。

出土遺物 (図版53)

3は器台である。褐色を呈し、外面にタタキ目と見られる痕跡が残る。

土器棺墓

ST08 (図25、図版28)

掘形は長軸0.8m・短軸0.55mの楕円形で深さ0.24mである。複合口縁壺を下棺、恐らく鉢を上棺とする小児棺で、上部は削平されている。弥生時代終末に属す。

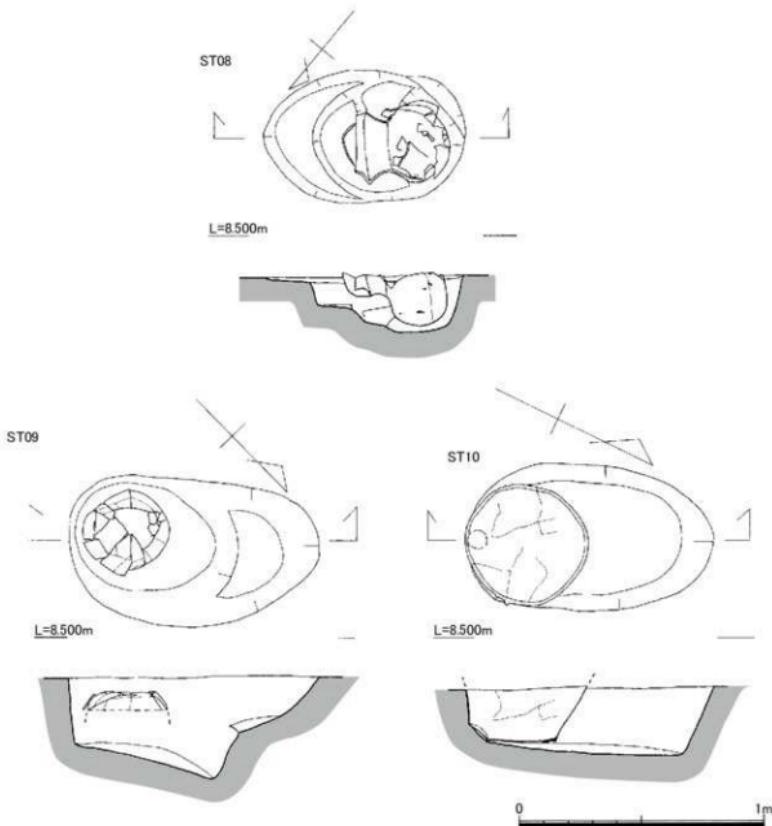


図25 ST08・09・10実測図 (S= 1 / 20)

出土遺物（図版53）

6は複合口縁壺である。淡橙色を呈す。

ST09（図25、図版28）

掘形は長軸1.03m・短軸0.6mの楕円形で深さ0.32mである。小児棺で上棺に鉢、下棺に頭部より上を打ち欠いた壺を用いる。壺の底部形態から弥生時代終末と見られる。

出土遺物（図版53）

4は鉢である。浅黄橙色を呈す。5は壺である。褐色を呈す。

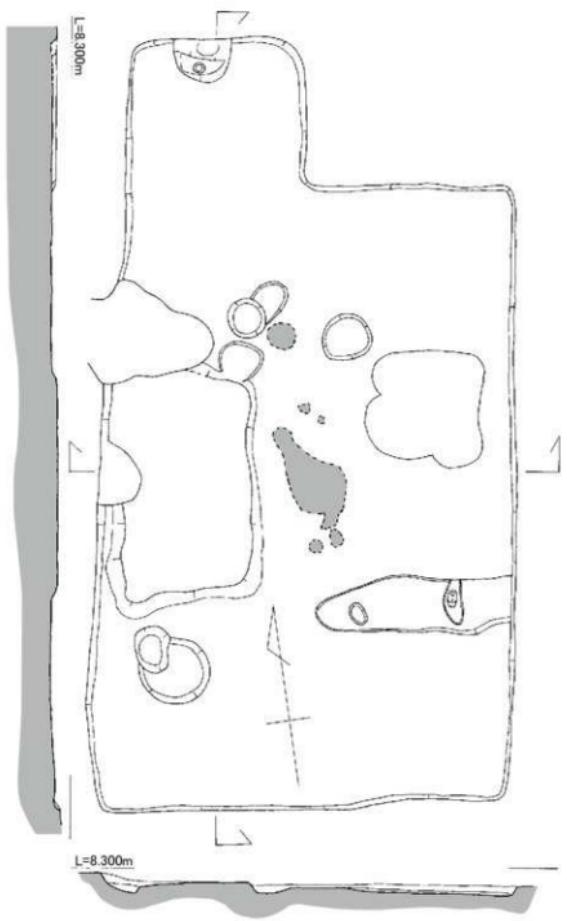
ST10（図25、図版28）

掘形は長軸1.0m・短軸0.61mの楕円形で深さ0.27mである。削平が著しく、上棺はなく、下棺も上部3分の2が失われている。

竪穴住居

SC06（図26、図版30）

3.5m×5mの南北に長い隅丸方形を基とし、北端西側に1.5m×1.15mの張り出しを持つプランである。この張り出しが入口か。残存深さは3～5cmで削平が著しい。中央部に焼跡とみられる焼土面の広がりがみられた。掘立柱建物SB61のピットを切っている。出土遺物からは年代の決め手に欠けるが、カマド出現以前の古墳時代前期～中期とみられる。



網かけは焼土の分布範囲

0 $\quad \quad \quad 2\text{m}$

図26 SC06実測図 ($S=1/40$)

溝

SD12 (図23・27、図版33)

長さ59m、幅0.65～1.25m、深さ0.2～0.53mである。谷部から後述する2区のSD65につながる。3次調査で検出された溝はSD12の一部であることが明らかとなった。出土遺物は少なく、上層で須恵器片が、その他楽浪系瓦質土器鉢の口縁部、石鍤が出土している。弥生後期の溝か。覆土は灰褐色砂であり、急激な水の流れがあったとみられ、谷部からSD65へ水を通す役割が想定できる。

出土遺物 (図版53)

7は楽浪系土器で鉢の口縁部である。灰色を呈す。

SD13・14 (図28、図版30・31)

SB58の北西・北東、SB70の南西・北西・北を区画する。SD13は幅0.18～0.55m、深さ0.16～0.29mで逆コの字形をなす。SD14は幅0.45～0.78m、深さ0.04～0.18mでSD13の屈曲部に取り付く。取り付き部の溝底レベルはSD14のほうが高い。

SD40 (図29、図版32)

調査区北端で検出した。建物の周囲を隅丸方形にめぐる溝であろう。幅0.37～0.71m、深さ0.18～0.42mである。弥生時代終末に属す。

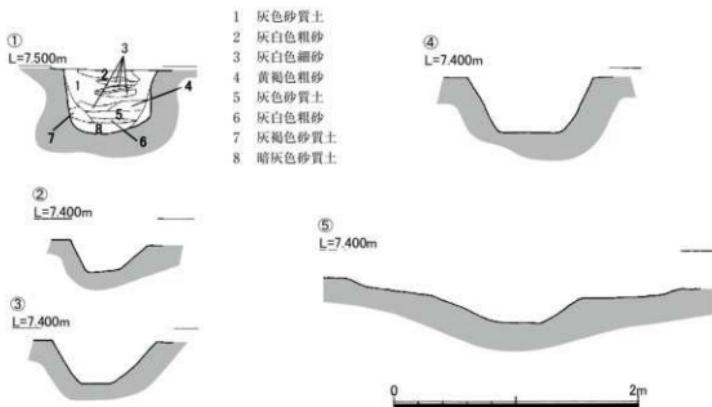


図27 SD12断面実測図 (S=1/40)

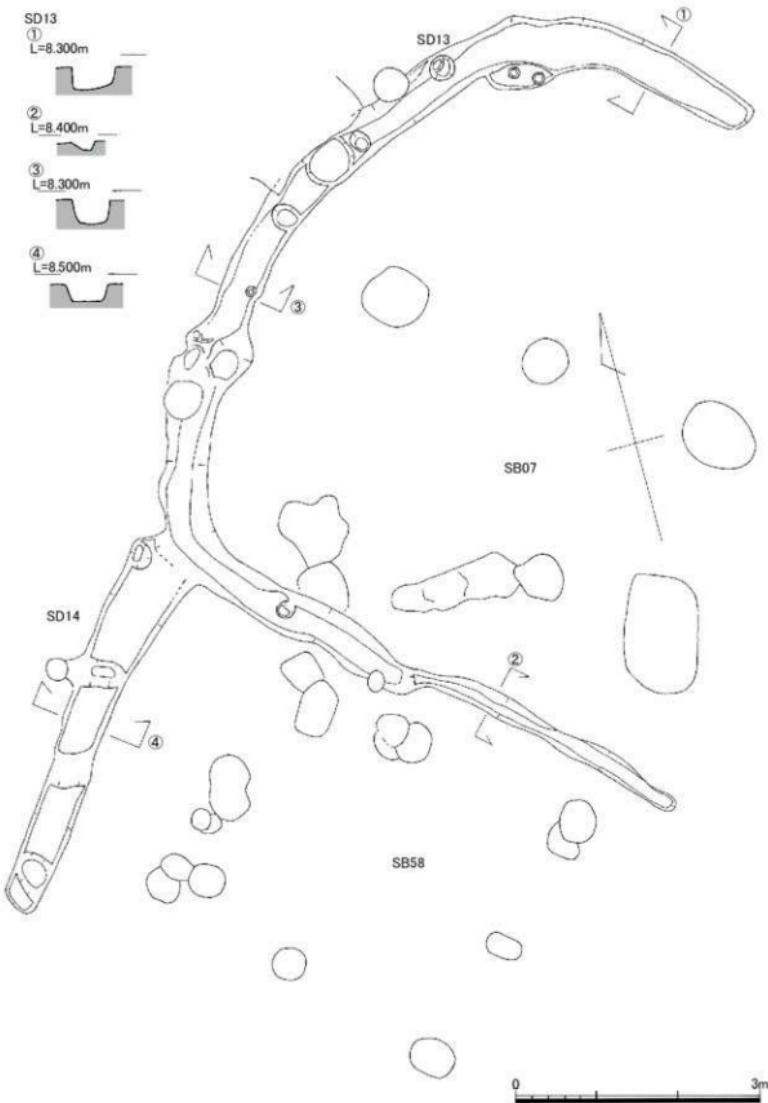


図28 SD13・14実測図 (S= 1 / 60)

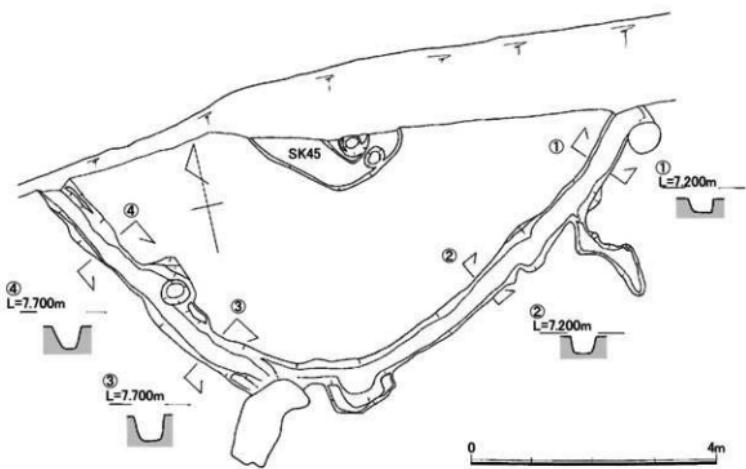


図29 SD40実測図 (S= 1 /80)

掘立柱建物

SB05 (図30、図版34)

1間四方の南北棟で、磁北より 20° 西偏する。柱間は桁行3~3.3m、梁行2.2~2.3mで、ピットの残存深さは0.57~0.85mである。

SB07 (図30)

1間×2間で、磁北より 35° 東偏する。柱間は桁行1.85~2.7m、梁行2.9~3.1mで、ピットの残存深さは0.48~0.57mである。

SB58 (図31)

2間四方で、磁北より 46° 東偏する。柱間は桁行1.6~2.3m、梁行1.5~1.6mで、ピットの残存深さは0.15~0.26mである。

SB59 (図31)

4間四方で、磁北より 60° 東偏する。柱間は桁行0.85~1.4m、梁行0.8~1.1mで、ピットの残存深さは0.08~0.46mである。他の建物と比較して、ピットの掘形が $0.3m \times 0.5m$ の隅丸長方形であることが特徴的である。

SB60 (図32・図版35)

1間×2間で、磁北より 58° 東偏する。柱間は桁行1.85~2.65m、梁行2.65mで、ピットの残存深さは0.29~0.67mである。

SB61 (図32・図版34)

1間四方で、磁北より 23° 東偏する。柱間は桁行2.35~2.55m、梁行2.65~2.7mで、ピットの残存深さは0.34~0.6mである。SC06に切られる。

SB103 (図33)

1間×2間で、磁北より 26° 東偏する。柱間は桁行1.25~1.55m、梁行2.15mで、ピットの残存深さは0.29~0.61mである。

SB104 (図33)

1間四方で、磁北より 17° 西偏する。柱間は桁行2.2m、梁行2.9~3.1mで、ピットの残存深さは0.24~0.47mである。

SB105 (図34)

1間×2間で、磁北より 19° 東偏する。柱間は桁行2~2.2m、梁行2.65~2.7mで、ピットの残存深さは0.27~0.82mである。

SB106 (図34)

1間×2間の東西棟で、磁北に沿う。柱間は桁行2.5~2.95m、梁行2.1~2.2mで、ピットの残存深さ

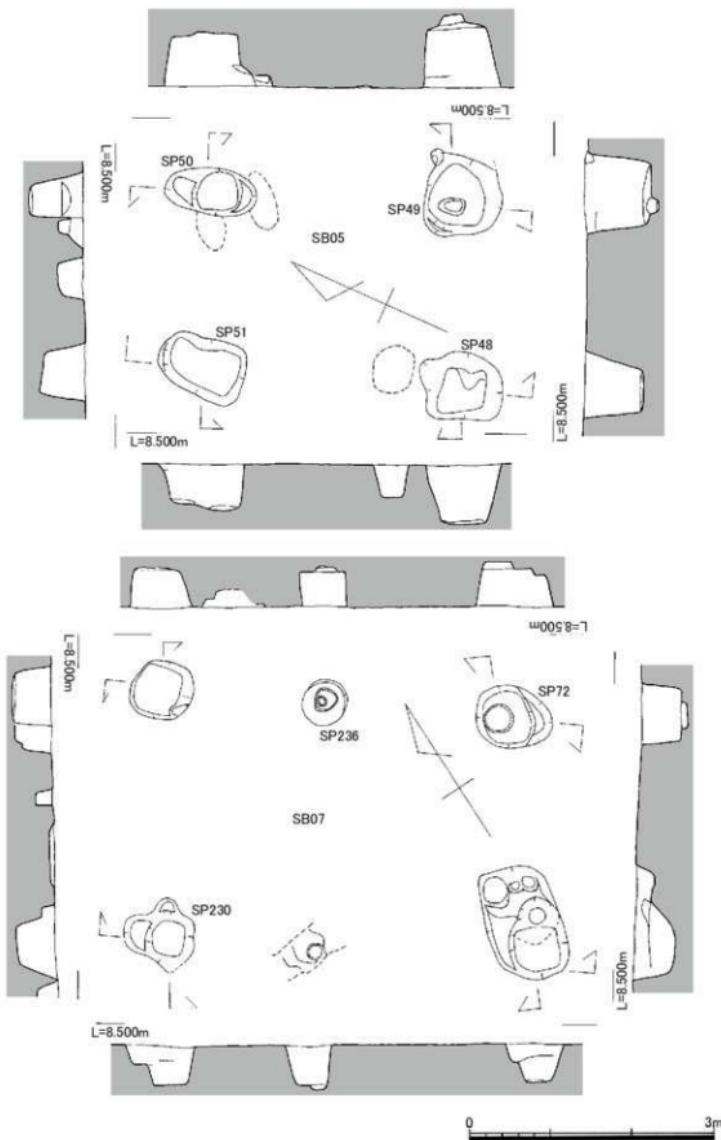


図30 SB05・07実測図 (S=1 / 60)

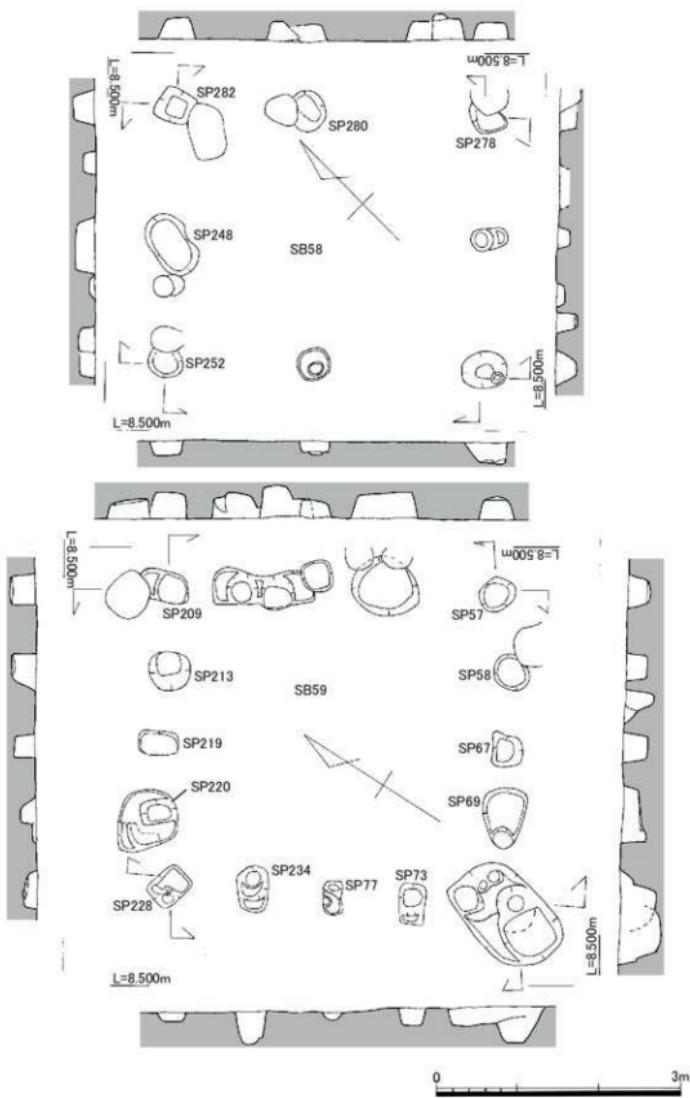


図31 SB58・59実測図 (S=1 / 60)

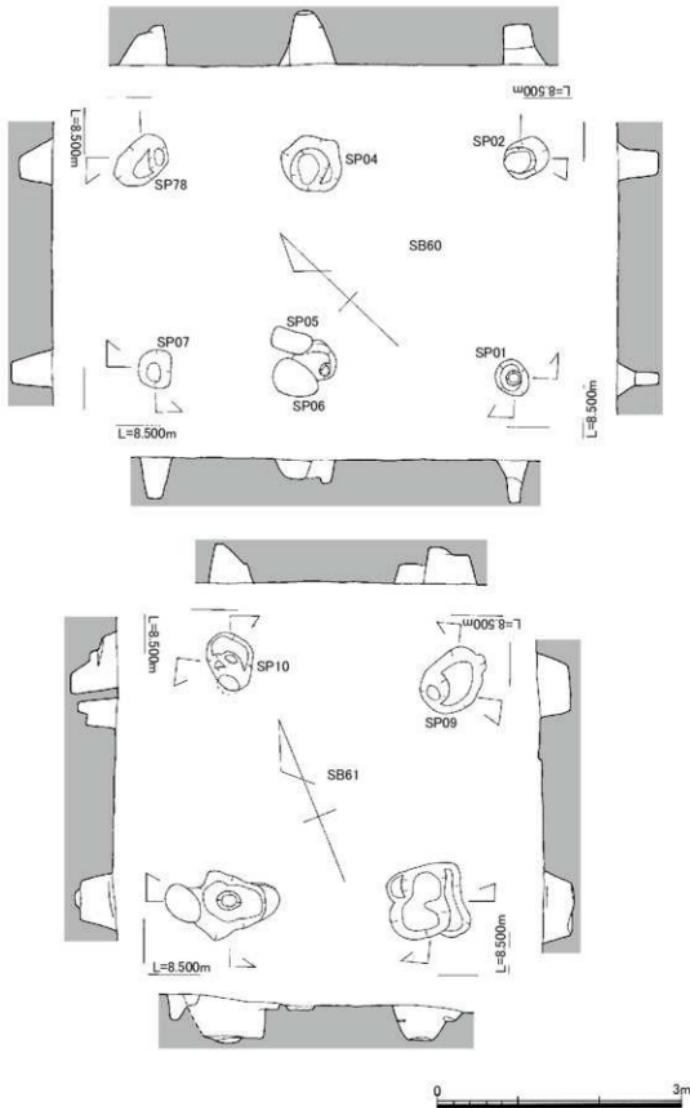
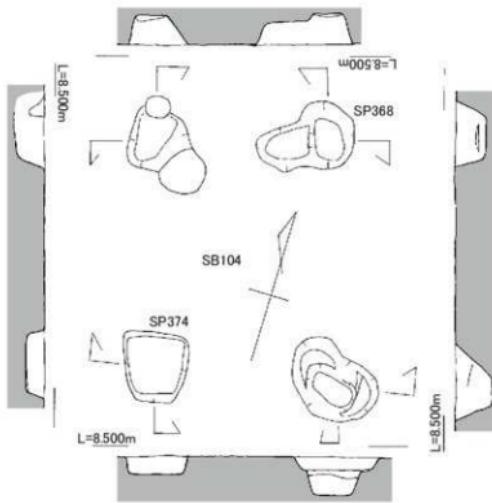
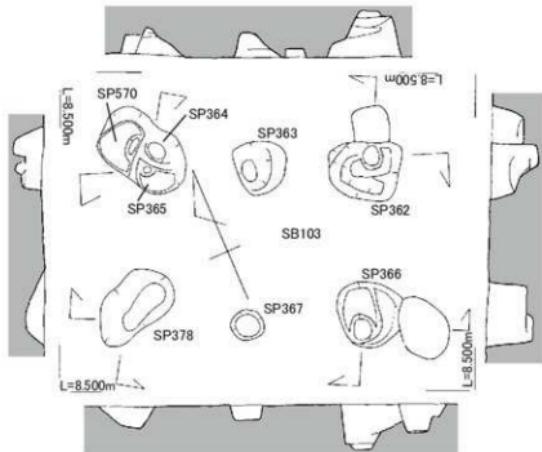
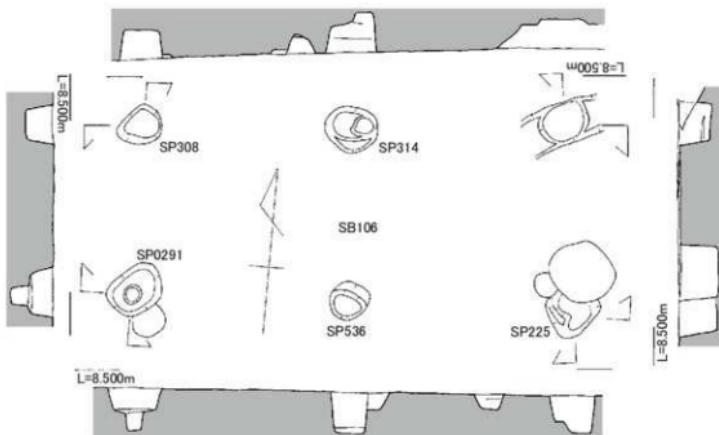
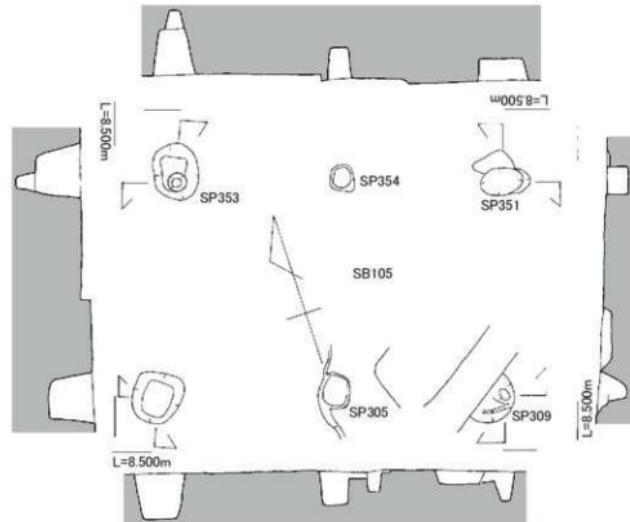


図32 SB60・61実測図 (S=1 / 60)



0 3m

図33 SB103・104実測図 (S=1/60)



0 3m

図34 SB105・106実測図 (S= 1 / 60)

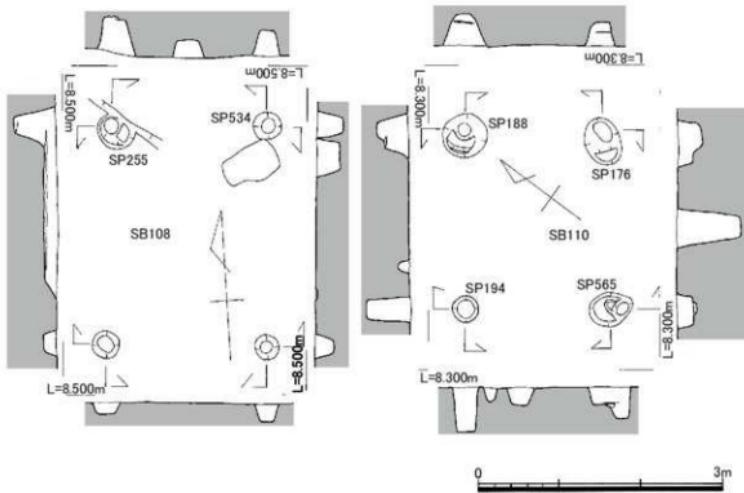
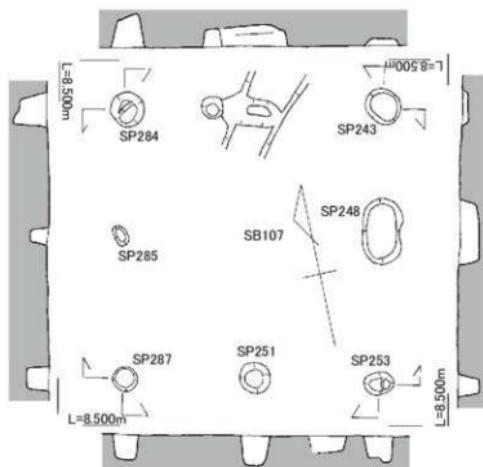


図35 SB107・108・110実測図 (S= 1 / 60)

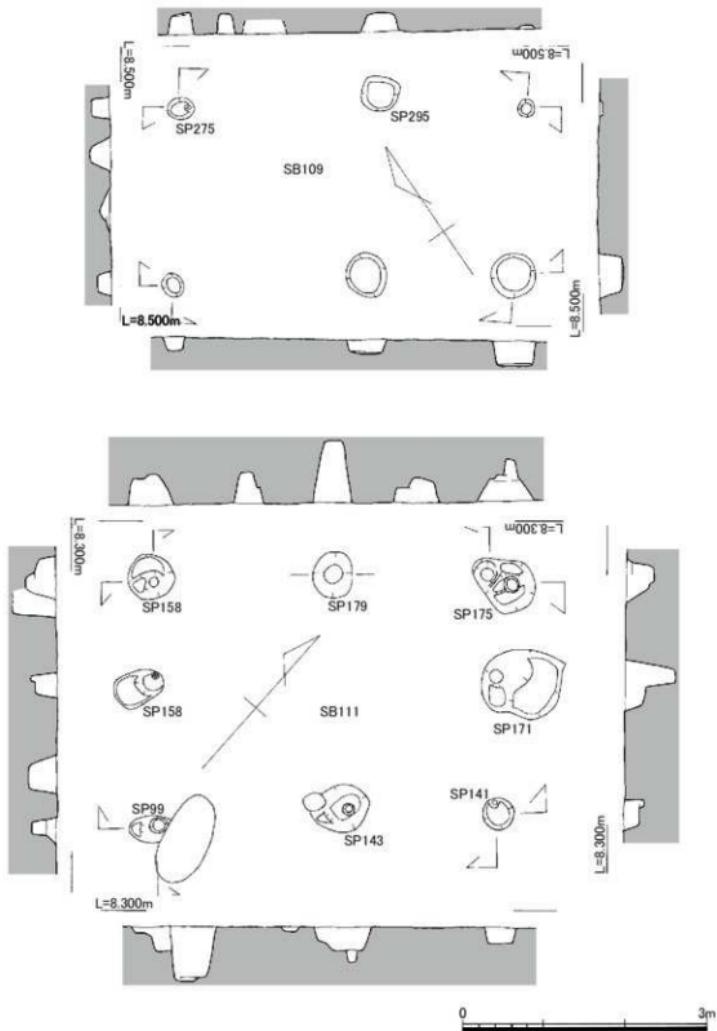


図36 SB109・111実測図 (S= 1 / 60)

は0.35～0.55mである。

SB107 (図35)

2間四方の南北棟で、磁北より 13° 東偏する。柱間は桁行1.55～1.6m、梁行1.5～1.95mで、ピットの残存深さは0.08～0.44mである。

SB108 (図35)

1間四方の南北棟で、磁北より 4° 東偏する。柱間は桁行1.95～2m、梁行2.75mで、ピットの残存深さは0.16～0.5mである。

SB109 (図36)

1間×2間で、磁北より 34° 東偏する。柱間は桁行1.85～2.4m、梁行2.1～2.2mで、ピットの残存深さは0.04～0.31mである。

SB110 (図35)

1間四方で、磁北より 51° 東偏する。柱間は桁行1.7～1.95m、梁行2.2～2.25mで、ピットの残存深さは0.31～0.55mである。

SB111 (図36)

2間四方で、磁北より 48° 東偏する。柱間は桁行1.83～2.37m、梁行1.17～1.85mで、ピットの残存深さは0.25～0.78mである。

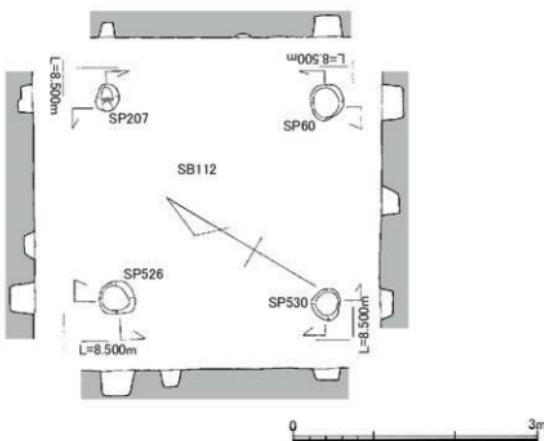


図37 SB112 (S=1/60)

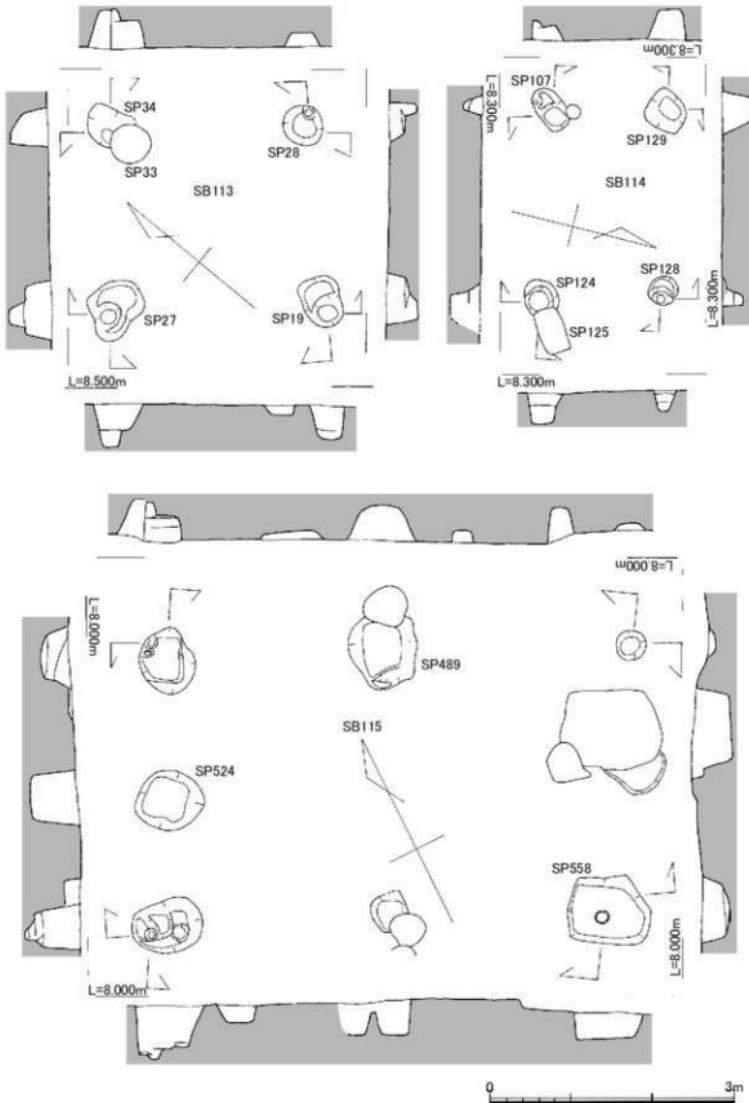


図38 SB113・114・115実測図 (S= 1 / 60)

SB112 (図37)

1間四方で、磁北より59°東偏する。柱間は桁行2.65~2.7m、梁行2.4~2.5mで、ピットの残存深さは0.16~0.3mである。

SB113 (図38)

1間四方で、磁北より50°東偏する。柱間は桁行2.5~2.7m、梁行2.2~2.5mで、ピットの残存深さは0.24~0.53mである。

SB114 (図38)

1間四方の東西棟で、磁北より14°東偏する。柱間は桁行2.35~2.5m、梁行1.5~1.7mで、ピットの残存深さは0.25~0.38mである。

SB115 (図38)

2間四方で、磁北より25°西偏する。柱間は桁行2.6~3.1m、梁行1.5~1.95mで、ピットの残存深さは0.12~0.58mである。

その他の遺構の出土遺物 (図39、図版53・54)

8・9は石鏡である。8は長さ3.5cm、残存幅1.9cm、厚さ0.35cmでSK51、9は長さ2.5cm、基部幅1.5cm、厚さ0.45cmでSP577の出土。

包含層出土遺物 (図39、図版54・55)

谷部・黒灰色粘土層

12は石鏡である。残存長2.6cm、基部幅1.7cm、厚さ0.2cmで黒曜石製。

14・15は石製槌揃具である。14は横幅10.1cm、縦長5.15cm、厚さ0.6cm、孔径0.6cmで孔心々間長1.9cmである。15は横幅10.0cm、縦長5.0cm、厚さ0.7cm、孔径0.65cmで孔心々間長2.6cmである。輝緑凝灰岩製でいずれも土器群1に共伴して出土した。

16は木製堅柾である。残存長40.5cm、柄部の長15.9cm、径2.1cm、杵部の長24.6cm、径4.6cmである。ガラス小玉はコバルトブルーが1点出土している。

19は銅製不明品である。復元径5.2cm、厚0.2cmである。

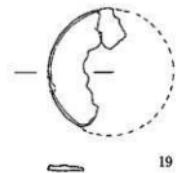
23は甕である。23は復元口径21.4cm、器高24.8cm、色調は外面淡灰褐色、内面淡灰褐色で、胎土は径2mm以下の砂粒多量と金雲母を含む。調整は外面ハケ目、内面は上半三分の二がナデ、下半がヘラ削り、底部付近が指おさえである。土器群1出土。

24は壺である。口径14.4cm、器高12.8cm、淡明赤褐色を呈し、胎土は径2mm以下の砂粒多量と金雲母を含む。調整は体部外面ハケ目、口頭部は内外面ナデ、内面は頭部と胴部の境付近がハケ目、以下はヘラ削りである。

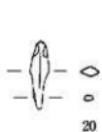
その他石錘が3点、大型船刃石斧が2点、土錘が1点、石製石製槌揃具が1点出土している。

谷部北岸・丘陵肩包含層 (図39、図版54・55)

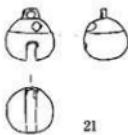
20は銅鏡である。残存長2.8cm、最大幅0.75cm、最大厚0.4cmである。今宿五郎江遺跡4次調査出土例と類似する。



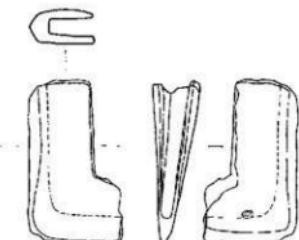
19



20

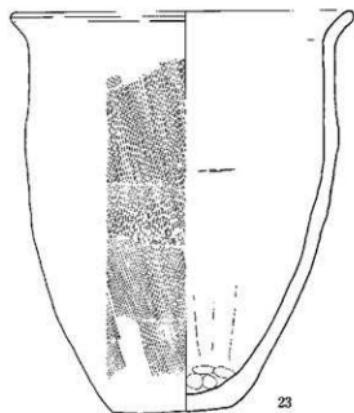


21

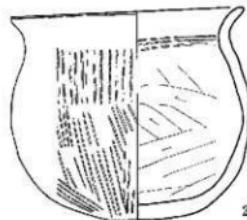


22

0 5cm



23



24

0 15cm

図39 その他の遺構および包含層出土遺物 (S=1/2、1/3)

21は銅鉈である。横1.9cm、縦2.1cm（0.4cmの紐通し含む）、幅0.4cmのスリット入りで、中に0.7cmの丸が残っている。

他に石錘2点が出土している。

丘陵部包含層

10・11・13は石鎚である。10は長さ1.7cm、基部幅1.2cm、厚さ0.2cmで黒曜石製、11は残存長2.1cm、残存幅1.2cm、厚さ0.25cm、13は残存長2.7cm、基部幅1.6cm、厚さ0.3cmである。

17は阿高式土器片である。

他に石錘1点、大型蛤刃石斧1点、中央に穿孔がなく未成品の紡錘車1点が出土している。

ガラス小玉はコバルトブルーが1点出土している。

調査区北端の谷頭（図39、図版54・55）

18は碧玉製管玉である。長さ1.7cm、径0.7cmの円筒形で、孔径0.2cmである。

22は銅製鋤先である。全長6.7cm、刃部残存幅3.8cm、刃部長1.1cm、刃部厚0.65cm、袋部内法長5.6cm、袋基部厚1.9cmである。

4 2区の遺構と遺物

溝

SD65 (図40~42、図版37~48)

上面幅2.5m、底面幅0.4~0.5m、深さ1.2mの逆台形・逆V字形をなし、長さ30m分を検出した。底面のレベルは南東から北西に向かって下がっており、0.7mの高低差がある。集落の全体から見ると、未調査部分である道路下辺りが最南端で分水嶺となり、東西に低くなっていくものとみられる。

掘り下げは土層観察用ベルトを6ヶ所設定し、北西から南東に向かって①~⑥とした。その間を①~⑦ブロックとし、各ブロックを集落内部側と外側（1と2）、さらに西寄りと東寄り（aとb）の4分割とし、1~6層に分けて遺物の取り上げをおこなった。例えば③ブロックの集落内部側・西寄り・3層の出土遺物は③-1a 3層という注記となる。1・2層が上層、3・4層が中層、5・6が下層にある。

土層堆積（図41・42）は、上層が暗褐色粘土で弥生終末、中層が炭を多量に含む灰色粘土で弥生後期後半、下層が弥生後期初頭～前半の土器を含む。特に底面に近い最下層で中期の名残を有する袋状口縁壺が2点出土している。いずれも頸部と胴部の境に穿孔を施し、内1点は赤塗で穿孔部を下にして水平な状態で出土した。祭祀に伴うものか。

またベルト⑤・⑥にみられるように、集落内部側に当たる北側斜面寄りに土器・炭をほとんど含まない暗灰色・暗黄灰褐色土が流れ込んだような状況で堆積しており、土壘の崩落土である可能性がある。

出土遺物は他の調査地点と違い、木製品は極めて少なく北西端最下層からしか出土していない。その内に鉛・又鍬の刃がある。その他金属器（鋳造鉄斧3点・銅鏡片1点）、ガラス製品（勾玉・丸玉）、石製品（鍊30点、穂摘具1点、穂摘具未成品2点、大型蛤刃斧1点、扁平片刃斧1点、紡錘車1点）など、多種多様な遺物が出土している。また外来の楽浪土器片も出土している。土器については、出土層位ごとにまとめ、記述する。

出土遺物

土器

第1層（図42~44、図版55・56）

25・31は壺である。

25は布留系で胴部のみ残存し、頸部径12.7cm、胴部最大径23.7cm、残存高17.8cmである。内外面ともに淡褐色を呈し、1/4に黒斑がみられる。調整は外面がハケ目、内面がヘラ削り調整で、上端部に波状沈線を施す。

31は復元口径14.6cm、器高16.6cmで、淡赤褐色を呈し、焼成がやや甘い。調整は外面がナデ、内面は上半がハケ目、下半がヘラ削りであるが、摩耗が激しい。

26~29・34は支脚である。

26は器高12.0cm、底径14.5cm、上部径7.0cmで明赤褐色を呈す。調整は外面ハケ目、内面ナデである。

27は器高12.5cm、底径15.2cm、上部径7.1cm、完形で外面が淡黄褐色、内面が明赤褐色を呈す。調整は外面上端がナデ、下半がヘラ削り、内面がヘラ削り・ハケ目である。

28は器高9.3cm、底径9.8cm、上部径5.3cm、完形で明赤褐色を呈し、裾部に黒斑がみられる。調整はナデ・指捺である。

29は器高12.1cm、底径16.1cm、上部径9.5cm、完形で外面がにぶい黄褐色、内面が淡黄赤褐色を呈

す。内面に削り・ハケ目を施す。34は器高11.9cm、上部長径7.1cm、同短径4.7cmで明赤褐色を呈し、外面の裾部に黒斑がみられる。内面に削りを施す。

32・33・36・37は壺である。

32は器高18.2cm、復元口径11.5cmで、淡赤褐色を呈す。外面に一部ハケ目、内面は幅広のヘラ状工具で整形後ナデを施す。

33は残存高15.0cm、胴部最大径21.7cm、外面淡灰褐色で黒斑2ヶ所あり、内面明淡赤褐色を呈す。内・外面ハケ目で内面のみナデを加える。

36は底部のみの残存で、外面淡赤褐色、内面灰黄褐色を呈し、内外面ナデ調整、底部に穿孔を施す。

37は器高19.0cm、口径11.5cm、淡赤または黄褐色を呈し、調整は外面・頸部の内面が摩耗で不明、胴部内面が細かいハケ目である。

30・40は鉢である。30は器高11.4cm、口径25.5cm、淡明赤褐色を呈し、外面ナデ、内面ハケ目を施す。底部に焼成前穿孔を施す。

40はミニチュアで器高9.2cm、復元口径10.4cmで淡褐色を呈し、内外面ナデ・指押さえを施す。

35・38・39は器台である。

35は器高17.5cm、底部径15.5cm、上部径14.0cmで明赤褐色を呈す。内面にヘラ削りを施す。

38は器高11.0cm、底径12.8cm、上部径8.5cmで、明赤褐色を呈す。内外面ナデ・指押さえを施す。

39は器高・底径12.0cm、上部径10.7cm、明赤褐色を呈す。調整は外面一部ハケ目、内面ナデ・指押さえである。

第2層（図45・46、図版57・58）

43～48は鉢である。

43は器高10.3cm、口径18.0cm、明赤褐色を呈し、一部黒斑がみられる。内外面ハケ目を施す。

44は器高8.4cm、口径20.5cm、淡赤褐色を呈し、外面胴部に一部黒斑がみられる。45は器高8.5cm、口径20.0cm、淡明赤褐色を呈し、内外面ナデ・指抑えを施す。

46は器高12.5cm、口径23.0cm、赤褐色を呈し、外面上半・内面・口縁端部にハケ目、外部下半にヘラ削りを施す。

47は器高12.5cm、口径24.0cm、明赤褐色を呈し、外面ハケ目、内面ナデ・指押さえを施す。

48は残存高9.0cm、底径8.0cm、明赤褐色を呈し、底部に穿孔を施す。

49は高杯の脚部である。残存高4.3cm、底径11.3cm、淡明赤褐色を呈し、内外面ナデを施す。

50はミニチュア土器の杯である。復元器高6.5cm、復元口径9.0cm、淡赤褐色を呈し、内外面ナデを施す。

51・52は支脚である。

51は器高10.7cm、底径10.7cm、上部径8.5cm、赤褐色を呈し、外面ハケ目、内面削りを施す。

52は器高11.6cm、底径12.6cm、上部径9.5cm、淡褐色を呈し、上部に黒斑がみられる。外面はハケ目の後部分的にナデ、内面は指押さえ成形の後削りを施す。

53～55は器台である。

53は器高18.0cm、底径14.6cm、上部径15.8cm、赤褐色を呈し、内外面ハケ目、内面の一部にヘラ削り、端部に刻目を施す。

54は器高19.9cm、底径16.3cm、上部径14.2cm、にぶい黄褐色を呈し、内外面ハケ目、内面の一部にヘラ削りを施し、外面に黒斑がみられる。



図40 SD65および周辺遺構実測図 (S= 1 / 200)

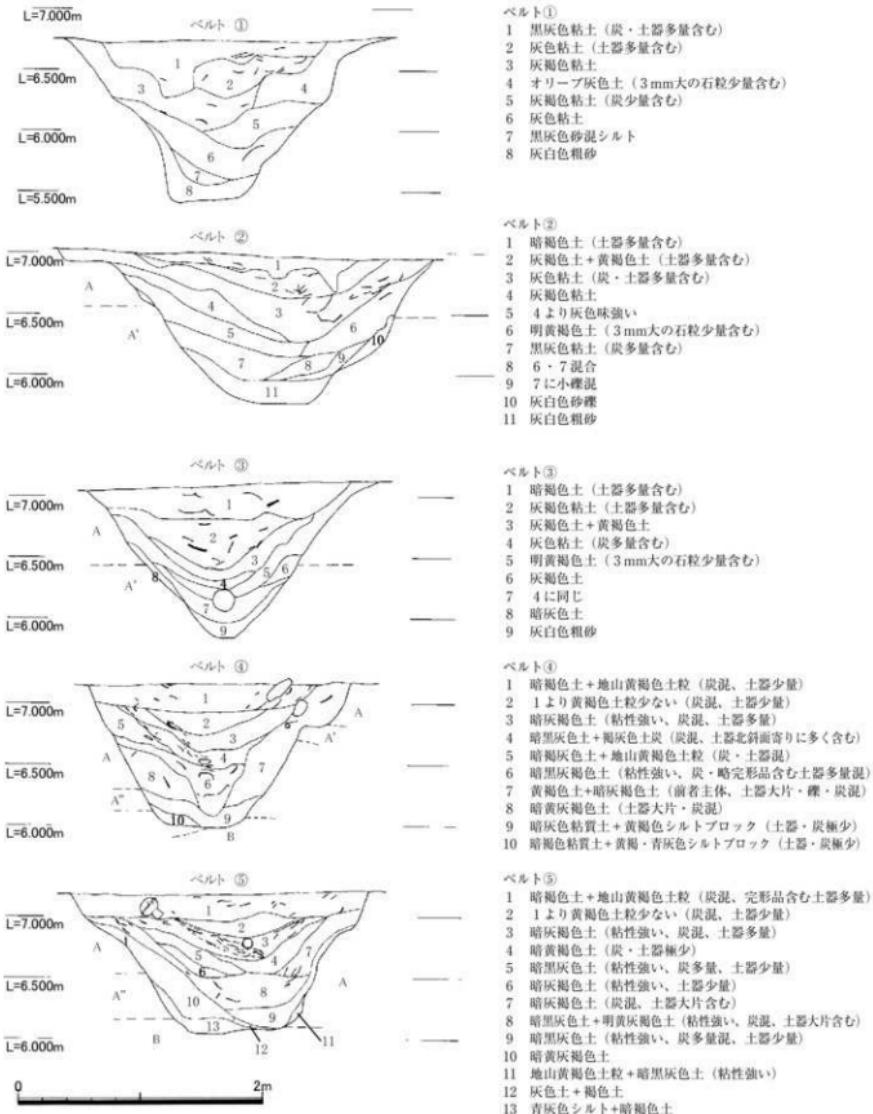
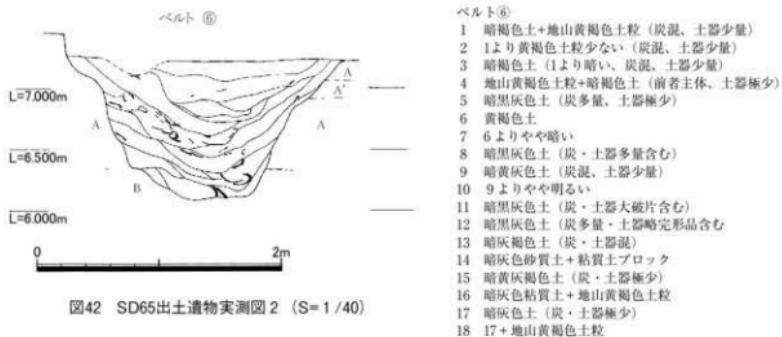


図41 SD65土層断面実測図1 (S=1/40)



55は器高23.9cm、底径20.5cm、上部径20.8cm、淡黄褐色を呈し、内外面ハケ目、内面の一部にヘラ削りを施す。

56は甕である。器高14.6cm、復元口径16.0cm、淡赤褐色を呈し、外面は胴部ハケ目、口縁部横ナデ、内面は口縁部ハケ目、胴部ナデ、底部押さえを施す。

第3層（図47・48、図版59）

57~59は壺である。

57は器高19.5cm、口径14.0cm、灰黄・赤褐色を呈し、内外面ハケ目、内面にわずかに削り痕がある。内面に炭化物が付着する。

58は器高39.9cm、口径21.0cm、外面淡赤褐色、内面明赤褐色・黒褐色を呈す。胴部上半と下端の2ヶ所焼成後穿孔を施し、外面はハケ目・ヘラ削り、内面は口縁部を除き全面ハケ目調整である。外面上半・口縁部内面に赤色顔料の痕跡が残る。内面の頸部より下に二次的被熱の痕跡があり、底部付近に炭化物が付着している。

59は器高31.0cm、口径20.7cm、淡赤褐色を呈し、外面ハケ目、口縁部ナデ、内面口縁部ハケ目、胴部ナデを施す。外面に黒斑がみられる。

62・63・65は鉢である。

62は器高11.4cm、口径24.0cm、淡褐色を呈し、外面横ハケ目・ナデ、内面ハケ目・ナデ・指押さえ、口縁端部は四線の後ナデを施す。

63は器高7.8cm、口径16.5cm、明赤褐色を呈し、外面は胴部下半が削りの後ナデ、口縁部がハケ目、内面は口縁部がハケ目の後部分的にナデ消し、胴部下半がナデである。

60・61はミニチュア土器である。

60は器高3.0cm、口径6.2cm、明黄褐色を呈し、ナデ調整である。

61は器高4.8cm、口径10.6cm、にぶい灰赤褐色を呈し、ナデ調整で、黒斑がみられる。

64は高杯の杯部である。口径26.4cm、杯高6.4cm、淡明赤褐色を呈し、内外面ミガキ調整で、赤色顔料の痕跡がみられる。

67は支脚である。器高11.0cm、底径13.0cm、上部径8.4cm、淡赤褐色を呈し、外面ハケ目、内面ヘラ削り・指押さえを施す。

69~71は器台である。

69は器高12.8cm、底径11.0cm、上部径9.3cm、上部・外面は灰赤褐色、下部は明赤褐色を呈し、指押さえ成形の後ナデを施す。

70は器高10.5cm、底径11.0cm、上部径9.0cm、明赤褐色を呈し、内外面ナデ・ハケ目を施す。

71は器高19.6cm、底径15.0cm、上部径15.0cm、内外面赤褐色を呈し、外面上部を丹塗り、外面縦ハケ目、内面ハケ目・ヘラ削りを施す。

第4層（図49・50、図版60・61）

74・75は壺である。

74は器高26.2cm、口径15.5cm、淡明赤褐色を呈し、胴部は内外面ハケ目、後頸部はナデ、内面底部は指押さえを施す。

75は器高33.2cm、口径23.5cm、淡赤褐色を呈し、調整は全体的に摩耗で不明瞭だが、外面にハケ目が一部残り、ハケ目内に赤色顔料が残る。内面は底部付近にヘラ削りを施す。胴部上半に2ヶ所焼成後穿孔を施す。

76・78は鉢である。

76は器高10.5cm、口径20.4cm、外面はにぶい赤褐色、内面はにぶい黄赤褐色を呈し、外面はナデ・ハケ目、内面はハケ目を施す。頸部下に黒斑がみられる。

78は器高9.4cm、口径15.6cm、底径8.3cm、灰褐色を呈し、胴部下半ハケ目、その他はナデ、内面底部に指押さえを施す。内面の底部と体部の境に粘土接合痕が残る。

77・79は甕である。

77は残存高9.5cm、底径6.9cm、明赤褐色を呈し、底部外面のみナデ、その他はハケ目を施す。底部に焼成前穿孔を施す。

79は器高14.5cm、口径12.0cm、底径5.5cm、外面赤褐色、内面暗茶褐色を呈し、外面は底部と口縁部がナデ、内面は底部が指押さえ、その他がハケ目を施す。胴部下半に焼成後剥離がみられる。

80は高杯の杯部である。口径26.4cm、杯高6.4cm、淡明赤褐色を呈し、内外面ミガキを施し、赤色顔料の痕跡がみられる。

81～83は器台である。

81は器高12.3cm、上部径9.8cm、底径10.2cm、やや明るい赤褐色を呈し、外面ハケ目、内面指押さえの後ナデを施す。

82は器高9.5cm、上部径9.0cm、底径10.2cm、明赤褐色を呈し、内面にヘラ削り・ハケ目・指押さえを施す。

83は器高11.0cm、上部径10.4cm、底径11.9cm、淡明赤褐色を呈し、外面ハケ目、端部付近にナデ、内面はハケ目・ナデ・削りをほどこす。

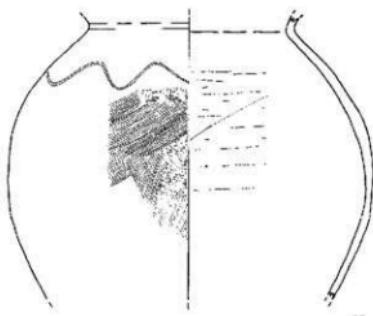
第5層（図51～54、図版62・68）

87～91は鉢である。

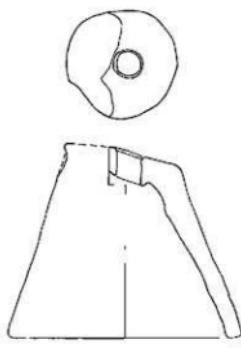
87は器高7.5cm、口径14.0cm、底径5.4cm、淡褐色を呈し、内面の上端ヘラ削り、それ以外はナデを施す。黒斑がみられる。

88は器高10.2cm、口径19.3cm、底径5.5cm、外面淡赤褐色、内面明赤褐色を呈し、内外面ナデを施す。底部に焼成後穿孔を施す。焼成不良である。

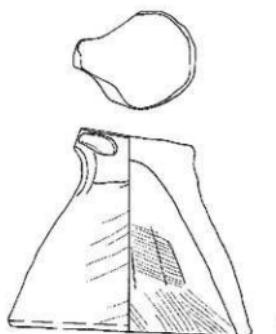
89は器高8.6cm、口径20.5cm、底径6.0cm、やや淡い明赤褐色を呈し、外面の頸部下がハケ目のほ



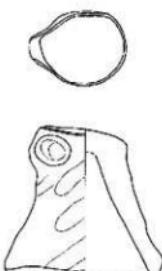
25



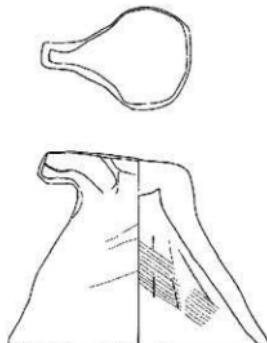
26



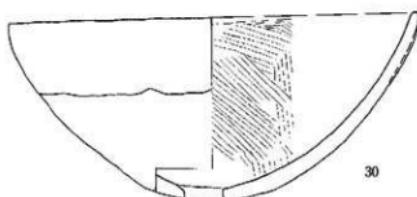
27



28



29

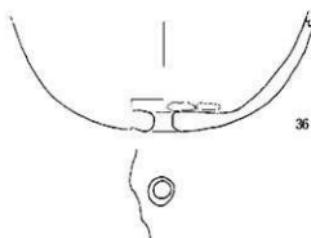
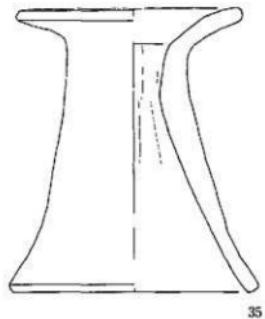
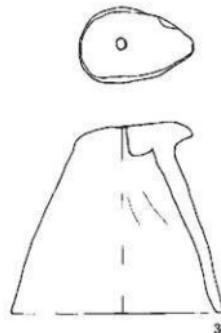
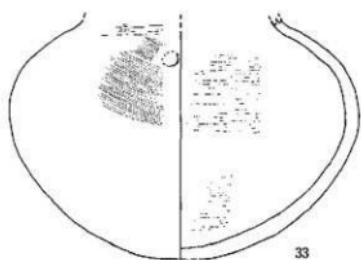
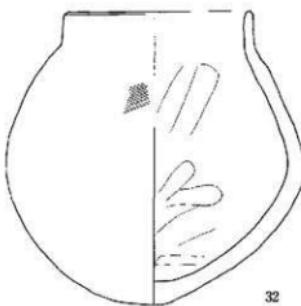
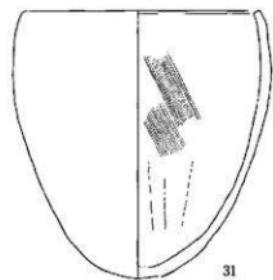


30



0 15cm

図43 SD65出土遺物実測図1 (S=1/3)



0 15cm

図44 SD65出土遺物実測図2 (S=1/3)

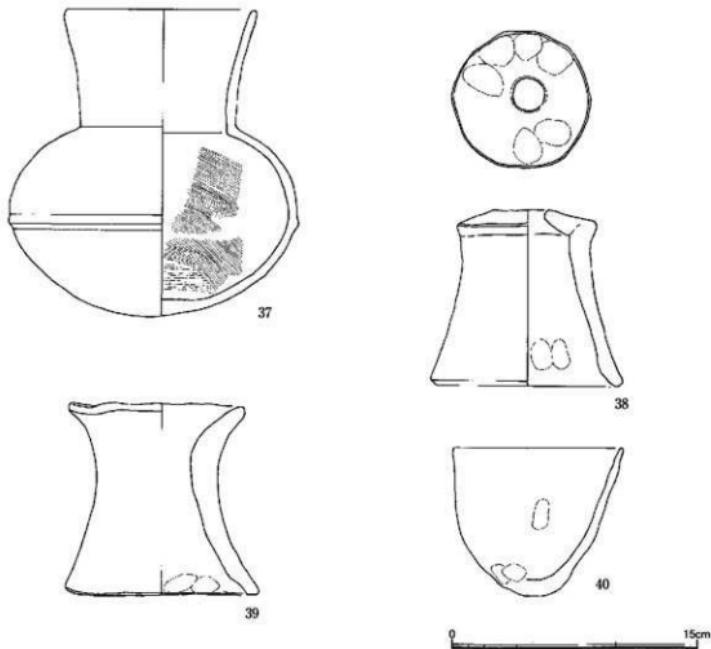


図45 SD65出土遺物実測図 3 (S=1/3)

かはナデを施す。

90は器高13.5cm、口径21.9cm、底径7.2cm、淡赤褐色を呈し、口縁部内外面・底部外面ナデ、胴部外面ハケ目、胴部内面は棒状工具で成形の後ナデ、底部内面は指押さえを施す。

91は器高13.0cm、口径22.6cm、淡褐色を呈し、口縁部外面ナデのはかはハケ目を施す。一部黒斑がみられる。

93~95はミニチュア土器である。

93は器高4.9cm、口径8.8cm、底径5.0cm、暗赤褐色を呈し、内外面丁寧なナデを施す。底部から胴部下半の外面に黒斑がみられる。

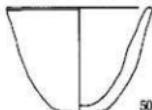
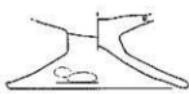
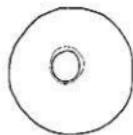
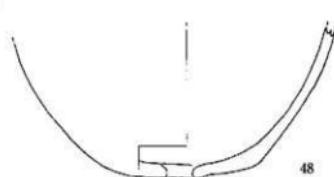
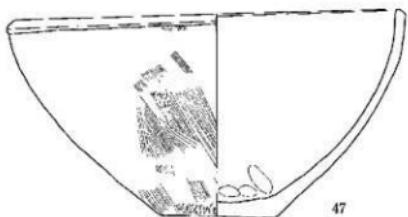
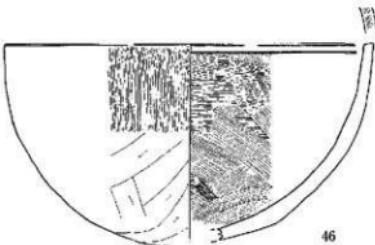
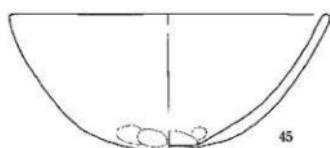
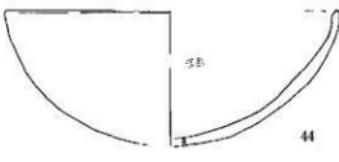
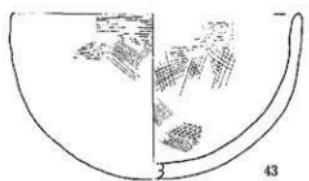
94は器高6.5cm、口径10.7cm、底径5.0cm、橙褐色を呈し、口縁部外面ハケ目のほかはナデを施す。

95は器高5.7cm、口径11.5cm、底径3.9cm、灰褐色を呈し、胴部外面下半ハケ目のほかはナデを施す。口縁部外面に黒斑がみられる。

98~100・103は壺である。

98は器高31.2cm、口径23.1cm、底径8.0cm、淡明赤褐色を呈し、内面と底部外面ナデ、外面はハケ目を施すが摩耗のため不明瞭である。底部内面は指押さえである。

99は器高29.1cm、口径20.7cm、底径7.0cm、外面淡灰・赤褐色、内面にぶい赤褐色を呈し、内面と底部外面ナデ、外面はハケ目を施すが摩耗のため不明瞭である。



0 15cm

図46 SD65出土遺物実測図4 (S=1/3)

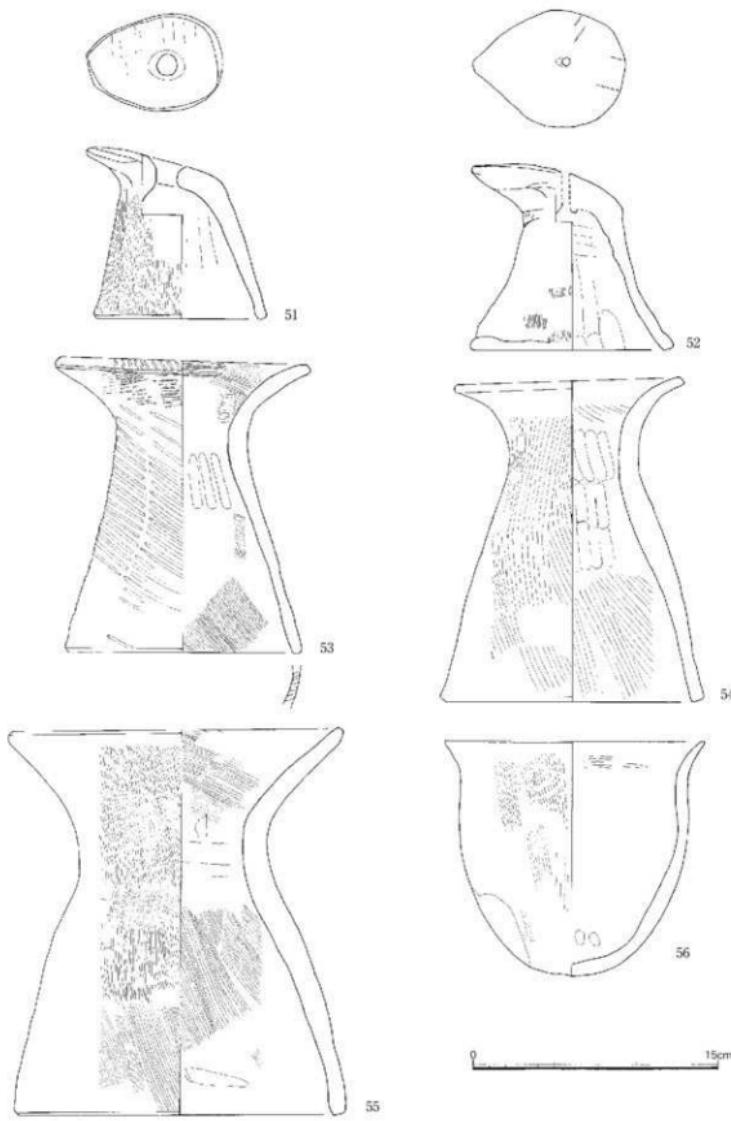


図47 SD65出土遺物実測図 5 (S=1 / 3)

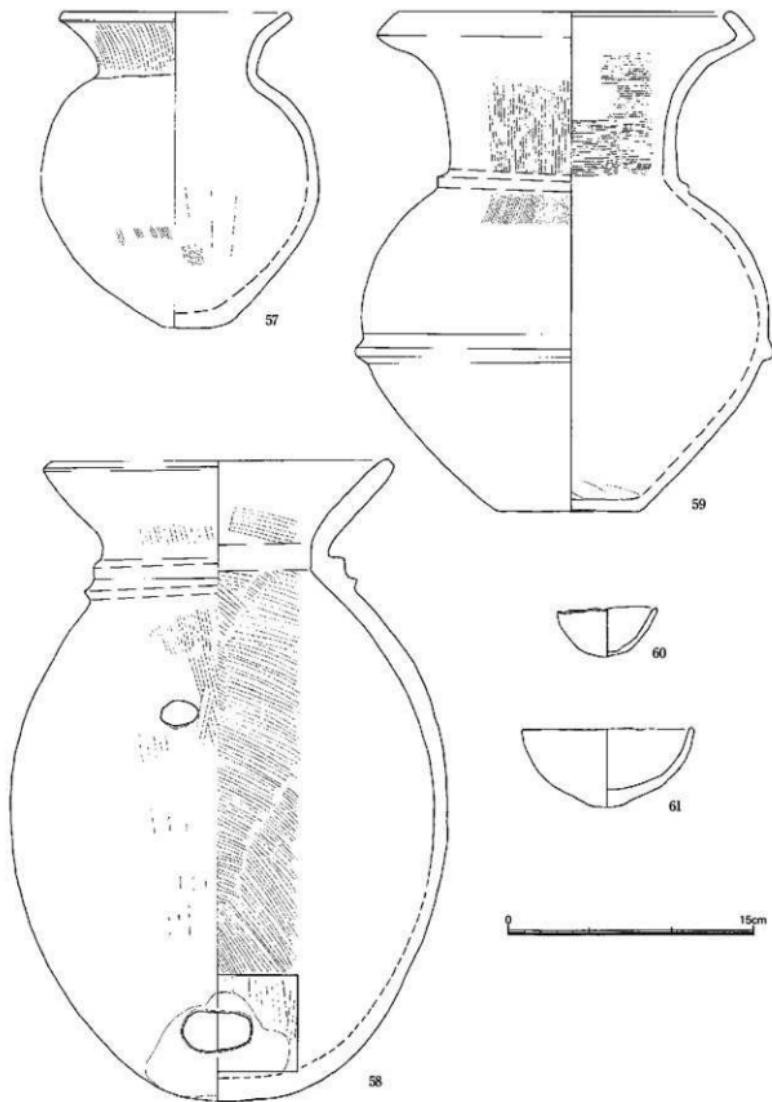


図48 SD65出土遺物実測図 6 (S=1 / 3)

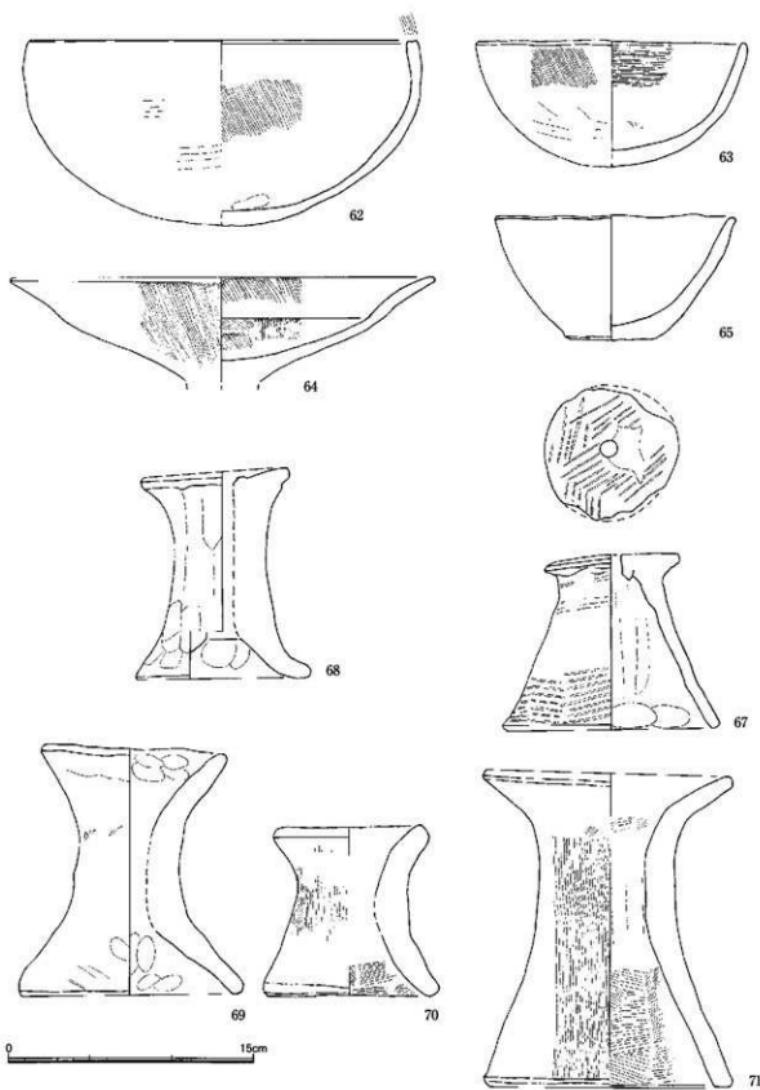


図49 SD65出土遺物実測図 7 (S=1/3)

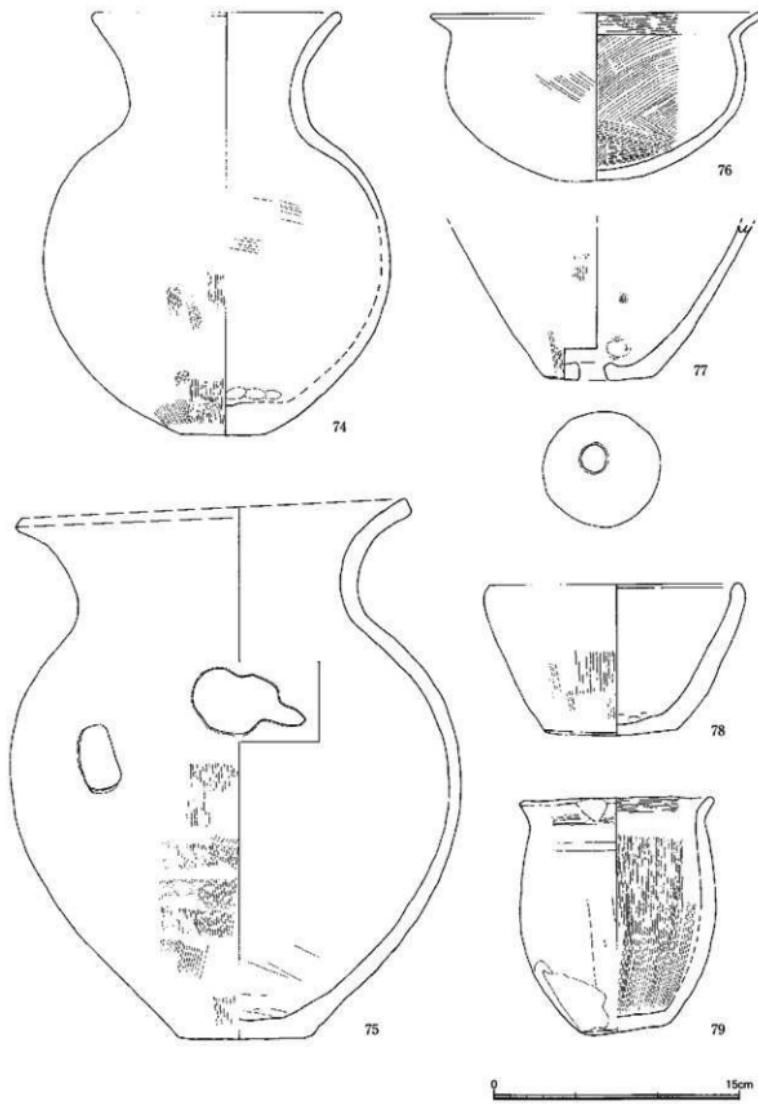


図50 SD65出土遺物実測図 8 (S=1/3)

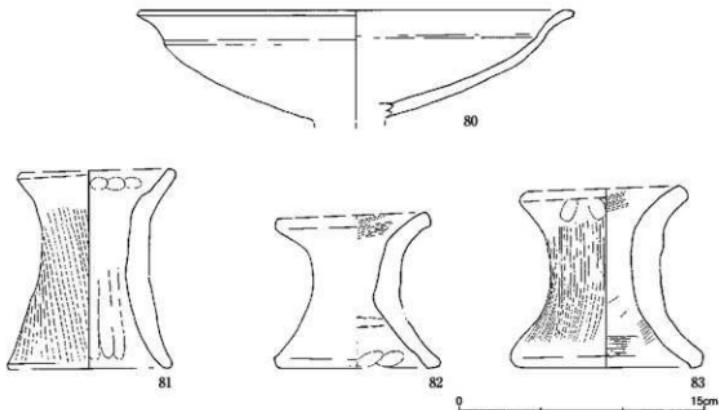


図51 SD65出土遺物実測図 9 (S=1/3)

100は器高33.0cm、口径24.0cm、底径9.0cm、外面茶褐色・淡赤褐色、内面暗黄褐色を呈し、口縁部・底部の外面、内面の頸部より下はナデ、ほかはハケ目を施す。胴部外面上半に煤が付着する。

103は器高17.0cm、口径16.9cm、底径6.7cm、外面淡褐色、内面淡黄褐色を呈し、内面の頸部より下と底部外面ナデ、ほかはハケ目、底部内面に指押さえを施す。外面底部付近に黒斑、胴部下半に焼成後剥離がみられる。

102・104は広口壺である。

102は器高10.2cm、口径11.5cm、底径6.5cm、淡赤褐色を呈し、内外面ナデで内面は一部ヘラ削りの後ナデを施す。口縁部と底部に黒斑がみられる。

104は残存高19.0cm、口径21.4cm、淡灰褐色を呈し、口縁部内外面と内面の頸部より下がナデ、ほかはハケ目を施す。

105・106は袋状口縁壺である。

105は器高33.0cm、口径13.0cm、底径7.3cm、外面明赤褐色、内面淡黄・明赤褐色を呈し、内面と底部外面ナデ、外面は底部付近がミガキ、その他はハケ目、突帯間は暗文を施す。赤色顔料が部分的に残る。③出土

106は⑦出土。赤塗りで中期の名残を持ち、胴部に方形の穿孔を施す。

108～111は器台である。

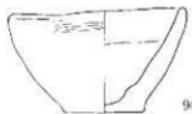
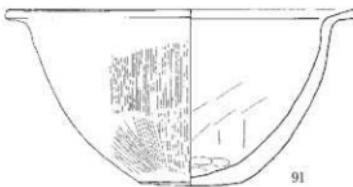
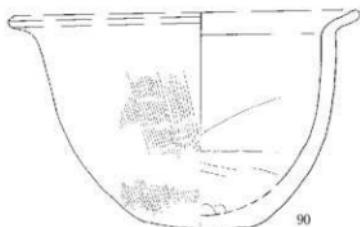
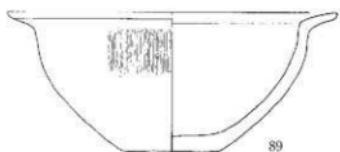
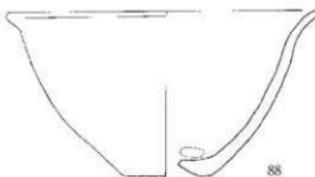
108は器高9.0cm、上部径8.0cm、底径10.5cm、やや暗い赤褐色を呈し、内外面ナデを施す。

109は器高8.0cm、上部径8.0cm、底径7.8cm、淡・赤褐色を呈し、内外面ナデを施す。

110は器高11.5cm、上部径8.9cm、底径13.0cm、にぶい赤褐色を呈し、上端部内外面ナデ、外面および内面下端部ハケ目、内面体部削りの後ナデを施す。外面に一部黒斑がみられる。

111は器高17.2cm、上部径13.2cm、底径15.3cm、やや淡い明赤褐色を呈し、外面ハケ目、内面下半ナデ、上端ハケ目を施す。

112は支脚である。器高11.2cm、上部径7.8cm、底径11.2cm、外面やや暗い赤褐色、内面明赤褐色を呈し、内外面ハケ目を施す。2ヶ所に黒斑がみられる。



0 15cm

図52 SD65出土遺物実測図10 (S=1 / 3)

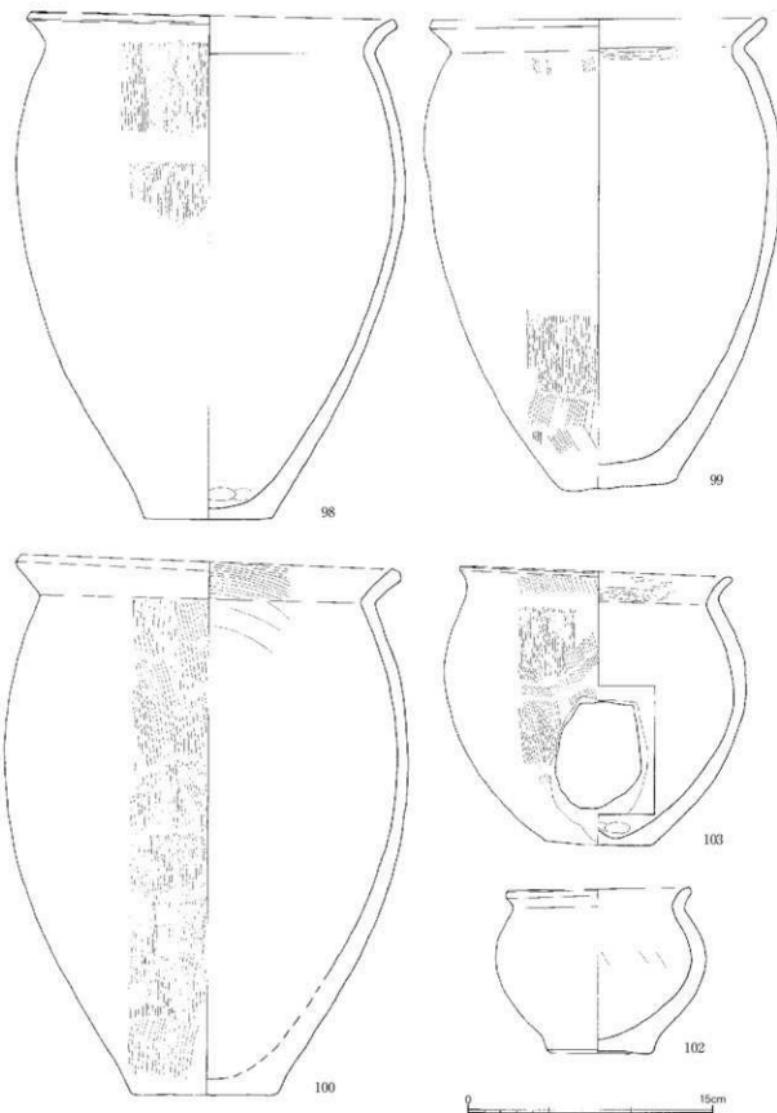


図53 SD65出土遺物実測図11 (S=1 / 3)

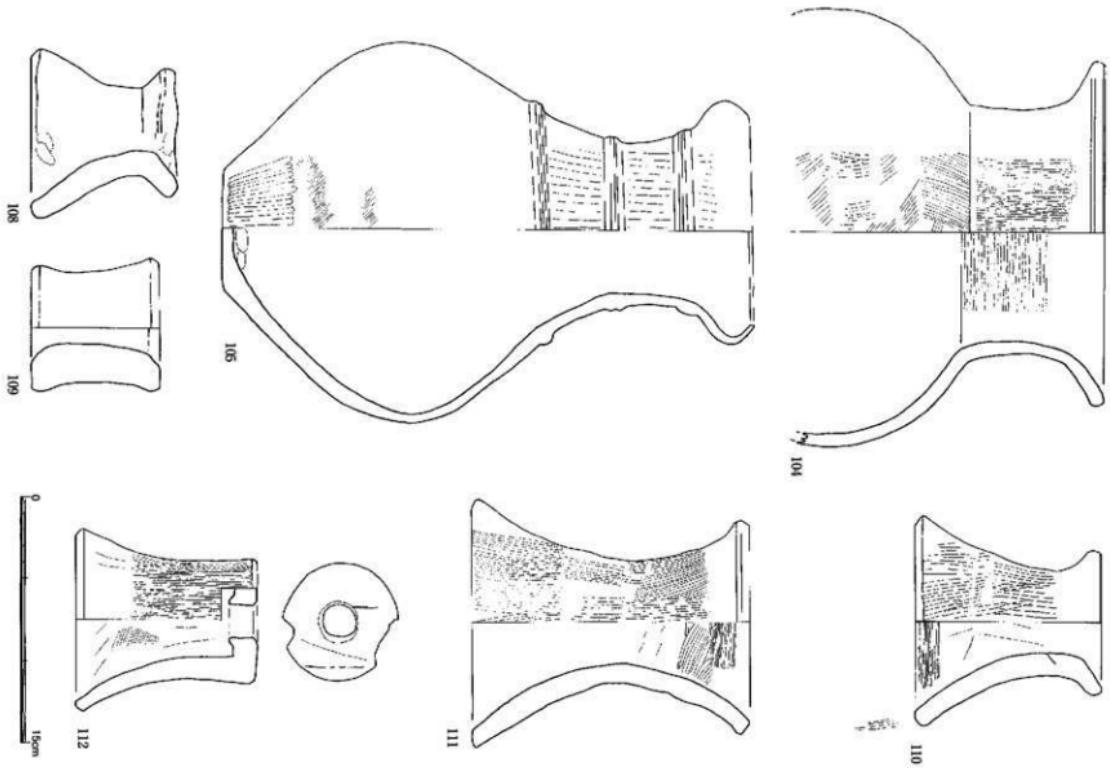
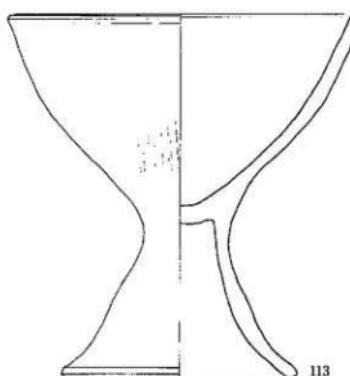
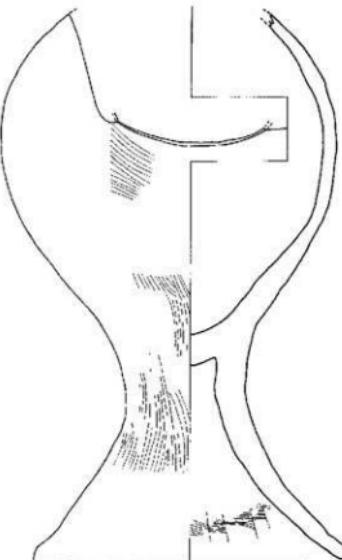


図54 SD65出土遺物実測図12 (S=1/3)



113

0 15cm



114

図55 SD65出土遺物実測図13 (S=1/3)

113は高杯である。器高22.5cm、復元口径21.9cm、底径14.6cm、淡灰褐色を呈し、内面ナデを施す。外面は摩耗で不明瞭。

114は脚付き壺である。残存高34.1cm、胴部径20.9cm、底径19.4cm、灰褐・橙褐色を呈し、内面ナデ、外面ハケ目を施す。壺胴部上半に円形または略方形となる窓が開く。

第6層（図56・57、図版67）

115～119は甕である。

115は器高29.0cm、復元口径24.0cm、底径5.6cm、外面上半灰褐色、底部付近明赤褐色、内面灰黄色を呈し、外面ハケ目、内面ナデを施す。口縁部に黒斑がみられる。

116は器高36.7cm、口径23.6cm、淡赤褐色を呈し、口縁部内外面横ナデ、外面ハケ目、内面ナデ、底部内面指押さえを施す。胴部に黒斑がみられる。

117は器高14.7cm、口径18.7cm、底径6.8cm、灰褐色を呈し、口縁部内外面横ナデ、外面ハケ目、内面ナデを施す。底部に穿孔を施す。

118は器高15.0cm、口径25.0cm、底径9.2cm、赤褐色を呈し、口縁部内外面横ナデ、外面ハケ目、内面ヘラ削りを施す。

119は器高21.4cm、口径25.0cm、底径8.2cm、灰褐色を呈し、口縁部内外面横ナデ、外面ハケ目、内面ナデを施す。胴部上半に黒斑がみられる。

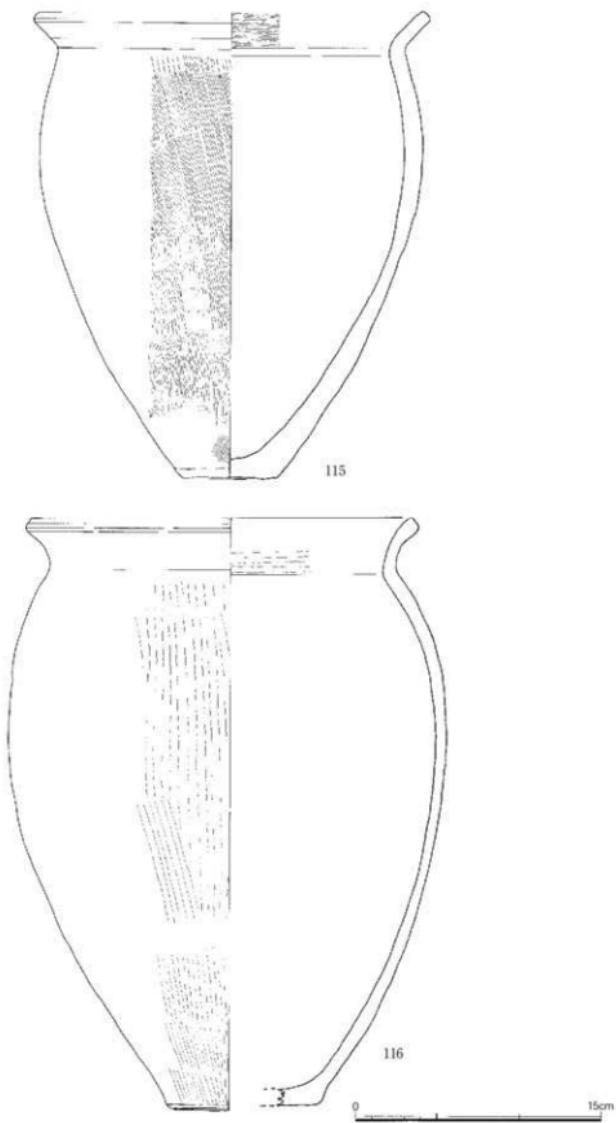


図56 SD65出土遺物実測図14 (S=1/3)

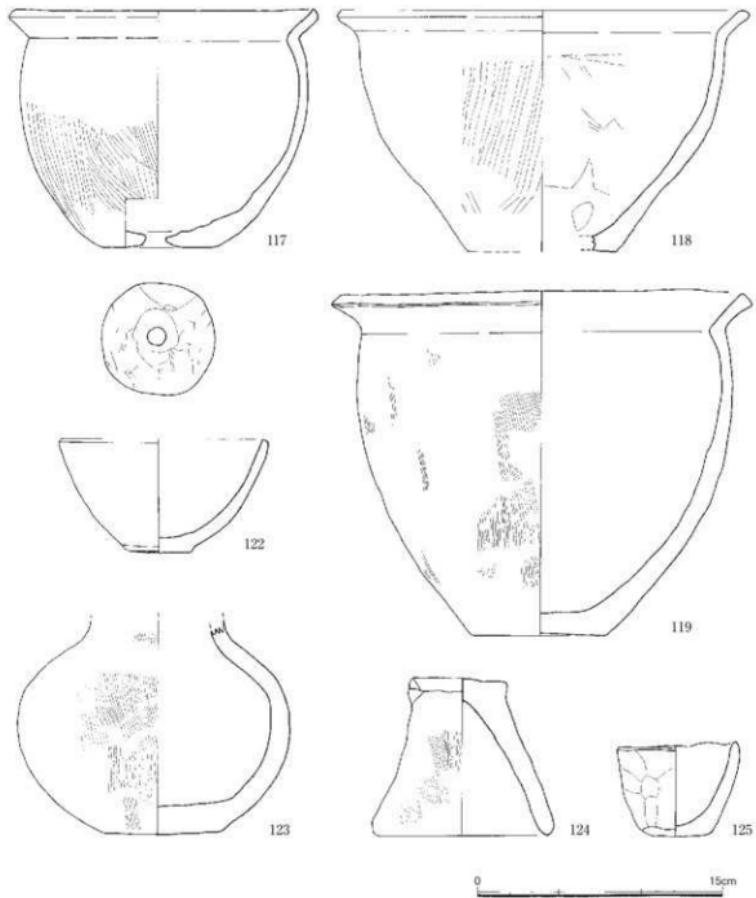


図57 SD65出土遺物実測図15 (S=1 / 3)

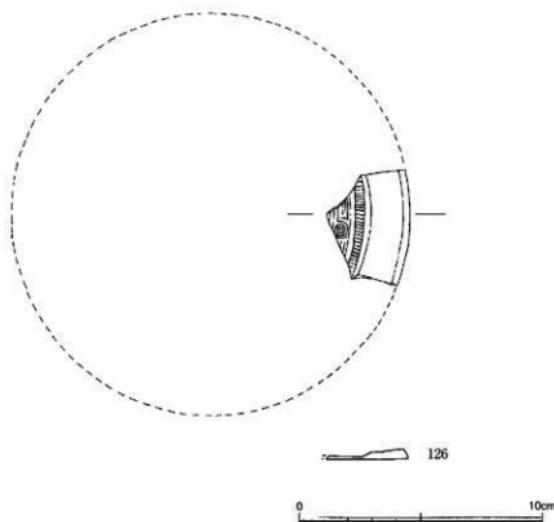


図58 SD65出土遺物実測図16 (S=1/2)

122はミニチュアの鉢である。器高7.7cm、口径15.0cm、底径5.5cm、やや淡い明赤褐色を呈し、内外面ナデを施す。

123は壺である。残存高13.3cm、底径7.0cm、淡赤褐色を呈し、外面ハケ目、内面ナデを施す。一部に黒斑がみられる。

124は支脚である。器高9.7cm、上部径6.0cm、底径11.0cm、にぶい赤褐色を呈し、胴部外面ハケ目、上部・内面ナデを施す。器高14.7cm、口径18.7cm、底径6.8cm、灰褐色を呈し、口縁部内外面横ナデ、外面ハケ目、内面ナデを施す。

125はミニチュア土器である。器高5.6cm、口径7.3cm、底径4.3cm、赤褐色を呈し、内外面ナデを施す。

楽浪系土器（図版68）

127～130は鉢の口縁部、131は胴部片である。これらを含め計18点出土しており、いずれも鉢の破片で内訳は口縁部が5点、胴部・底部が13点である。灰白色を呈し、泥質の精良な胎土である。2・3層の出土である。

132・133は圧痕土器である。

132は破片の内面で、長径1.05cm、短径0.75cmの穀物の実か種と見られる。種別は不明である。⑤-2 b 3層出土。

133は破片の外側で、長さ1.3cm、幅0.4cmの虫と見られ、体部の縞が明瞭に残る。種別は不明である。

④-1 a 3層出土。

石製品（図版70）

137・138は穂摘具の未成品で輝緑凝灰岩製である。137は横幅11.05cm、縦長5.9cm、厚さ1.3cm、⑦4層出土で粗削・剥離整形段階、138は横幅10.0cm、縦長6.4cm、厚さ1.0cm、③-2a-5層出土で研磨済み・未穿孔段階の資料である。剥離整形段階資料は、今宿五郎江遺跡2次調査のSD100（小銅鐸出土、環濠よりはやや古相の溝）から1点、同10次調査の環濠から2点が出土している。研磨済み・未穿孔段階の資料は福岡市西区元岡・桑原遺跡群42次調査で1点出土している。

139は環状石斧である。一辺が4.7~5.3cmの五角形で厚さ1.5cm、孔径2.8cmである。⑥1層出土。

140は繩文時代の磨製石斧とみられる。残存長26.8cm、刃部幅9.6cm、厚さ4.3cmである。基部が欠損しており、刃部は磨かれているがその他の体部は敲打痕が残る。⑤5層出土。

鍾は計32点にのぼる。内16点が中層の3・4層出土である。滑石製で九州型である。

大型船刃石斧は②3層から1点出土している。

扁平片刃石斧はベルト②2層から1点出土している。

砥石は⑥-2a-4層から1点、ベルト⑤5層から1点出土している。

紡錘車はベルト③5層から1点出土している。

142は管玉である。滑石製で①上層出土。残存長0.8cm、径0.45cmの円筒形で、孔径は0.2cmである。

141は碧玉剥片である。縦2.1cm、横1.1cmの縦長で③-2-2層出土。

金属製品

銅鏡破片（図版58-126、巻頭図版4）

⑦第2層出土。中国製内行花文鏡である。復元径16.2cm、厚さは鏡縁0.4cm、外区0.1cmである。破断面は研磨されており、破鏡とみられるが穿孔はない。雲雷文の渦巻き文が同心円に変化しており、岡村秀典氏の編年によれば漢鏡5期・四葉座II式に相当する。同型式の類例は、那珂遺跡群69次調査SC041例、平原遺跡第1号墓第15号鏡がある。櫛歯文の隙間に微量の赤色顔料と見られる付着物が残っている。

鋳造鉄斧（図版69）

134は残存長5.3cm、幅3.4cmで①2層出土。135は残存長8.3cm、残存幅3.9cmで④-2a-7層出土。136は残存長6.35cm、残存幅4.4cmで②3層出土。

木製品（図版70）

銛（143）

長さ40cm、削りこみの浅い2段の逆刺と緊縛用の欠き込みを持つ。①最下層出土。類例は3段の逆刺のものが今宿五郎江遺跡12次調査の環濠から出土している。

又歛の刃（144）

長さ31.6cm、幅6.2cm、厚さ1.6cmである。①最下層出土。

ガラス製品（図版71）

丸玉（145）

ベルト③2層出土。2×2.4cmの偏球形で、径0.7cmの穿孔があり、半分に割れている。

勾玉 (146)

ベルト② 2層出土。大2.3cm、厚さ0.55cmで径0.35cmの穴が開く。白色で風化が著しい。

小玉

コバルトブルーが4点、紺が1点出土している。コバルトブルーは⑥4・5層、⑦上層・4層出土。紺は①上層出土。

SD67 (図40)

L字形をなす溝である。幅0.35~0.63m、深さ0.07~0.16mである。SD80・SC89を切り、SB100のSP715に切られる。

SD69 (図40、図版43)

隅丸方形にめぐる溝である。SD80、SB101のSP689に切られ、SD70を切る。幅0.18~0.4m、深さ0.05~0.2mである。

出土遺物 (図版72)

147は甕の底部である。

SD80 (図40、図版43)

SC89の南側を区画する円形にめぐる溝である。SD69を切る。幅0.27m、深さ0.05~0.23mである。弥生時代終末に属す。

出土遺物 (図版72)

148・149は器台である。150は杯である。

SD87 (図40)

緩やかな弧状の溝である。幅0.23~0.49m、深さ0.22~0.26mである。

出土遺物 (図版72)

151は水晶製切子玉である。縦1.5cm、横1.4cmで平面六角形の柱状に整形しており、未穿孔である。

掘立柱建物

SB93 (図59、図版50)

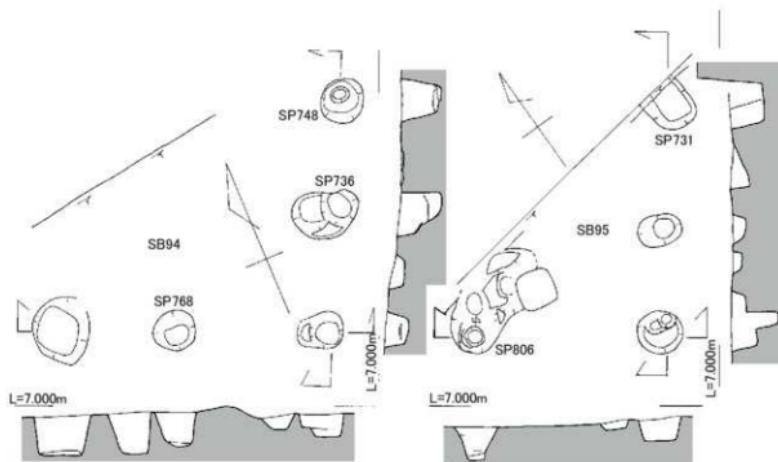
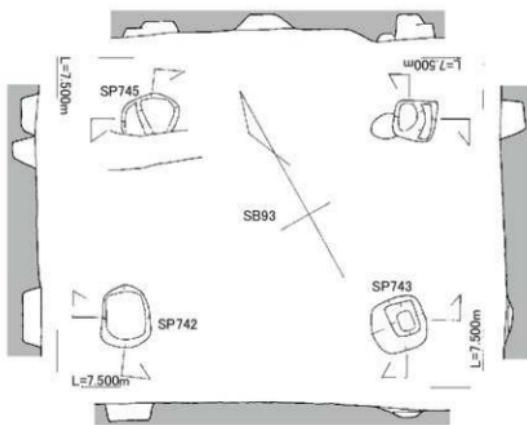
1間四方で、磁北より30°東偏する。柱間は桁行3.15~3.5m、梁行2.55mで、ピットの残存深さは0.13~0.33mである。

SB94 (図59、図版50)

2間×2間以上で、磁北より25°東偏する。柱間は桁行1.5~1.9m、梁行1.35~1.6mで、ピットの残存深さは0.31~0.57mである。

SB95 (図59)

1間×2間以上で、磁北より35°東偏する。柱間は桁行1.15~1.6m、梁行2.4mで、ピットの残存深さは0.17~0.67mである。



0 3m

図59 SB93・94・95実測図 ($S=1/60$)

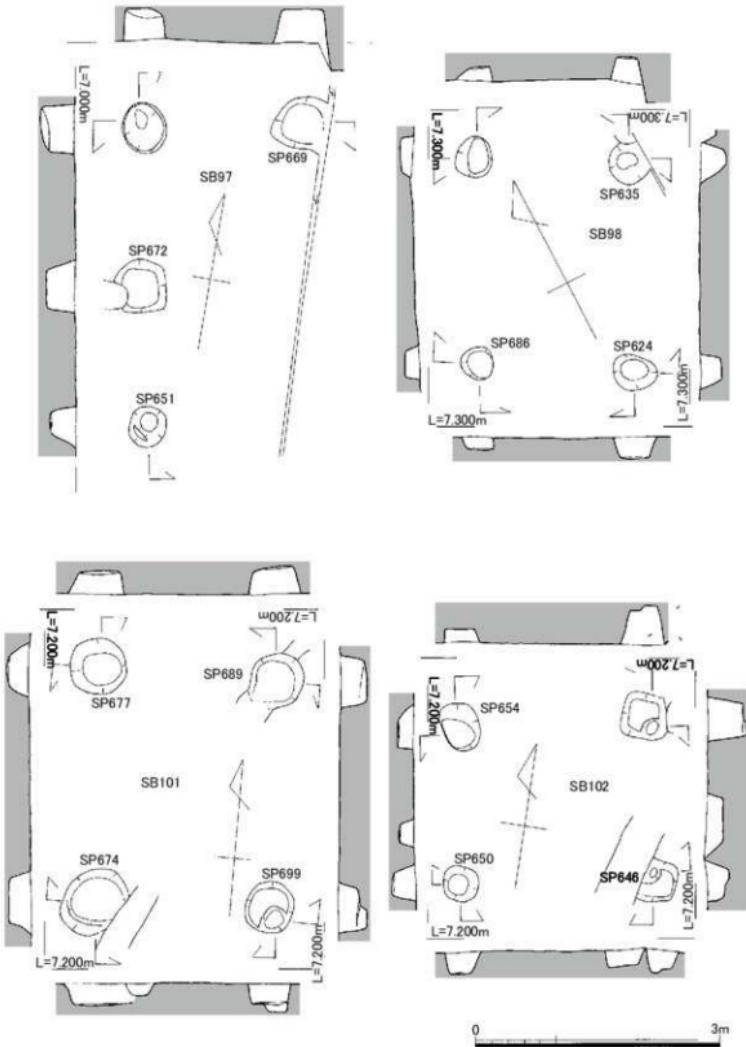


図60 SB97・98・101・102実測図 (S=1 / 60)

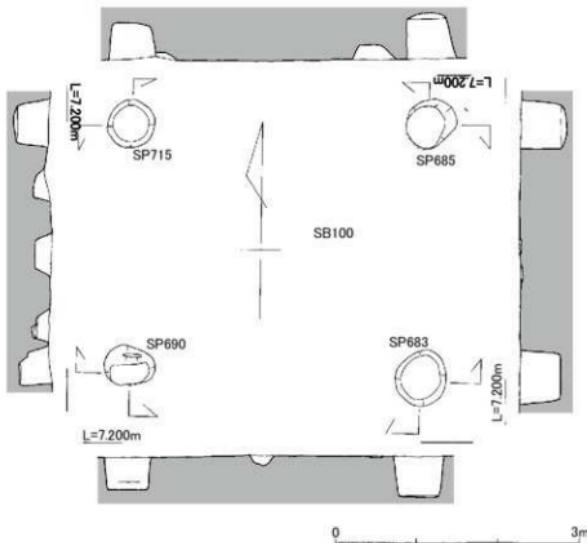


図61 SB100実測図 (S=1/60)

SB97 (図60・図版51)

2間×2間以上で、磁北より 10° 西偏する。柱間は桁行1.7~2.1m、梁行2mで、ピットの残存深さは0.34~0.46mである。

SB98 (図60・図版51)

1間四方で、磁北より 28° 東偏する。柱間は桁行2.6m、梁行1.9~1.95mで、ピットの残存深さは0.18~0.36mである。

SB100 (図61)

1間四方で、磁北より 2° 東偏する。柱間は桁行3.65~3.7m、梁行3.1~3.15mで、ピットの残存深さは0.41~0.57mである。

SB101 (図60)

1間四方の南北棟で、磁北より 4° 西偏する。柱間は桁行2.85~2.95m、梁行2.2~2.25mで、ピットの残存深さは0.28~0.35mである。

SB102 (図60)

1間四方で、磁北より 10° 西偏する。柱間は桁行2.42m、梁行1.8~1.9mで、ピットの残存深さは0.19~0.5mである。

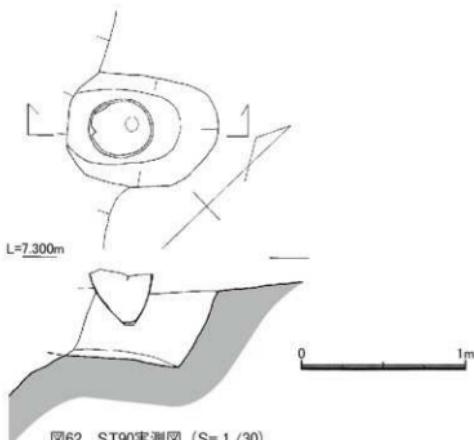


図62 ST90実測図 (S= 1 / 30)

豎穴住居

SC89 (図40、図版49)

SD80に囲まれ、3.2m四方の方形になるものと見られる。南端部をSD67に切られる。貼り床がなされ、掘り込みの深さは貼り床上面で9cm、貼り床除去後で13cmである。東辺南半・南辺東半に周壁溝の痕跡がわずかにあり、深さは3cmである。SD80の出土土器から、弥生時代終末と見られる。

SC96 (図23、図版52)

SD65の南、3次調査地点の東で検出した。弥生土器片が含まれており、遺物包含層の掘り残しとして当初掘り下げた。しかし中央に炭の集中分布が1ヶ所、溝も見られたことから、平面プランに不整形な面が見られるものの、豎穴住居として報告する。6×6mの範囲で、検出面からの深さは5～18cm、幅23cm・深さ7cmの溝が東半に造られる。出土遺物は弥生土器片、石錘がある。

土器棺墓

ST90 (図62、図版52)

掘形は現存長0.62m、幅0.46m、深さ0.3mの楕円形をなし、SD65に切られる。底から0.14m浮いた位置に平底の甕を埋置しているが、削平のため底部のみ残存する。

出土遺物 (図版72)

152は甕である。

5 まとめ

11次調査では弥生後期を主体とする多数の遺構を確認した。土器棺墓4基、掘立柱建物26棟、竪穴住居3棟、土坑、溝、ピットである。時期変遷を概観しておく。

本調査で最も古い遺物は丘陵部の遺物包含層から出土した阿高式土器片で縄文中期の終わりである。包含層には器台などが含まれ、弥生時代であり、混入品である。しかし一部の遺構や谷部の包含層からも黒曜石製ははじめ計6点の打製石礫が出土しており、後に述べる弥生後期の環濠SD65の下層から打製石斧が1点出土していることから、付近が縄文時代の狩り場・作業場であった可能性がある。筆者が調査を担当した徳永B遺跡では、残りの比較的良好な阿高式土器の鉢が出土しており、それも合わせて高祖山北麓一帯の縄文時代の様相を知る貴重な資料となる。

次に本調査の主要な成果となるのが、弥生時代後期である。調査区の北東隅で検出したSD65は、北隣の今宿五郎江遺跡12次、南北道路を挟んで東隣の同9次で検出された大溝とつながる。当初今宿五郎江11・12次で検出された大溝は大塚11次調査区で途切れるものと予測していたが、今宿五郎江遺跡の西・南・東を取り囲む環濠であることが明らかになった。今回の調査によって、今宿五郎江集落南部の環濠の全容がほぼ明らかになり、集落全体の規模が確定した。内法で東西長200m、南北長推定270mとなる。このような大規模な環濠集落の発見は、糸島とその周辺地域では初例となる。

集落の出入り口については、集落の東側に当たる今宿五郎江遺跡13次調査で地山を掘り残した陸橋が検出されている。その位置は集落の西側、今宿五郎江遺跡11次調査の環濠がなくなる位置にはば対応しており、東西が主であったようである。仮に南北にもあるならば、未調査部分である、本調査地点と今宿五郎江遺跡9次調査地点との間にある南北道路上に想定できる。

掘削の時期としては、下層で出土した完形の甕や、袋状口縁壺が指標となり、後期初頭とみられる。出土土器から、終末に完全に埋められた状態に至るまで機能していたことがわかる。

環濠内も遺構密度が非常に高く、溝・柱穴の切り合いが激しい。環濠内に周囲に略方形に溝をめぐらす竪穴住居が造られており、溝出土の器台の特徴から終末に当たるものとみられる。こうした竪穴住居の構造は、玉作工房が確認された糸島市・潤地頭船遺跡とよく類似しており、本調査でも水晶製切子玉の未穿孔品が1点、竪穴住居に関連する溝から出土した。朝鮮半島南部の伽耶地域で発見例が増加している水晶玉をも自給している可能性があり、注目される。

出土遺物も大量の土器の他、金属器・石器・木製品と質量ともに豊富である。

土器では外来の楽浪系土器が注目され、鉢が主体である。東海系とされる円窓を有する脚付壺など列島内の他地域からの搬入または影響を受けたとみられる土器がある。

金属器では、中国製内行花文鏡の破片が糸島市・平原遺跡1号墓と本市博多区の那珂遺跡群出土例と文様が共通する。鋳造鉄斧も3点出土した。石器では石鍤が目立つ。また中期に飯塚市立岩で製作され流通したとされる小豆色と称する輝銀凝灰岩製槌揃具の製作途中段階の資料が確認できた。時期は環濠出土品であり、後期に位置づけられるのは確実である。類例が今宿五郎江遺跡や元岡・桑原遺跡群で出土しており、県外でも後期の資料がみられる。石材を笠置山から調達してきたのか、他に石材産地があるのか今後の検討課題である。石材を持ち込み、今宿五郎江の集落内で後期に生産していくことを示す資料であり、槌揃具の製作・流通問題を考える上で重要な資料である。

こうした出土遺物から引き出されるイメージは、对外交流の拠点という華やかなものとともに、海滨に位置する漁村や、原料は外部から搬入するが製作は集落内で自己完結できるというムラのイメージも残存している。この時期の大規模な環濠集落について「都市」と評価する論もあり、その是非は置いても、こうした議論に寄与する重要資料を多数含んでいるといえる。

また環濠のみならず、その南側の台地部にも掘立柱建物群をはじめ、遺構が広がっている。建物の時期としては、一部柱穴の形状・切り合いから中世とみられるものの他は、出土土器片の検討の結果、須恵器の混入がみられず、底部と体部の境が不明瞭になりつつある平底の破片がみられることから、後期後半～終末と考えている。建物間で土器型式の差が不明瞭で、短期間に幾度も建て替えられたのか、柱穴の密度が高く、切り合いが激しい。時期としては環濠がもう埋まり機能が失われようとする段階のものである。この状況から、環濠が埋没して集落が完全に衰退したというよりは、むしろ環濠で画される枠を超えて拡大している印象を与える。弥生終末、『三国志』魏書東夷伝倭人条に伊都国が登場する時期がその画期になっているとみられる。環濠を必要とした社会から、必要としない社会への進展・変化があったのではないかろうか。環濠の発展的解消である。

ここで内陸に同時期に存在し、歴代の王墓が確認されることから伊都国の首都と目されてきた糸島市・三雲遺跡群との関係が課題となってくる。

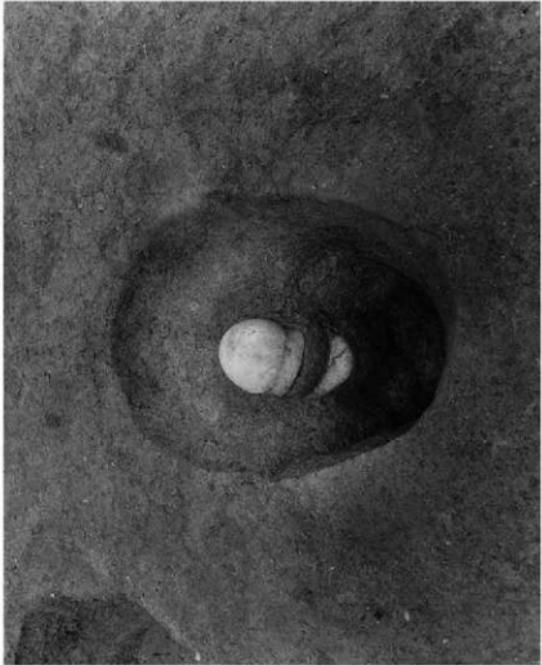
様々なケースが想定できるが、今宿五郎江・大塚の集落は三雲から見て、東の湾の入口を押さえる重要な位置にあり、奴国のある福岡平野へもつながる。相互補完・連携する協力関係にあったのだろう。

弥生時代から古墳時代への移行期の集落・社会の変遷を具体的に探りうる重要な資料を提供することが、今回の調査で可能となった。すでに調査終了から6年が経過し、その間に様々な研究書・概説書などで調査成果が取り上げられてきた。一刻も早く調査成果を正式に世に問うことが必要であり、ここにようやくきわめて不充分な内容ではあると思うが、果たせることになった。今後大いに活用され、新たな成果や問題が提出されることを望みたい。

図版27



SK11（北から）



SK11出土状況（南から）

図版28



SK64 (東から)



ST08 (北西から)

ST10 (北西方向)



ST09 (北西方向)



图版29

図版30



SC06 (南から)



SD14 (南西から)



SD13 (北東から)



SD13 (西から)

図版32



SD13内ビット石出土状況（東から）



SD40（南から）

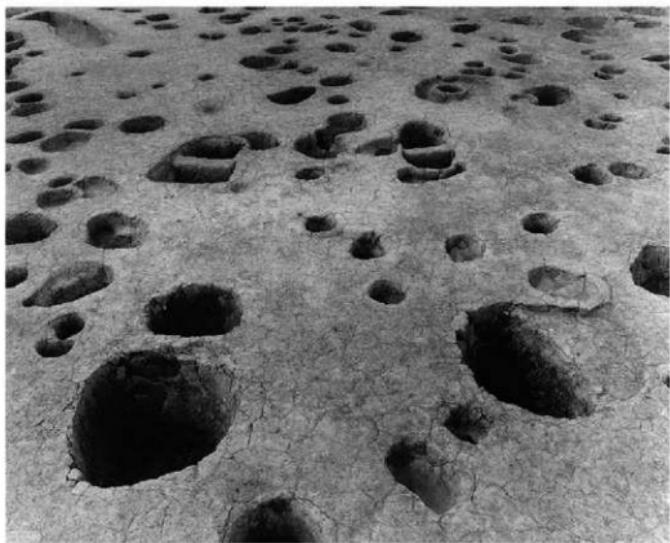


SD12(南から)



SD12土層断面(南から)

図版34

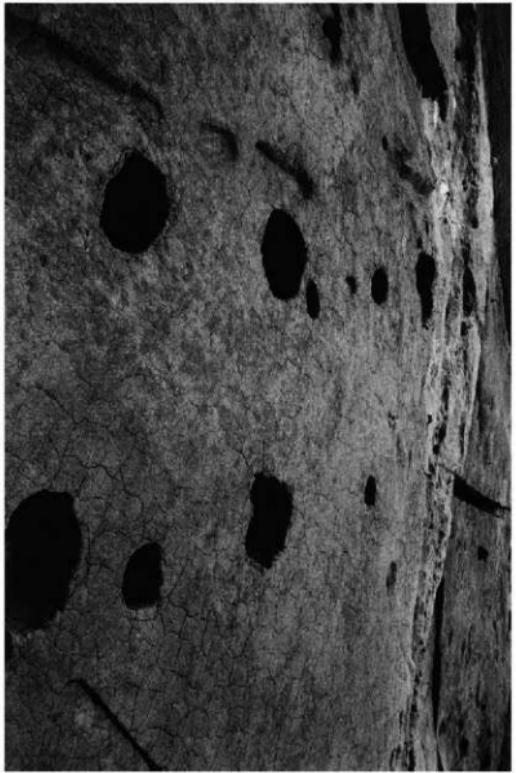


SB05 (南東から)



SB61 (北東から)

図版35



SB60 (北西から)

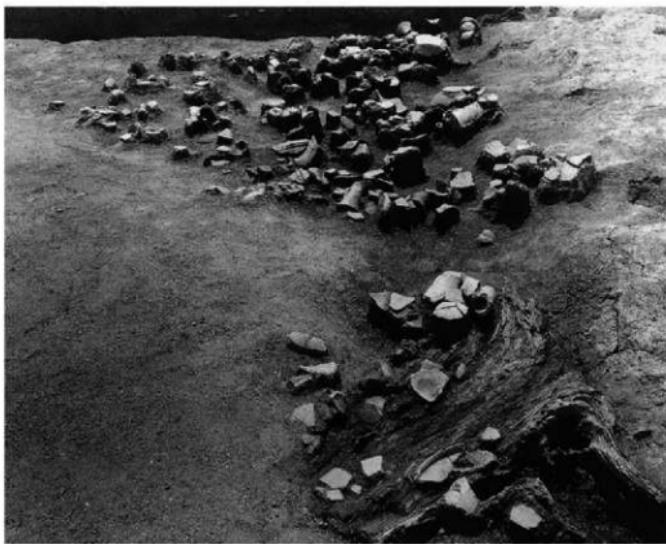


谷部西半・北岸包含層土壠断面（東から）

图版36



谷部西半 杵出土状况



谷部東半北岸 土器群1（東から）



谷部西半北岸 土器群2（西から）



SD65（北西から）

図版38



SD65ベルト 1 土層断面



SD65ベルト 2 土層断面



SD65ベルト 3 土層断面



SD65ベルト 4 土層断面

図版40



SD65ベルト 5 土層断面



SD65ベルト 6 土層断面



SD65③第1層遺物出土状況（南から）



SD65④第1層遺物出土状況（南から）

図版42



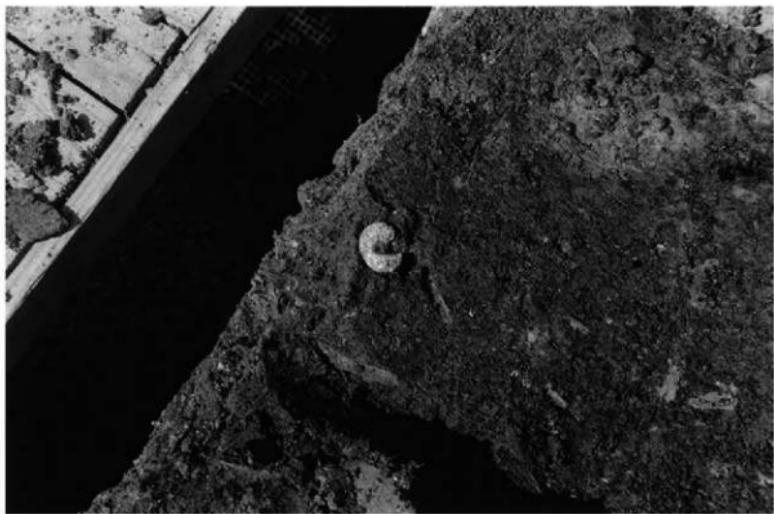
SD65⑤第2層遺物出土状況（東から）



SD65⑥第2層遺物出土状況（南から）



SD65ベルト②第2層ガラス勾玉出土状況（南東から）

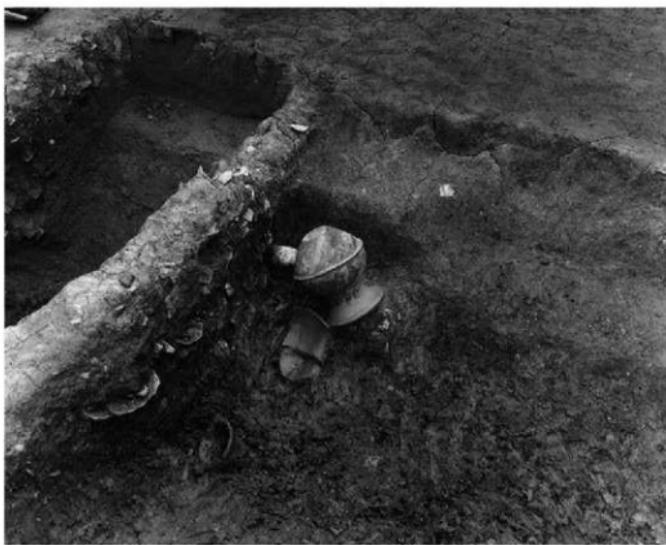


SD65ベルト③第1層ガラス玉出土状況（南から）

図版44



SD65⑥第1・2層石製品出土状況（北から）



SD65④第4層壺出土状況（北から）



SD65(5)第5層壺出土状況（南から）



SD65(5)第5層壺出土状況（北から）

図版46



SD65⑥第5層土器群出土状況（南から）



SD65⑦第5層壺出土状況（北から）



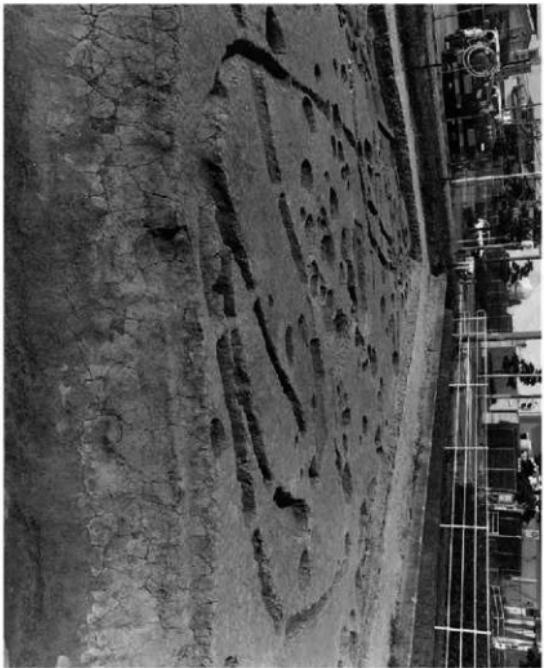
SD65①第6層土器出土状況（北から）



SD65ベルト③第6層土器出土状況（北西から）



SD65①第7層土器群出土状況（南から）



SD66（南西から）



SD80・SC89（南から）



SD80遺物出土状況（南から）

図版50



SB93 (北西から)



SB94 (北西から)



SB97 (南から)



SB98 (北東から)

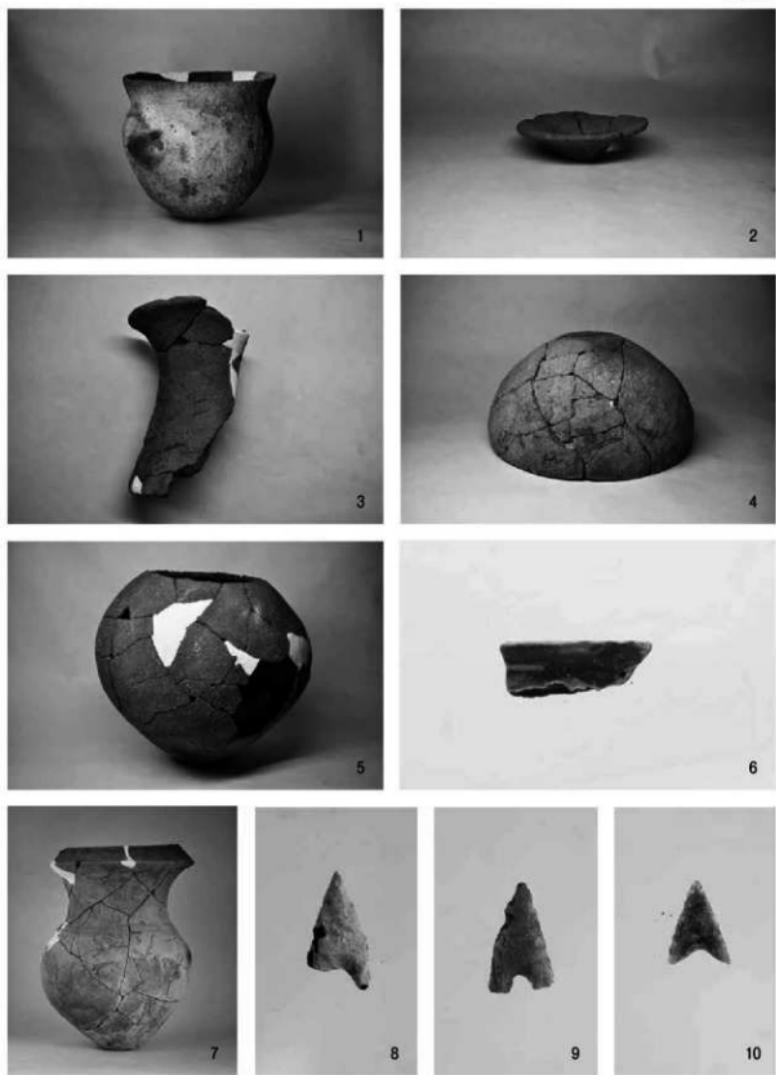
図版52



SC96 (西から)

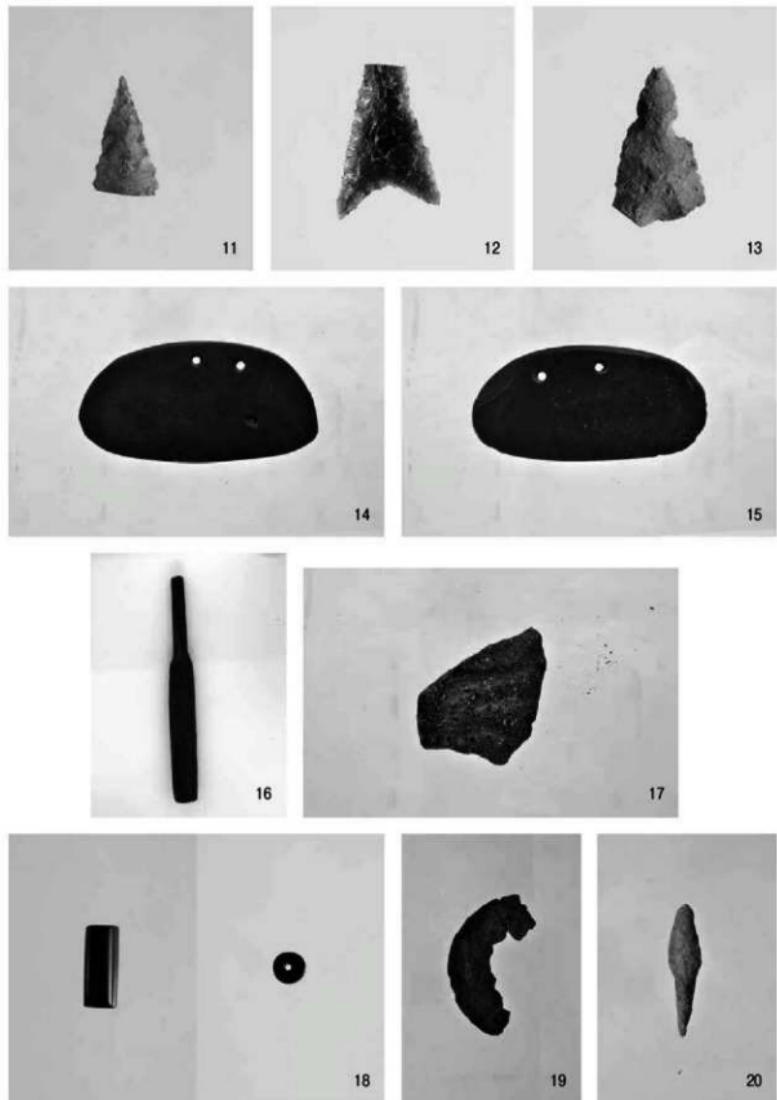


ST90 (西から)

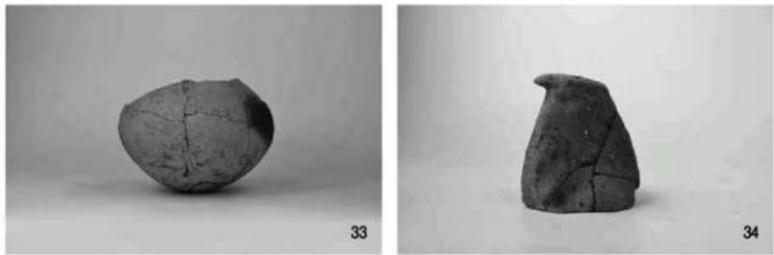
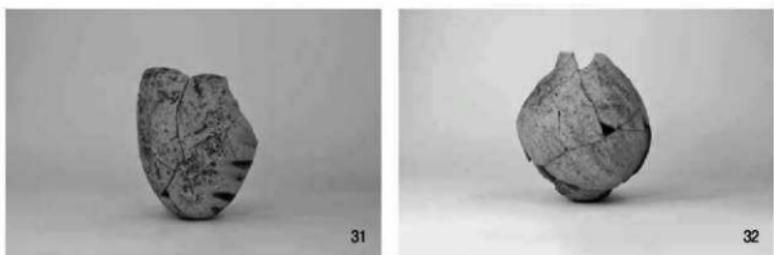
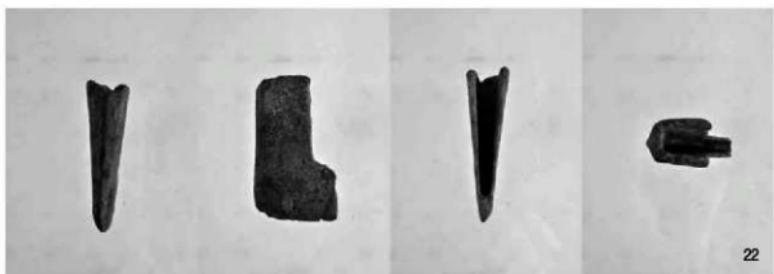
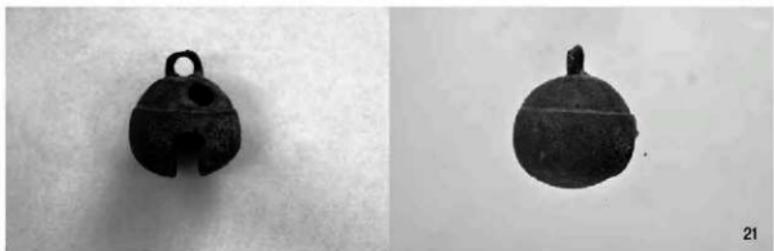


出土遺物 1

図版54



出土遺物 2



出土遺物 3

图版56



35



36



37



38



39



40



41



42

出土遗物 4



出土遺物 5

图版58



53



54



55



56



58



59

出土遗物 6



出土遺物 7

圖版60



74



75

出土遺物 8



76



77



79



80



81



84



85



86

出土遺物 9

图版62



87



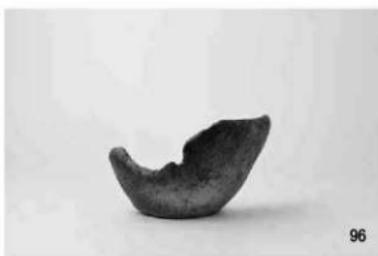
88



89



94



96



97

出土遗物10



98



99



100



101

出土遺物11

图版64



104



105

出土遺物12



106



107

出土遺物13

圖版66



出土遺物14



117



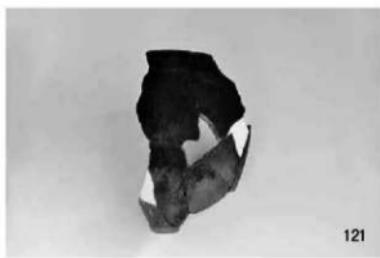
118



119

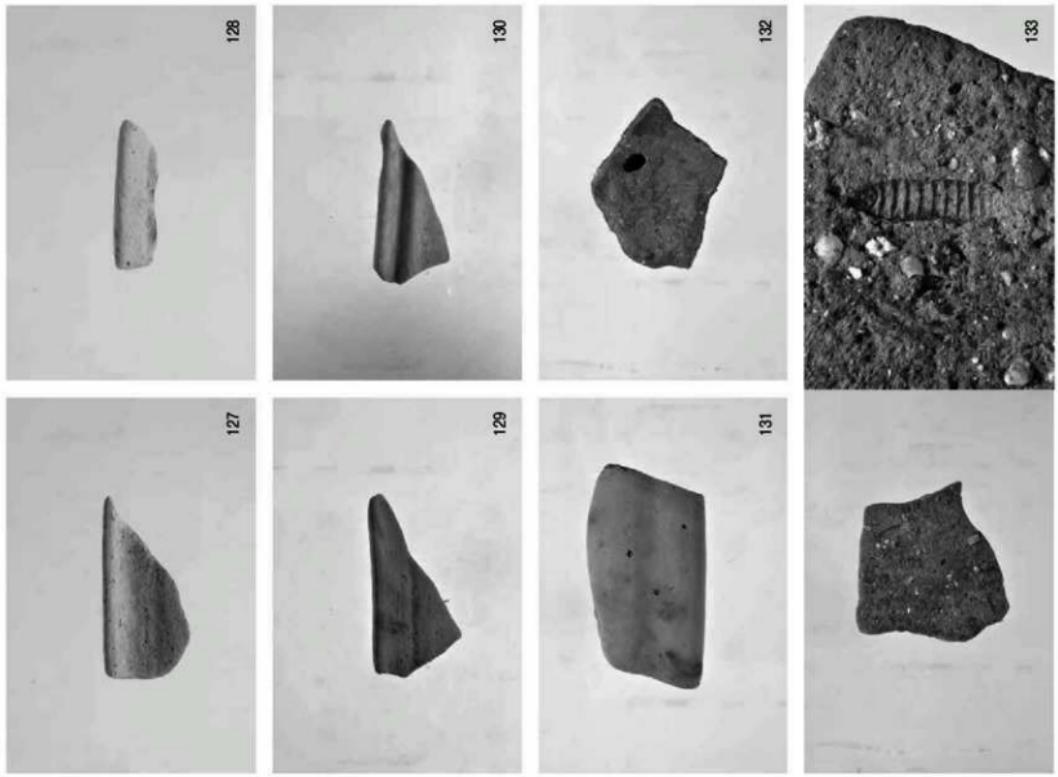


120

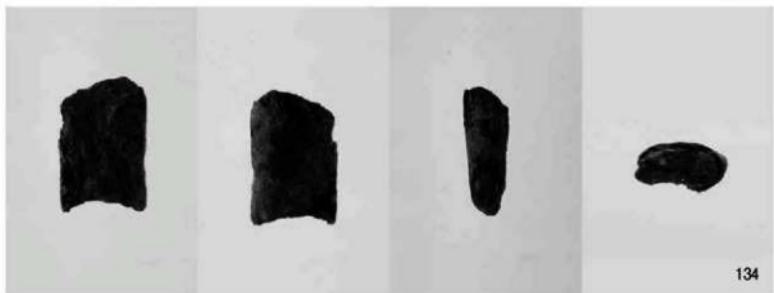


121

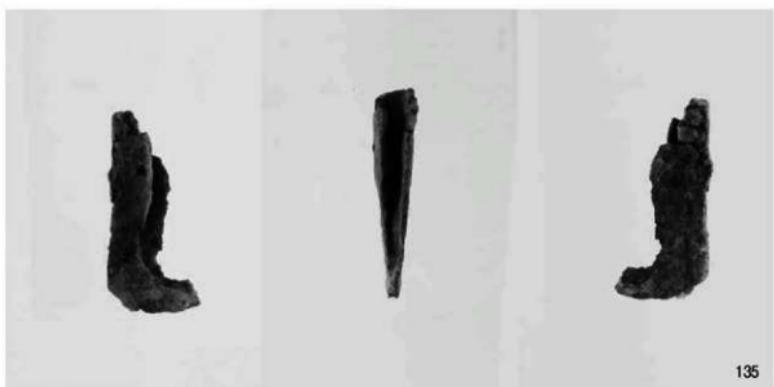
出土遺物15



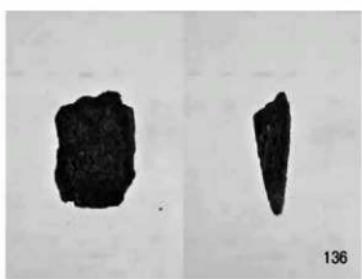
出土遺物16



134



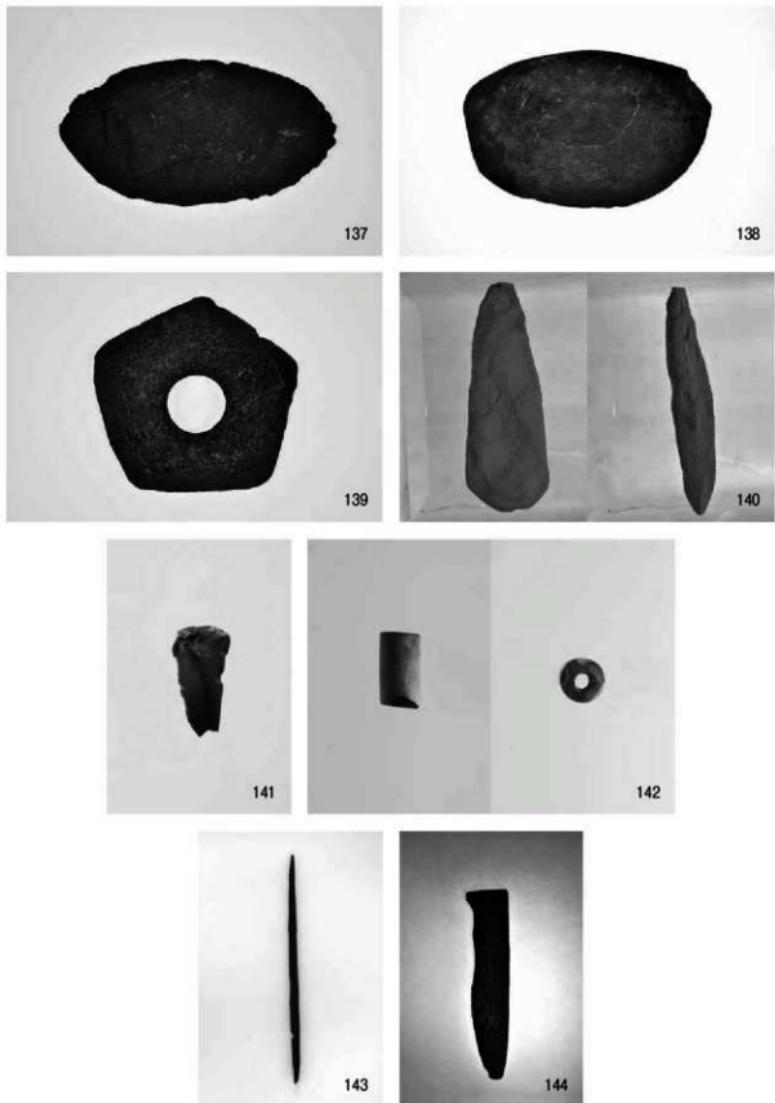
135



136

出土遺物17

圖版70



出土遺物18



145



146

出土遺物19

图版72



147



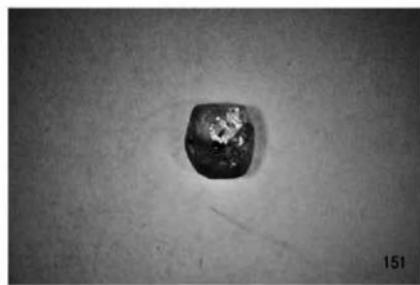
148



149



150



151



152

出土遗物20

報 告 書 抄 錄

ふりがな	おおつかいせきろく							
書名	大塚遺跡 6							
副書名	大塚遺跡第9次・第11次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1185集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2013年3月13日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
おおつかいせき 大塚遺跡 第9次	ふくおかしにしきいまじゅくまち 福岡市西区今宿町地内	市町村	遺跡番号			20061107 ～ 20070327	2,050	記録保存調査
おおつかいせき 大塚遺跡 第11次	ふくおかしにしきいまじゅくまち 福岡市西区今宿町地内	40130	0625	33度34分26秒 130度16分16秒		20070201 ～ 20070910	4,810	記録保存調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大塚遺跡	集落跡	弥生～中世	土坑、土器棺墓、溝、 竪穴住居、掘立柱建物、 祭祀跡、柱穴	弥生土器、土師器、須 恵器、中国産磁器、石器、 鉄器、青銅器、玉	弥生時代後期の環濠・ 掘立柱建物、古墳時代 中期の祭祀跡などを検出			
要約	大塚遺跡は福岡市西部、早良平野と糸島平野を分かつ高祖山より伸びる丘陵上に位置する集落遺跡である。今回の調査地点は今宿バイパスのすぐ北側、大塚古墳の立地する丘陵の東側に当たる。弥生中期～後期の土器棺墓、弥生後期の環濠、弥生後期～終末および中世の掘立柱建物、古墳中期の祭祀跡、溝、柱穴多数を検出した。							

大塚遺跡 6

大塚遺跡第9・11次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1185集
2013（平成25）年3月22日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9-6